ノートルダム清心女子大学

平成22年度　文部科学省
「大学生の就業力育成支援事業」選定プログラム

「保育職・教職のための体験型就業力育成」

事業報告書（外部評価書）

平成24年3月

Notre Dame Seishin University

ノートルダム清心女子大学

平成22年度　文部科学省
「大学生の就業力育成支援事業」選定プログラム

「保育職・教職のための体験型就業力育成」

事業報告書（外部評価書）

平成24年3月

Notre Dame Seishin University
ノートルダム清心女子大学

目　　次

はじめに　1
第１章　本取組の概要
1　本取組の概要　3
2　本取組の趣旨・目的・達成目標　5
3　具体的内容・実施体制　8
4　本取組の評価の目的・評価体制・評価方法　12
第２章　平成 22 年度・平成 23 年度実施報告
1　実施体制の整備・充実　14
2　本取組の PDCA サイクルの整備　15
3　保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの開講・実施
（1）保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの科目開講・実施　17
（2）学校園との連携　22
（3）ポートフォリオの取組　31
（4）カンファレンスの取組　37
（5）わらべうた講習会の実施　56
（6）事前事後指導の実施　59
4　保護者支援にかかわるイベント等への参加　64
5　先進事例及び他地区ＧＰフォーラム等への参加　75
6　栄養教諭、家庭・福祉を目指す学生の基礎実習・インターンシップの試行　78
7　卒業生支援への試行　97
8　アンケート調査の結果　104
9　本学公式サイトに GP 専用ページを開設　105
10　学修支援システムの試行的稼働と全学的実施　107
11　保幼小学修支援センター・実施本部事務局の取組　108
第３章　本取組の具体的な評価
1　子ども理解力、協働力、保護者支援力の達成度評価　109
2　総合的人間力の達成度評価　128
3　自己点検・自己評価　131
第４章　外部評価
1　外部評価報告書　141
2　連携学校園のアンケート調査結果　150
3　一般参加者等のアンケート調査結果　154
第５章　取組の総括と今後の課題
1　事業実施による効果　156
2　事業実施の課題　160

は　じ　め　に

ノートルダム清心女子大学　学長　髙木　孝子

この度ここに、文部科学省平成22年度就業力育成支援事業に採択された本学の取組、「保育職・教職のための体験型就業力育成」の平成22年度・23年度事業報告書を作成いたしました。この取組の期間中、東日本大震災や自然災害が各地に多く起こり、また、わが国や世界の経済情勢の緊迫等、さまざまな事態が大学生の就職活動に大きな影響を及ぼしております。

本学では本取組を通して、学生が就職したそれぞれの場所で、本学で学んだ力を発揮できるような、実践的能力の育成に取り組んで参りました。本学は、ノートルダム修道女会の創立者マザー・ジュリー・ビリアートの子女教育の理念に基づき、これまで60年余り女子教育に携わってまいりました。その成果は教育界に顕著で、保育職・教職に就く現職の本学卒業生は、現在1500名余に上っております。本学ではこの伝統をさらに充実させ、よりよい人材を育成するために、本取組において、学生が学校園での体験を通して「子ども理解力」、「協働力」、「保護者支援力」という、保育職・教職に必須の実践的能力を身につけることを目標といたしました。

幸いなことに、岡山市や倉敷市の教育委員会、連携学校園等の温かいご支援・ご協力を得まして、少しずつではありますが、目標が達成されつつあるところでございます。本事業が本年度で廃止になることはまことに残念ではありますが、この２年間にいただきました関係者の皆様のご支援・ご協力に深く感謝申し上げる次第です。

本学では今後もこの取組を継続していきたいと考えておりますが、この事業報告書をそのための一つのステップとして、皆様からの忌憚のないご意見やご助言を賜りますようお願い申し上げます。

この取組が多くの大学の参考となり、そして学生たちのための支援となりますよう、願ってやみません。

保育職・教職のための体験型就業力育成

第１章　本取組の概要

１　本取組の概要

（１）建学の理念に基づく教職就業力育成プログラム

本学の母体である修道女会の創立者マザー・ジュリー・ビリアートは貧しい子どもたちに教育を与えることに尽くした。この奉仕の精神がもう一人の創立者ブラン・ド・ブルドンの深い教養性と結びついて、世界に広がる教育ネットワークが生まれた。この伝統は、いまも真摯にボランティアに取組む本学の学生の姿に、また、教職員を多く輩出してきた就業実績に受け継がれている。とくに、本学の人間生活学部では、保幼小で子どもたちにかかわる教職員を輩出、栄養教諭や家庭科教諭のように子どもとのかかわりの深い教員養成を行っている。この伝統に基づき、本取組では、子どもと出会うボランティア等の実習を、リベラル・アーツの深い教養によって支え、地域ネットワークの活性化に貢献する、教職就業力育成プログラムを実施する（図１参照）。

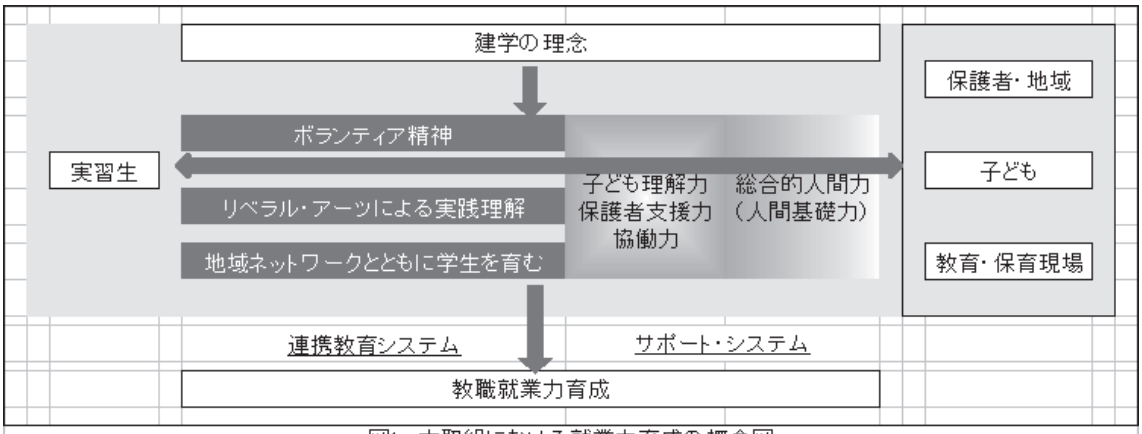


図1　本取組における就業力育成の概念図

本取組は、保育職・教職を目指す学生を対象に、学生の資質向上を図り、就業力を高めることを目的とする。本取組における就業力とは、「総合的人間力」「子ども理解力」「保護者支援力」「協働力」である。「総合的人間力」は本学の理念であるキリスト教精神とリベラル・アーツを主体とした全人格的教育によって育成してきている。しかしながら、保育職・教職に特化した能力（子ども理解力、保護者支援力、協働力）の育成には更なる体験型教育と支援が必要となる。

教職就業力育成プログラムは、保育職・教職にとって不可欠な実践的能力である、「子ども理解力」、「保護者支援力」、「協働力」の育成を図るプログラムである。これらの実践的能力は単に理論や知識の獲得のみで身につくものではなく、実体験を通して学生自らが省

察し、知識・理論との統合を図ることによって、はじめて実践的能力として養われる。

これらの実践的能力を育成するプログラムは、連携教育システム及びサポート・システムから構成される。

（２）連携教育システムについて

観察・体験型の授業として、教育実習前の２，３年生を対象にした保育･教育基礎実習と教育実習後の４年生を対象にした保育・教育インターンシップの科目を開講する。附属学校園及び岡山市・倉敷市の学校園と連携し、継続的な実体験の場を提供してもらい、学生は実体験をポートフォリオに記録し、それらをもとに連携学校園参加のもとでカンファレンスを行う。また、大学の事前事後指導を適宜実施し、学生自らが保育職・教職への適性・資質を省みるとともに、現場目線から見つめ直す機会を提供する。連携学校園での行事等に参加して保護者とかかわる機会を設けるようにする。

（３）サポート・システムについて

連携教育システムを円滑かつ効果的に実施するために、「保幼小学修支援センター」を開設して、学生への指導・助言に加えて、観察・体験型授業の支援、連携学校園での合同カンファレンスの企画・運営、教職ポートフォリオの管理等を行う。保幼小学修支援センターには、教育・行政経験の豊富なコーディネーターや事務補佐員を雇用、カンファレンス等にかかわる支援員とともに学生の実体験に基づく就業力の育成を支援する。また、本学学務部（キャリアサポートセンター、教務係、学生係）と協働して教職員が連携して学生をサポートできるシステムを構築するとともに、既存のソフト（ユニバーサルパスポート）を拡充する（図２参照）。

以上のプログラムを実施し、その実施状況や成果を公開・評価する（図２参照）。プログラム実施部門は「教職就業力育成プログラム実施本部」で、連携教育システム及びサポート・システムの中核的存在である。その上位の組織として、「教職就業力育成代表者委員会」を置き、本取組の方針策定、実施状況の検証、本取組の情報公開、成果の内部評価、フォーラム等の企画等の役割を担う。また、外部評価組織として「教職就業力評価委員会」を設置、本取組の評価や本取組について大学へ指導助言を行う。

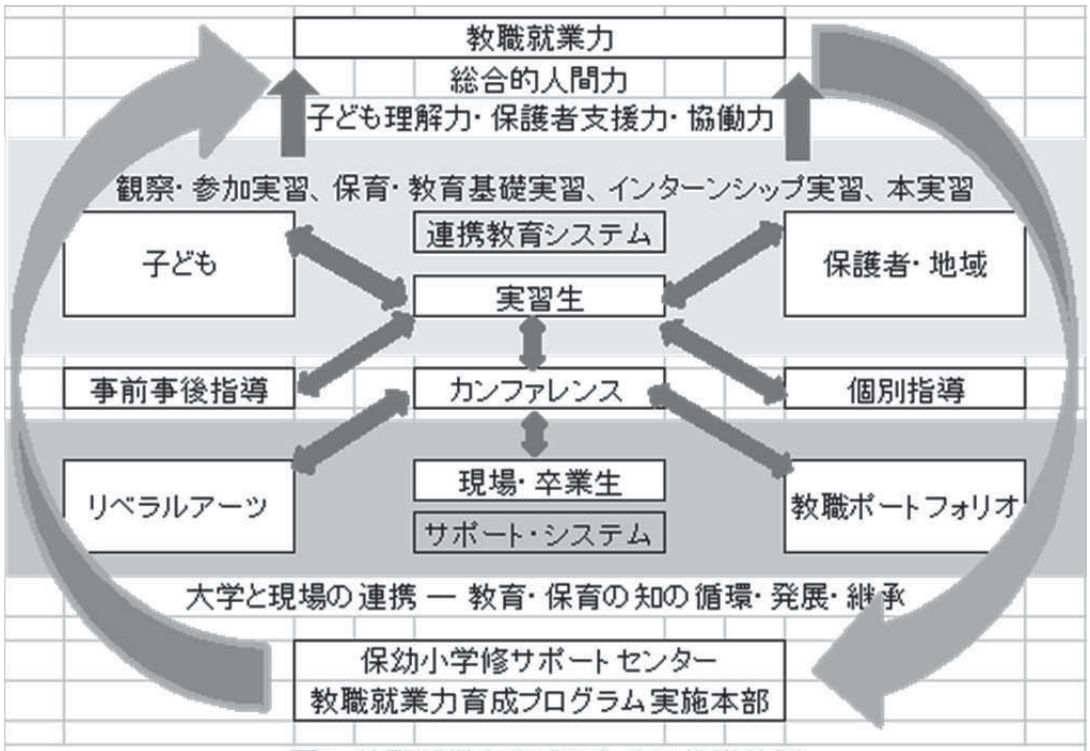


図2　教職就業力育成のための指導体制

２　本取組の趣旨・目的・達成目標

（１）取組の趣旨・目的

本学の卒業生約 1500 名が保育園、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、特別支援学校の教員、保育士として子どもの教育にあたっている。昨今の保育･教育の現場では現場の経験を積んだ即戦力の人材を求める声が大きくなってきている。本学人間生活学部でも保育実習、教育実習以外にボランティア等の機会を活用して現場での実践を積んでいくよう推奨してきており、参加している学生も増えてきている。しかし、現状は学生の主体的な取組に頼っているところが多く、実学的専門教育の取組として十分とは言い難い状況にある。

そこで、本取組において、質の高い保育･教育を行い、リベラル・アーツの知に基づいて自らの実践を広い視野から省察することができる保育士・幼稚園教諭・小学校教諭・中学校教諭・高等学校教諭（家庭・福祉）・特別支援学校教諭・栄養教諭の養成を目指して取組んでいくこととした。

本学附属学校園、岡山市・倉敷市の保育園、幼稚園、小学校等の学校園との連携を深め、学生が学校園の現場で実体験を継続・深化させることで、子ども理解力、保護者支援力、協働力の実践的能力を向上させることを本取組の目的とする。

（２）取組の達成目標

学生は本取組に積極的に参加し、入学当初から計画的に学校園の現場で実践経験を積み、子ども理解力、保護者支援力、協働力の実践的能力を向上させ、卒業後、即戦力の人材と

して教育現場に寄与することを目標としている。大学で育成する「子ども理解力」、「保護者支援力」、「協働力」の実践的能力の達成目標を設定するために、連携学校園の教員・保育士、保護者を対象にアンケート調査を行った。

まず、教員・保育士の調査は、連携学校園の小学校教員（47 名）・幼稚園教員（53 名）・保育士（62 名）計 162 名で実施した。調査の結果、学校園の教員・保育士が求める就業力は、「子ども一人一人のよさに気づく力」「子どもが親しみを感じる明るさや温かさを伝える力」「子どもとともに遊びを楽しむ力」「子どもの興味・関心をもとに遊びの環境を構成する力」「役割分担したり仲間と力を合わせたりして責任を持ってやり遂げる力」「学校園の先生に報告・連絡・相談する力」「保育実践を振返り、保育の改善点を見つける力」などであった。小学校では、「子どもの様子を観察する力」「子どもとのコミュニケーション力」「授業を計画・実践する力」「子どものトラブルに対応できる力」「役割分担等仲間と力を合わせて取組む力」などを求めている。

次に、連携学校園の保護者、保育園（144 名）、幼稚園（370 名）、小学校（42 名）計 556 名で実施した。学校園の保護者が求める就業力は、幼保では、「子どもが親しみを感じる明るさや温かさを伝える力」「保護者とのコミュニケーション力」「子ども一人一人のよさに気づく力」「子どもとともに遊びを楽しむ力」「子どもの発達や興味・関心を踏まえて保育を計画する力」「役割分担したり仲間と力を合わせたりして責任を持ってやり遂げる力」などであった。小学校では、「子どもの様子を観察する力」「子どもとのコミュニケーション力」「授業を実践する力」「子どものトラブルに対応できる力」「役割分担等仲間と力を合わせて取組む力」などを求めている。

調査の結果、学校園の教員・保育士、保護者は、卒業後保育職・教職に就く学生に、「子どもが親しみを感じる明るさや温かさ」等のような教職に必要な資質、「子ども一人一人のよさに気づく力」「子どもとともに遊びを楽しむ力」等のような子ども理解力、「保護者とのコミュニケーション力」等のような保護者支援力、保育･授業の計画・実践力、「役割分担等仲間と力を合わせて取組む力」などの協働力等の実践的能力を求めていることがわかった（図 3－1～2 参照）。

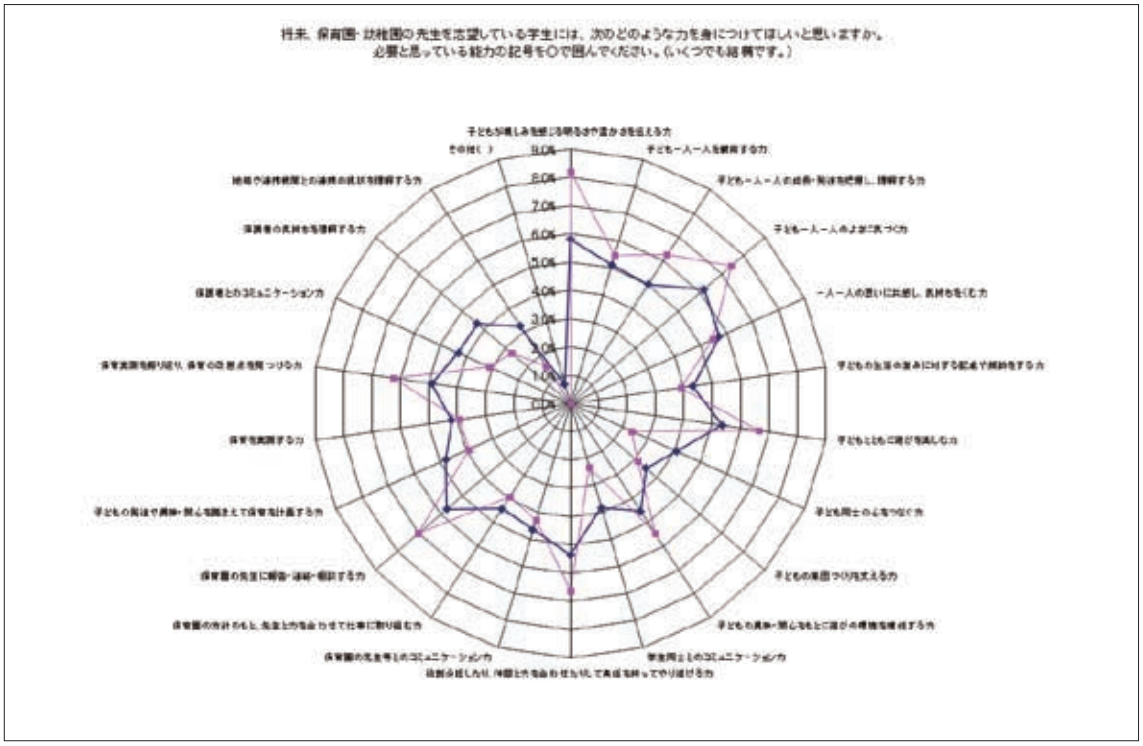


図 3－1：連携学校園の教員・保育士が求める就業力集計結果

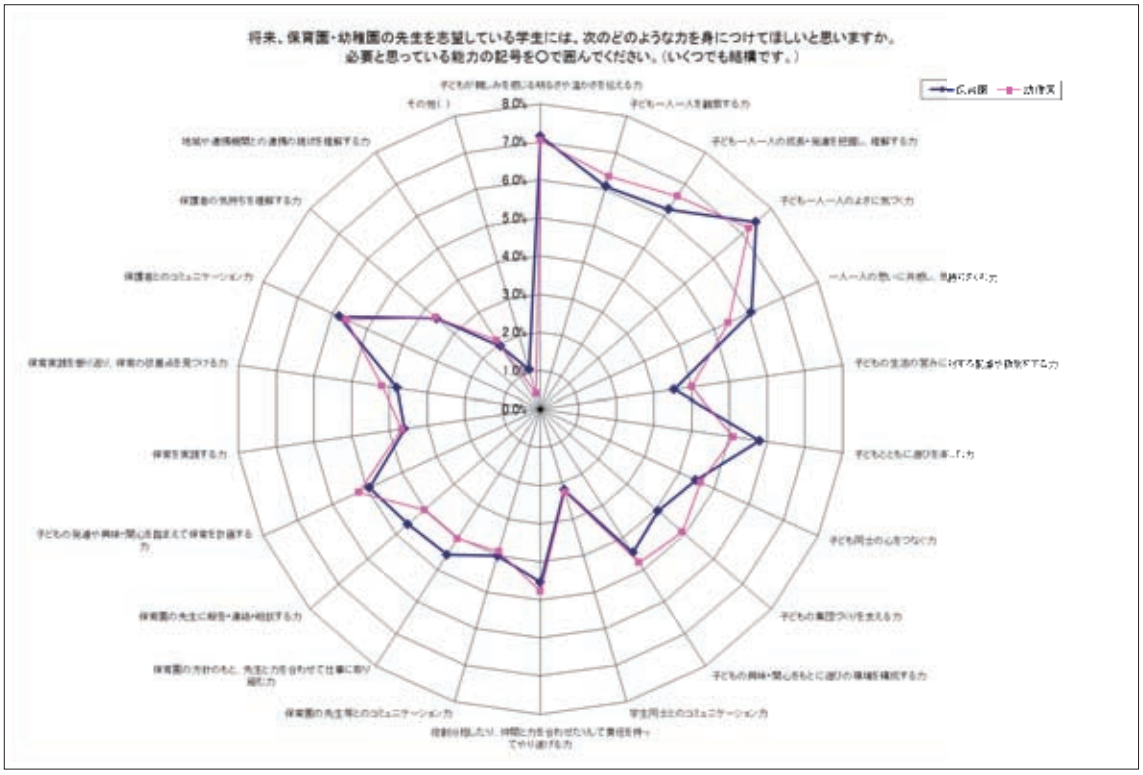


図 3－2：連携学校園の保護者が求める就業力集計結果

そこで、次のように達成目標を仮設定し、実践を通して検証し、修正して大学における

達成目標を設定していくこととした。

○子ども理解力の達成目標は、「子どもの発達や心身の状況に応じて、子どもの様子や抱える課題等を理解することができる」（子どもの実態を理解する力）、「子どもとのコミュニケーションを図っていくことができる」（子どもとのコミュニケーション力）、「子ども同士のトラブルについて学校園の指導のもとでかかわっていくことができる」（子どものトラブルに対応できる力）等の実践的能力の育成である。

○保護者支援力の達成目標は、「保護者等の気持ちや活動の様子等が理解できる」（保護者等の気持ちを理解する力）、「保護者等とのコミュニケーションを図っていくことができる」（保護者とのコミュニケーション力）等の実践的能力の育成である。

○協働力の達成目標は、「学校園の先生等の仕事について理解することができる」（学校園の先生等の仕事について理解する力）「学校園の先生等とのコミュニケーションを図っていくことができる」（学校園の先生等とのコミュニケーション力）等の実践的能力の育成である。

３　具体的内容・実施体制

（１）具体的内容

平成２２年度・２３年度に実施した具体的内容を次のように整理した。

取　組	達成目標	具体的取組
① 実施体制の整備・拡充 23 年度①⑮ 22 年度①②	●教職就業力育成代表者委員会・実施本部・保幼小学修支援センターと学校園は連携して本取組を実施できている ●キックオフミーティングや総括のためのセミナーが行われている	○教職就業力育成代表者委員会・実施本部・保幼小学修支援センターは連携して本取組を推進する。 ○連携学校園において学外実施委員会を開催する ○キックオフミーティングを行う ○総括のためのセミナーを行う
② 本取組の PDCA サイクルの整備 22 年度②	●内部組織Ａ、学外連携組織Ｂ、連携組織Ｃ、学外実施組織Ｄはそれぞれ機能して行われている ●評価体制Ⅰ～Ⅲはそれぞれ機能して行われている	○内部組織Ａ：教職就業力育成代表者委員会は企画や方針の策定、進捗状況の検証等を行う ○内部組織Ａ：教職就業力育成プログラム実施本部はプログラムの策定、実施方針や実施計画の決定、目標達成度調査等を行う ○学外組織Ｂ：教育界、大学コンソーシアム岡山等と協力して行う ○連携組織Ｃ：保幼小学修支援センター、キャリアサポートセンター等は内部組織Ａと連携して本取組を推進する ○学外実施組織Ｄ：学外実施委員会を設置して基礎実習・インターンシップに取組む ○教職就業力評価委員会Ⅰは本取組の評価を行う ○教職就業力育成代表者委員会Ⅱは進捗状況の検証を行う ○学外実施委員会Ⅲは基礎実習・インターンシップの実施状況を評価する

③　基礎実習･インターンシップ 23年度②③④⑤⑥ 22年度⑤⑥⑦	●連携学校園等において基礎実習、インターンシップが実施できている ●ポートフォリオとカンファレンスが実施できている ●大学の事前事後指導が適切に行われている	○基礎実習、インターンシップを連携学校園等で行う ○学生は基礎実習・インターンシップでの活動をポートフォリオに記録する ○ポートフォリオをもとにＧＰ支援員等からアドバイスを受ける ○学外実施委員会による合同カンファレンスに参加する ○大学は適宜事前事後指導を行う
④　保護者支援 23年度⑧	●保護者とかかわる機会を作って本取組を実施している	○保育園、幼稚園、小学校での保護者とのかかわりの機会を持つ ○保護者等の前で発表会をもつ
⑤　先進事例 23年度⑨ 22年度④	●先進事例等に参加して、本取組の内容等に生かしている	○先進校を訪問研修する 全国規模のフォーラムに参加・研修する
⑥栄養教諭、家庭・福祉の学生 23年度⑩	●基礎実習・インターンシップを試行して、24年度からの取組の準備をしている	○食品栄養学科の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップを試行する ○家庭・福祉の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップを試行する
⑦　卒業生支援 23年度⑪	●保育職・教職にかかわる卒業生支援を試行する	○卒業生の集いにおいて本取組を報告する ○卒業生が合同カンファレンスにアドバイザーとして参加する ○卒業生の勉強会・相談会を行う
⑧アンケート調査 23年度⑫⑬⑭ 22年度⑩	●活動状況をチェックし、学生の達成度評価、アンケート調査等、本取組にかかわる調査が実施できている	○学生へ達成度評価、アンケート調査を実施する ○連携学校園に、学生や本取組等についてアンケート調査を実施する ○本取組の自己点検・自己評価を実施する

	●各事業の自己点検・自己評価を実施し、実施報告書・評価書にまとめることができている	○総括のためのセミナーにおいてアンケート調査を実施する ○自己点検・自己評価を実施し、各事業の取組状況を調査する ○実施報告書及び評価書を作成する
⑨本学公式サイト 22年度⑧	●大学ホームページ等に掲載され、本取組の内容等が公開されている	○本取組について内外に公開する
⑩学修支援システム 22年度③⑨	●学修支援システムが試行的に稼働し、履修登録を全学的に実施できている	○履修登録を全学で実施する ○マイコース・コミュニティを学生が利用できる

図４：平成２２年度・２３年度に実施した具体的内容

（２）実施体制

本取組の実施体制は、内部組織Ａ：教職就業力育成代表者委員会は企画や方針の策定、進捗状況の検証等を行う。教職就業力育成プログラム実施本部はプログラムの策定、実施方針や実施計画の決定、目標達成度調査等を行う。学外組織Ｂ：教育界、大学コンソーシアム岡山は本取組への協力をする。連携組織Ｃ：保幼小学修支援センター、キャリアサポートセンター等の学内組織は内部組織Ａと連携して本取組を推進する。学外実施組織Ｄ：学外実施委員会を設置して基礎実習・インターンシップに取組む（図５参照）。

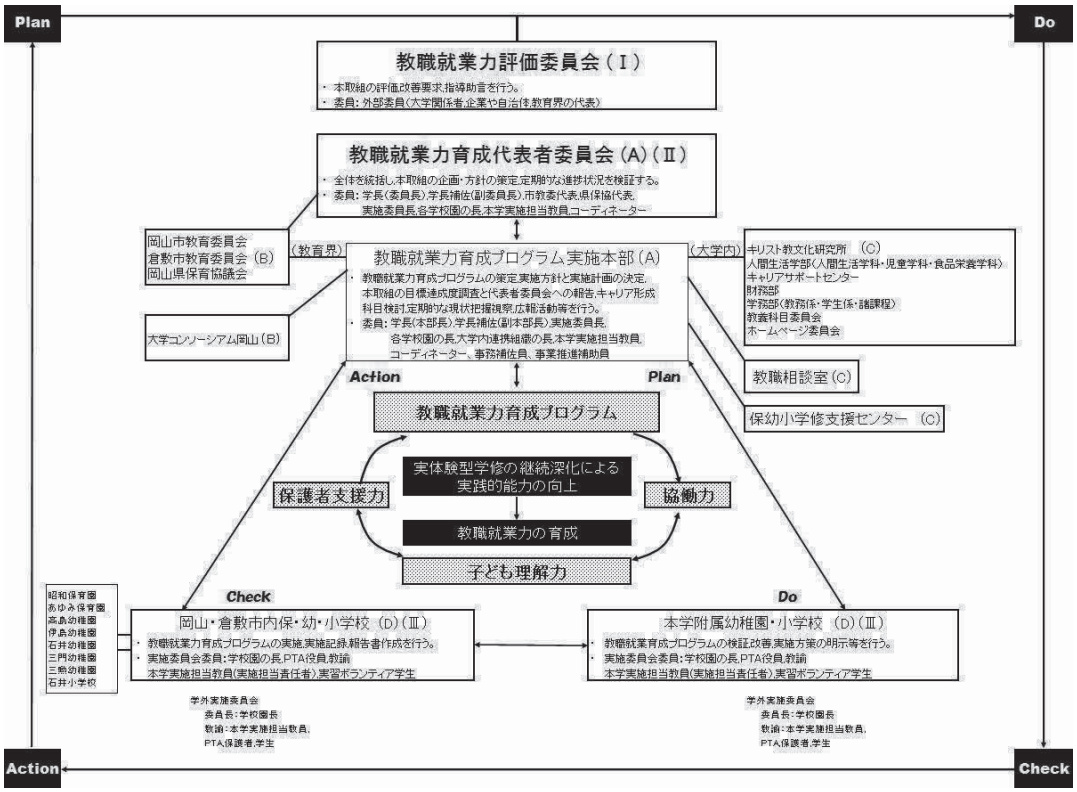


図５：本取組の実施体制

４　本取組の評価の目的・評価体制・評価方法

（１）評価の目的

教職就業力育成プログラムが学生の保育職・教職としての実践的能力育成に成果を上げているかどうかを客観的、継続的に評価する。

（２）評価体制

評価体制は、外部組織Ⅰに加えて、内部組織にも評価組織Ⅱ、Ⅲを置く（図５参照）。

外部組織として、教職就業力評価委員会Ⅰを置く。教職就業力評価委員会Ⅰは、企業、大学関係者、自治体、教育界等の代表で構成され、本取組の方針が実施計画通りに実施されているか、その成果は当初の目的に適っているか、PDCA サイクルが機能しているかなど、客観的、継続的に評価する。

内部組織の評価体制は、教職就業力育成代表者委員会Ⅱと学外の学外実施委員会Ⅲに置く。教職就業力育成代表者委員会Ⅱは、本部長、実施委員長、コーディネーター、本学実施担当教員、学内の組織の長で構成され、実施方針や実施計画が策定通りに実行されているか、教職就業力育成プログラムが策定通りの実効性を持っているか、内部組織と学外実施委員会間の PDCA サイクルが機能しているか、学外実施委員会が当初の目的に適った機能を果たしているか等、定期的、客観的、継続的に評価し、必要に応じて、教職就業力育成プログラム実施本部の役割や機能に修正を行う。学外実施委員会Ⅲは当該学校園長、学

校園の教員、保護者代表、本学実施担当教員で構成され、本取組の実施報告書を作成、必要に応じて教職就業力育成プログラムの修正を行う。

（３）評価方法

教職就業力評価委員会から本事業の取組について評価を受ける。また、本取組について、学生による評価、連携学校園による評価、一般参加者による取組の成果と意義の評価を実施する。

学生の就業力の目標達成度の評価は、学生の自己評価、学生のポートフォリオ、学外実施委員会からの実施報告書、キャリアサポートセンターからの就業率の統計的な推移などの客観的な資料、学生や学校園へのアンケート調査結果を指標にして行う。

学校園の学外実施委員会の評価は、実施報告書、学生や学校園へのアンケート調査結果を指標にして行う。

一般参加者による本取組の成果と意義の評価は、セミナーを開催し、学生や本学担当教員の発表に対する素直な意見や感想を指標にして行う。また、全国規模のフォーラムなどにも参加し、他の取組との比較による、本取組の内容や成果について評価する。

第 2 章　　平成 22 年度・平成 23 年度実施報告

１　実施体制の整備・充実

（１）平成 22 年度の取組

平成 22 年度は 9 月 29 日、第 1 回教職就業力育成代表者委員会を開催し、事業の具体的な取組や実施体制等基本的な事項について話し合った。10 月 8 日第 2 回教職就業力育成代表者委員会を開催、コーディネーターや事務補佐員、教職就業力評価委員、代表者委員会外部委員などの選定を行い、11 月末にはコーディネーターや事務補佐員の雇用と各委員の委嘱を終えた。11 月 29 日保幼小学修支援センター第 1 回会議を行い、平成 22 年度試行する内容等について検討した。12 月 18 日キックオフミーティングを開催し、教職就業力育成代表者委員会、教職就業力評価委員会、就業力育成プログラム実施本部の合同会議を実施した。以後、就業力育成プログラム実施本部や保幼小学修支援センターが中心となって試行を始める。実施可能な附属学園、保育園・幼稚園を中心に保育・教育基礎実習や保育･教育インターンシップ（以下、基礎実習・インターンシップと略して使用する。）を試行した。3 月、試行している連携学校園において学外実施委員会を実施して平成 23 年度からの取組等について検討した。

（２）平成 23 年度の取組

試行をもとに、平成 23 年度 4 月からコーディネーターや事務補佐員を就業力育成プログラム実施本部や保幼小学修支援センター事務局として起用し、大学の各部署の代表者参加による新しい実施体制を整えることができた。各事業①～⑮の実施計画書を作成・検討し、毎月 1 回の定例教職就業力育成代表者委員会、毎週 1 回の定例保幼小学修支援センター会議を開催して、実施計画をもとにした具体的な取組が円滑に推進できるようにした。

平成 23 年度から新たに岡山市・倉敷市教育委員会の協力を得て連携学校園を増やして基礎実習・インターンシップを実施することになった。連携学校園の協力を得て学生の基礎実習、インターンシップを円滑に推進することができた。

（３）実施体制の整備・充実の効果

平成 22 年度・平成 23 年度実施計画書、実施報告書等をもとに、サポート・システムが有効に機能していたかどうかについて自己点検・自己評価を行った。自己点検・自己評価では大学内での共通理解、連携学校園との連絡調整、各事業の推進状況等サポートの状況

について評価した。その結果、サポート・システムが次第に有効な働きをすることができるようになり、学生にとって基礎実習・インターンシップに取組やすくなってきたと評価された。各事業の推進状況から、学生が保護者と接触する機会が少なく、保護者参加による学外実施委員会の開催の難しさが課題としてあげられた。

２　事業の PDCA サイクルの整備

（1）本取組の PDCA サイクル

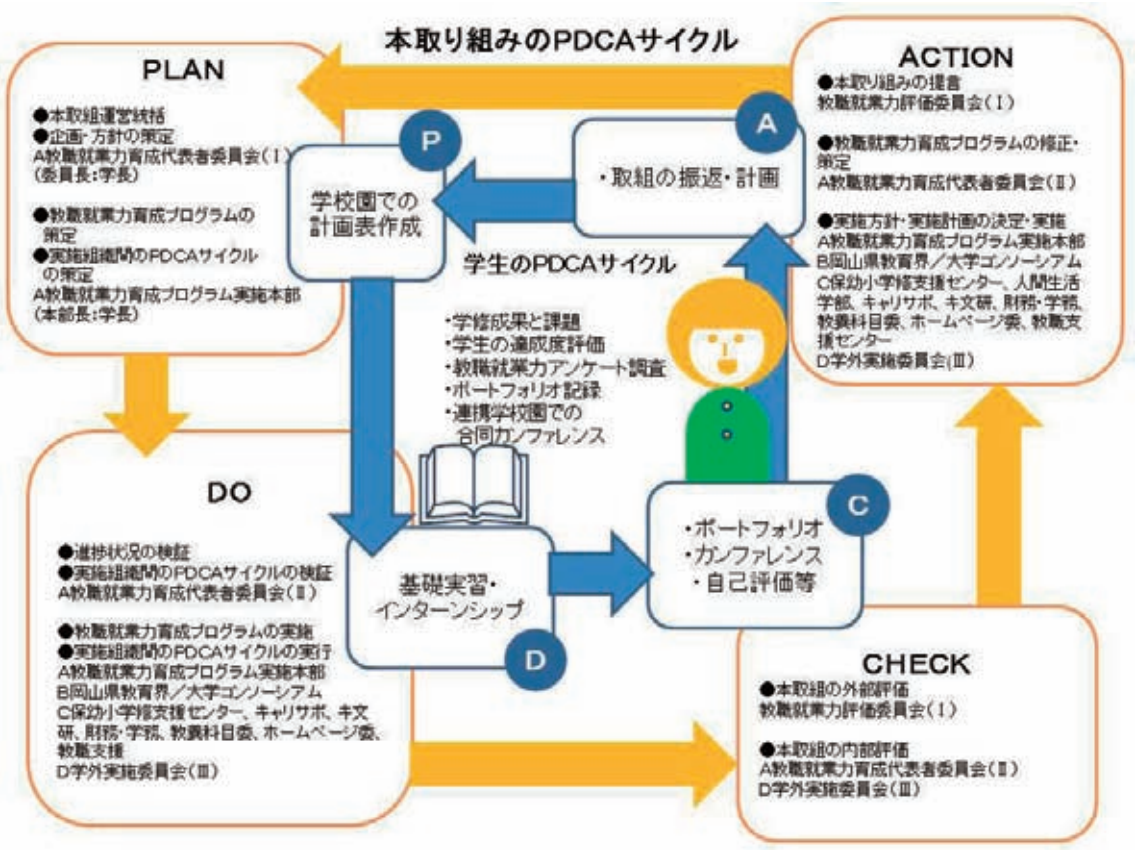


図 6：本取組のＰＤＣＡサイクル

本取組の当初の計画（P）がどのように実行（D）されているか、定期的、客観的、継続的に検証し、外部評価や自己点検・自己評価等（C）を通して、修正しながら、また、新たに取組んでいく（A）、PDCA サイクルを整備した（図 6 参照）。

（2）キックオフミーティングの実施とその効果

平成 22 年 12 月 18 日、本取組のキックオフミーティングを行った。本学髙木孝子学長のあいさつに続いて、文部科学省高等教育局大学振興課渡邉倫子教員養成企画室長から、「教員養成への期待」と題しての特別講演が行われた。その後、本取組の概要説明が行われた。学内外から 135 名の参加を得て、本取組について広く理解を得る機会となった。

（キックオフ「保育職・教職のための体験型就業力育成」の要項参照）

キックオフミーティングについてのアンケート調査は次の通りである（図 7－1～2 参照）。

＜キックオフミーティングの取組と効果＞

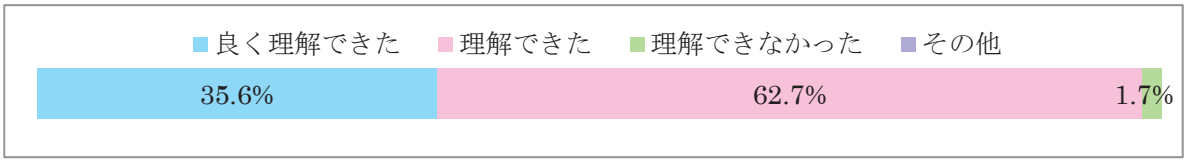


図７－１：本事業の取組について

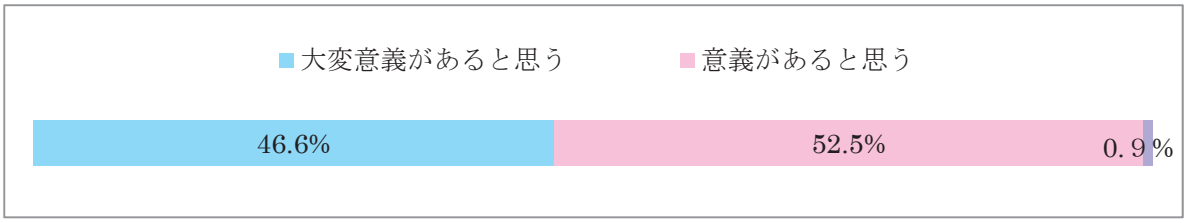


図７－２：事業の効果について

内外の関係者が一堂に会し、認識の共有とプログラムの実施のための連携を図る糸口となった。

（３）平成 22 年度・平成 23 年度総括のためのセミナーの実施とその効果

保幼小学修支援センター、教職就業力育成プログラム実施本部事務局で本取組の企画や具体的な実践等について毎週定期的に検討した。それらの進捗状況は毎月定期的に行う教職就業力育成代表者委員会に報告、取組の評価や具体的な実施計画等について協議し、教職就業力育成代表者委員会での承認を得て本取組の実践を進めてきた。これまでに、保幼小学修支援センター、教職就業力育成プログラム実施本部事務局の会合は 43 回、教職就業力育成代表者委員会は 27 回の会議を開いて検討を重ねてきた。また、本取組について、学生、連携学校園、大学等へ、その都度アンケート調査を実施して、成果と課題を探ってきた。平成 22 年度・平成 23 年度の取組を資料にまとめて、平成 24 年 3 月 17 日の総括のためのセミナーを開催した。参加者は 108 名であった。

本学髙木孝子学長のあいさつの後、藤原章夫文部科学省初等中等教育局教職員課長から、「就業力の育成と時代の変化に対応した大学改革について」と題しての特別講演が行なわれた。講演後、2 年間の取組の概要、本事業の具体的な取組について実践報告をした。また、学生（4 名）からインターンシップの体験報告をした。続いて、人間生活学科の試行、食品栄養学科の試行について報告した。

総括のためのセミナーの後、教職就業力評価委員出席のもと、教職就業力育成代表者委員会、教職就業力育成プログラム実施本部の合同会議を開催し、これまでの取組とこれからの取組について協議した。

また、教職就業力評価委員から、平成 22 年度・平成 23 年度の取組についての外部評価報告書をいただいた。

３　保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの開講・実施

（１）保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの科目開講・実施

ア　平成 22 年度試行の成果と課題

キックオフミーティングを機会に、試行に取組むことができた。1 月から 3 月にかけて行った試行は、基礎実習・インターンシップ、ポートフォリオへの記録、合同カンファレンスの実施、連携学校園での学外実施委員会などである。試行してみて、学校園の内部事情、学生のゆとりなどいろいろな問題があることがわかった。また、ポートフォリオはマナバフォリオにおけるネット上を利用することを目指していたが、ノート形式が簡便で、振返りやすい等の利点があることもわかってきた。学外実施委員会での合同カンファレンスに参加した学生から「よかった」と評価されたが、それぞれの合同カンファレンスでの参加者がそれほど多くなかったのが課題となった。

そこで、次の点を改善して取組んだ。一つは学校園ごとに、毎月、だれが、いつ、基礎実習やインターンシップに行くのか、計画表を作成して各学校園との連携を密にした。二つめは、ポートフォリオはノート形式でもネット上でもよいこととして取組みやすくした。三つめは、ポートフォリオの記録が学生に役立つよう、ポートフォリオについての研修の機会を設けた。四つめは、全員合同カンファレンスの良さが体験できるよう、大学において保幼・小別等で実施することにした。五つめは、各学校園での学外実施委員会は基礎実習・インターンシップでの体験を振返る上でたいへん有効だったので多くの学生が体験できるよう、誰でも参加できるようにした。

イ　保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの科目開講・実施

平成 23 年 4 月、2 年生・3 年生を対象に基礎実習について、下記の「保育・教育基礎実習の手引」をもとに説明した。また、同じように 4 年生を対象にインターンシップについて、「保育・教育インターンシップの手引」をもとに説明した。

保育・教育基礎実習の手引き

１　保育・教育基礎実習とは

本学児童学科では，1 年次に附属幼稚園と附属小学校において観察実習を，2 年次に附属幼稚園と附属小学校において観察・参加実習を行っている。新たに開設した「保育・教育基礎実習」は，大学の授業の一環として単位化された科目である。これらの科目の実施に際しては，事前事後指導を大学で各担当が行う。

この「保育・教育基礎実習」は，①ボランティア実習（事前・事後指導やカファレンス等の時間も合わせてよい）を 90 分× 15 回分以上取り組むこと，②ポートフォリオにボランティア活動の記録を残すこと，③カンファレンス（年間数回）を受けることにより 1 単位取得することができる。

なお，「基礎実習」と「インターンシップ」の違いは，保育実習・教育実習を修了しているかどうかである。基礎実習では，毎週決まった曜日に継続的にボランティア実習に参加という形態をとることが望ましい。教育実習後の発展実習の性格をもったものである。

（1）実際に各学校園でのボランティア実習と事前・事後指導，カンファレンス等への参加が 90 分× 15 回分以上であれば単位取得の条件を満たす。

（2）各学校園でボランティア実習をしたその日，帰るときに各学校園の担当の先生から大学が用意した書類（「実習の記録①」）に捺印かサインをいただくようにする。（30 分とか 40 分などと日によってボランティアの時間が異なる場合には，積算で 90 分×□回分としていくことができる。）

（3）ネット版（ｍａｎａｂａ　ｆｏｌｉｏ）とノート形式のポートフォリオ（実習の記録②）を併用する。その日，ボランティア実習をしたことを記録に残し，月に 1 回程度，保幼小学修支援センターへ提出する。希望すれば，ポートフォリオに記したことや学校園の現場で感じたことについて，ＧＰ支援員や大学担当者と相談をすること（カンファレンス）も可能である。

（4）各学校園の先生に尋ねたいときや指導を受けたいときは学生側から直接伺うようにする。（ボランティア実習が原則なので，待っていても教育実習の時のように指導が受けられないことが多い。）

　各学校園の先生からご指導を受けることができたときには，カンファレンスの一部としてポートフォリオに記録して残すようにする。相談したいことが生じたときには，ポートフォリオ（実習記録②）等に記しておく。原則としてＧＰ支援員や大学担当者が対応する。

（5）保育園，幼稚園，小学校専任のＧＰ支援員や大学担当者からコメントなどがポートフォリオに書き込まれる。希望があるときや必要なときはＧＰ支援員や大学担当者と個人や小グループでの面談（カンファレンス）を受けることができる。

（6）保育・教育基礎実習の前に，事前にｍａｎａｂａ　ｆｏｌｉｏのチェックカードで自己評価をして，これから取り組む保育・教育基礎実習での参考にする。また，事後には振返カードで自己評価をして，成果と課題をつかんでいくようにする。

（7）合同カンファレンスは，基礎実習に出かけた学生と学校園の先生方，ＧＰ支援員，大学担当者などが集まって，意見交換や情報交換などをして，子どもとのよりよいかかわり方，指導の方策をさぐるものである。長期休業中などを中心に年間数回程度を予定している。原則として，自分が出かけた学校園での合同カンファレンスに参加するが，違う学校園（自分が行っていない学校園）での合同カンファレンスに参加することも可能である。

2　大学と各学校園へ登録をする

＊携帯電話，メールアドレスなどは個人情報なので自己責任において判断する。

＊登録カードは，大学の担当に１部提出する。

＊登録カードは，保幼小学修支援センターと各学校園が保管する。

＊年度末には責任をもって廃棄する。

2011 年度「保育・教育基礎実習」登録カード（例）

氏名		学籍番号
連絡メモ	（携帯電話） （住所）〒 （電話） （メールアドレス）	
活動希望		
過去のボランティア体験		
備考		

３ 保育・教育基礎実習「実習の記録①」に記入し，各学校園の担当者から捺印かサインをいただく

＊クリアファイルに入れるか，台紙などにはるようにする。

＊小学生時の「音読カード」「なわとびカード」等のイメージである。

保育・教育基礎実習の記録①（例）

［番号　　氏名　　］

（　　）小学校

月／日（曜日）	活動時間（○：○～□：□）	活動場所	活動内容	学校園担当者（印・サイン）	大学確認（印・サイン）
5/８（火）	８：３０～	４年Ｂ組	配慮が必要な子どもの支援	印	サイン
１６：３０ Ａ児の支援			３年Ａ組担任の先生の補助と休み時間の遊び	補印	サイン
5/15（火）	８：３０～				

４ ポートフォリオ(保育・教育基礎実習の記録②)を作成する

＊ ポートフォリオ用Ａ４ノート。ファイル形式が活用しやすい。

＊ ポートフォリオにはボランティア活動のたびに記録していくようにする。

＊ ボランティア活動で体験したことや学校園の先生からいただいたコメントなどを自分の活動記録として蓄積していく。

＊ ポートフォリオ作成の定められた形式はない。

→ 保育・教育基礎実習の記録②の例えばの形式として，

・「ボランティア活動日例：23 年4 月23 日」

・「活動時間例：９：００～１６：３０」

・「ボランティア活動の内容」

・「活動場所」などを記録しやすいように記していく。

※文章で綴っていってもいいし，箇条書きのような記し方でもよい。

＊ なお，幼児，児童の個人情報に関することを記入することもあるので，個人名は書かないで，Ａさん，Ａ児，Ａなどで書くように配慮すること。

＊ ネット上でのポートフォリオｍａｎａｂａ ｆｏｌｉｏがスタートしたら，できるだけネット上で記録を残していくようにするが，ノート形式と併用でもよい。

５ 「基礎実習の記録①」（カードかファイル）と「基礎実習の記録②」（ポートフォリオ）は１ヶ月に1 回程度，保幼小学修支援センター（旧３０６Ｌ 教室・図書館3階）へ提出する。（提出用のボックス・棚が用意されている）

次回，基礎実習に出かける前に，同所に受取りに行く。（受取用のボックス・棚に置かれている）

６ カンファレンスを受ける

カンファレンスには，いくつかの種類のカンファレンスがある。いずれもポートフォリオにカンファレンスの内容として記録に残しておきたい。この時間も，90 分×□回としてカウントすることができる。

（１）個別のアドバイス

①学校園の先生からの個別のアドバイス

・みなさんから先生に尋ねたことに対してコメントをいただいた場合

・先生から指導や助言などを受けた場合など

・指導していただいたことをポートフォリオに記入して残していくこと

②大学の先生やＧＰ支援員からの個別のアドバイス

・提出したポートフォリオには，大学の先生やＧＰ支援員から直接コメントが記入されている。希望があれば個人やグループで対面指導を受けることもできる。

（２）合同カンファレンス

①大学での合同カンファレンス

・ボランティア活動について成果や課題や悩みなどについて，全体で話し合い，大学の先生やＧＰ支援員から適切なコメントをいただき，次へのボランティア活動に生かしていくようにする。

②学校園での合同カンファレンス

・学校園の協力を得て，学校園の先生，大学担当者，ＧＰ支援員，学生で，ボランティア活動についての成果や課題や悩みなどについて，学校園の先生からコメントをいただき，次へのボランティア活動に生かしていくようにする。

③卒業生参加の合同カンファレンス

・現場で活躍している先輩が参加。現場目線でのアドバイス等をしていただく。

（３）保育・教育基礎実習セミナーでのカンファレンス

・保育・教育基礎実習の集大成として，講師を招いてお話を聞くとともに，代表者による

保育・教育基礎実習の体験発表を行い，講師よりカンファレンスを受ける。

7 「保育・教育基礎実習」の担当者について

〈基礎実習等の取り組みのお世話をいただく先生〉

・コーディネーター　・担当事務員

※この取り組みの全体を把握し，ボランティア実習，カンファレンス，ポートフォリオ等について企画・調整する。

※連携学校園との連絡・調整をする。

※保幼小学修支援センター（ポートフォリオ・基礎実習の記録②の提出場所）におられることが多い。

〈保幼小学修支援センターの専任の先生（ＧＰ支援員）〉

・保育園担当ＧＰ支援員　・幼稚園担当ＧＰ支援員　・小学校担当ＧＰ支援員

※基礎実習の記録①②などを見て，コメントを書き込んで返却したり，　希望に応じて相談（カンファレンス）を実施したりする。

※連携学校園でのボランティア実習の様子を参観したり，合同カンファレンス等に出席したりして，実習の成果や課題等を分析する手助けをする。

〈大学の担当者〉

・保育園担当者西隆太朗，伊藤美保子

・幼稚園担当者梶谷恵子

・小学校担当者赤木雅宣

※上記が主な担当者であるが，それぞれの学校園の実習担当者にも合同カンファレンス等でお世話になる。

８ その他

・この手引きには，多くの学校園で共通であろう一般的なことを記している。それぞれの学校園ならではの注意事項については，事前指導の中で触れるのでよく配慮すること。

・この後，ｍａｎａｂａ　ｆｏｌｉｏ の「ユーザーＩＤ」が配られるので，できるだけ早い機会に家のＰＣか学内のＰＣからアクセスして，１(6)のチェックカードで自己評価をして，送信・保管すること。

ウ　１年から４年までの体験型就業力育成プラン

本学の 1 年生から卒業後まで体験型就業力をどのように育成していくか、大学としてのプランを作成して取組むことにした（図８参照)。

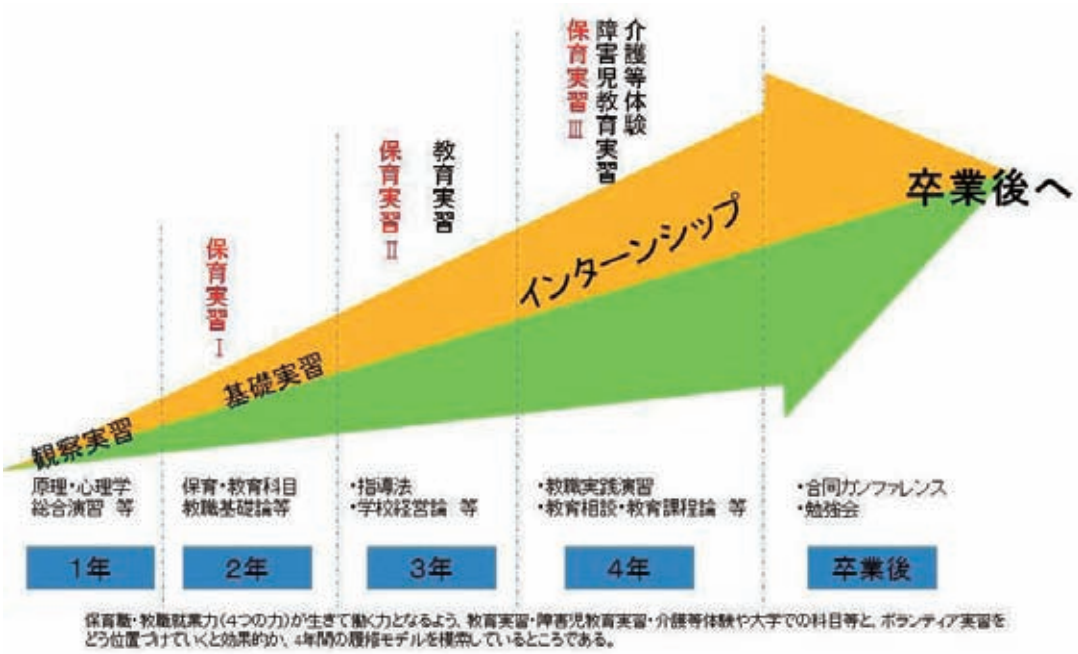


図８：１年から４年までの体験型就業力育成プラン（児童学科の場合）

入学から卒業後までどのように取組んでいくと卒業後、即戦力として生きて働く体験型就業力を育成していくことができるのか、実践を通して作成しているプランである。大学での学びと、観察参加学習（1 年生）、学校園での基礎実習（2，3 年生）・インターンシップ（4 年生）と、観察・参加実習（1 年生）、保育実習（2～4 年生）、教育実習（3～４年生）等がうまく連動して取組んでいけるよう、保育実習・教育実習、基礎実習・インターンシップの事前事後指導、人材育成論、総合演習Ⅱ等、必要な時期に適切な指導を行い、学生の体験型就業力を高めている。取組の効果が少しずつ出てきている。

（２）学校園との連携

ア　大学と連携学校園の取組

平成 22 年度・平成 23 年度学生の体験型就業力育成に向けて、大学と連携学校園の取組は次の通りである（図９参照）。

時期	大学の取組	連携学校園の取り組み
22 年９月 ～12 月	・教職就業力育成代表者委員会学内会議 （１回～7 回） ・保幼小学修支援センター会議（１回～３回） ・キックオフミーティング・教職就業力評価委員会等合同会議	○委員の委嘱 ○委員出席
23 年１月 ～３月	・基礎実習の試行実施 ・インターンシップの試行実施	○連携学校園 ○連携学校園

	・教職就業力育成代表者委員会学内会議 （8回～12回） ・保幼小学修支援センター会議（4回～11回） カンファレンス開始 ・連携学校園訪問 ・わらべうた講習会 ・保育講演会・合同カンファレンス ・GPポータル登録 ・保護者アンケート調査 ・マナバフォリオ講習会	○ＧＰ支援員 ○連携学校園訪問 ○あゆみ保育園学外実施委員会 ○昭和保育園学外実施委員会 ○附属幼稚園学外実施委員会 ○三門幼稚園学外実施委員会 ○石井幼稚園学外実施委員会 ○附属小学校学外実施委員会
23年4月 ～8月	・基礎実習・インターンシップの開講 ・教職就業力育成代表者委員会学内会議 （13回～17回） ・保幼小学習支援センター会議（12回～24回） ・学校園学外実施委員会 ・わらべうた講習会 ・事前事後指導（マナバフォリオ研修会、保幼小別合同カンファレンス） ・食品栄養学科附属小学校での試行 ・人間生活学科岡山南高等学校等での試行 ・学校園アンケート調査	○学内会議 ○保幼小学修支援センター会議 ○ＧＰ支援員研修会 ○マナバフォリオ研修会 ○学校園訪問 ○昭和保育園学外実施委員会 ○あゆみ保育園学外実施委員会 ○南方保育園学外実施委員会 ○三勲幼稚園学外実施委員会 ○高島幼稚園学外実施委員会 ○中島幼稚園学外実施委員会 ○附属幼稚園学外実施委員会 ○三門幼稚園学外実施委員会 ○石井小学校学外実施委員会 ○附属小学校学外実施委員会
23年9月 ～12月	・教職就業力育成代表者委員会学内会議 （18回～22回） ・保幼小学修支援センター会議（25回～37回） ・事前事後指導（ポートフォリオ振返、コミュニティづくり、卒業生参加の合同カンファレンス） ・幼稚園・小学校観察・参加実習 保育園模擬観察実習 ・食品栄養学科附属小学校での試行 ・人間生活学科岡山南高等学校等での試行	 ○三勲幼稚園学外実施委員会 ○高島幼稚園学外実施委員会 ○石井幼稚園学外実施委員会

２４年１～3月	・教職就業力育成代表者委員会学内会議（23回～27回） ・学校園の学生評価、アンケート調査 ・保幼小学修支援センター会議（38回～43回） ・事前事後指導（4年生による3年生へのインターンシップへの誘い、3年生による1年生、2年生への基礎実習への誘い） ・総括のためのセミナー ・教職就業力育成代表者委員会・実施本部合同会議 ・教職就業力評価委員会委員による外部評価	○あゆみ保育園学外実施委員会 ○昭和保育園学外実施委員会 ○中山保育園学外実施委員会 ○伊島保育園学外実施委員会 ○南方保育園学外実施委員会 ○附属幼稚園学外実施委員会 ○伊島幼稚園学外実施委員会 ○中島幼稚園学外実施委員会 ○三門幼稚園学外実施委員会 ○附属小学校学外実施委員会 ○石井小学校学外実施委員会

図9：平成22年度・平成23年度　大学と連携学校園の取組

イ　学校園ごとの保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの実施状況

平成22年度連携学校園は11学校園。保育園は3園、幼稚園は6園、小学校は2校である。23年度から、新たに6園と2校が加わり、19学校園となった。学生の要望もあり、連携学校園以外で基礎実習、インターンシップも可能にしている。

食品栄養学科は小学校、人間生活学科は高等学校等で試行している。

連携学校園では、インターンシップのみ可能な学校園、基礎実習・インターンシップ両方可能な学校園などがあり、学校園の実情に合わせて実施している。また、誰が、いつ、どの時間に基礎実習・インターンシップに行くのかがわかるよう、学校園ごとに毎月、計画表を作成して事前に届くようにした。この計画表で各学校園での保育や授業の補助等を円滑に行うことができるようになった（表1参照）。

就業力育成支援GP　○○幼稚園　ボランティア計画表（2011年7月）

				1日（金） ③A 9:00−12:00 ④B 13:00−15:00
4日（月）	5日（火）	6日（水）	7日（木）	8日（金）
	③ C 8:00～12:00 ③ D 10:00～15:00 ③ E 10:00～15:00	④F 8:30～12:30 ④G 8:30～12:30	③H 8:30～11:30 ③I 8:30～11:30 ③J 8:30～11:30 ③K 10:00～13:00 ③L 9:00～12:00 ③M 10:00～12:00 ③N 10:00～12:00	③A 9:00−12:00 ④B 13:00−15:00 ④O 8:30～15:00
11日（月）	12日（火）	13日（水）	14日（木）	15日（金）
	③ C 8:00～12:00 ③ D 13:00～15:00 ③ I 8:30～11:30 ③ J 8:30～11:30	④F 8:30～12:30 ④G 8:30～12:30	③D 10:00～14:00 ③L 9:00～12:00 ③K 10:00～13:00 ③S 8:30～12:00 ③N 10:00～12:00	③P 9:00−12:00 ④B 13:00−15:00 ④O 8:30～15:00
18日（月）	19日（火）	20日（水）	21日（木）	22日（金）
海の日		④F 8:30～12:00 ④G 8:30～12:00	③K 10:00～13:00 ③S 8:30～12:00 ③Q 10:00～12:00	④O 8:30～15:00
25日（月）	26日（火）	27日（水）	28日（木）	29日（金）
		④F 8:30～12:30		④O 8:30～15:00

②・・・2年生　③・・・3年生　④・・・4年生

表1：連携学校園基礎実習（ボランティア）計画表

基礎実習を履修した学生は 149 名、インターンシップを履修した学生は 84 名である。連携幼稚園で基礎実習・インターンシップをした状況を見ると、次の表の通りである（図 10 参照）。

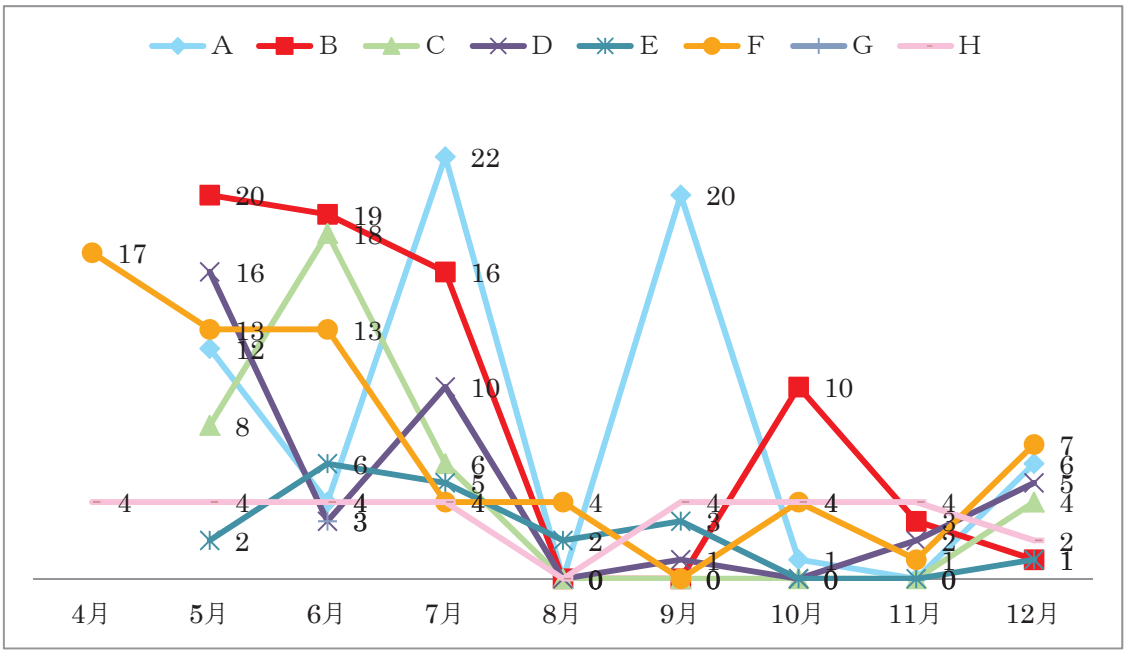


図 10：連携幼稚園での基礎実習・インターンシップ参加状況

基礎実習・インターンシップで体験した内容は、保育補助、授業補助、環境構成、教材準備、排便・昼食・清掃補助、登下校指導等と多岐にわたっている（図 11－ 1 ～4 参照）。

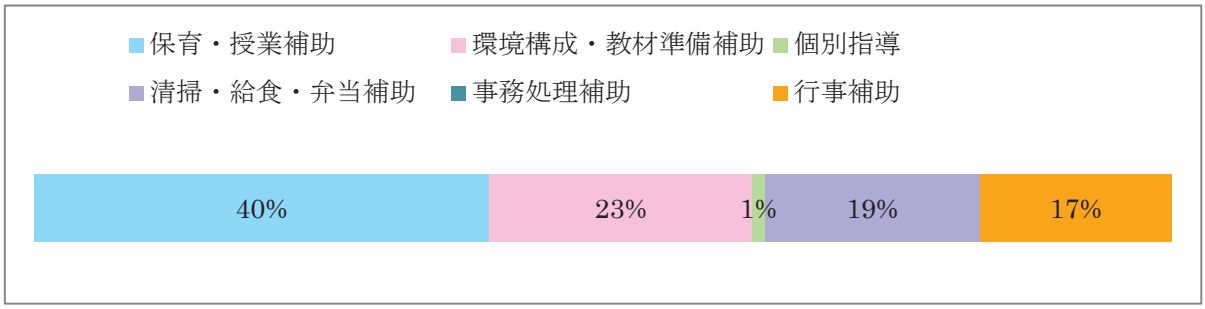


図 11－1：基礎実習で体験した内容（保幼）

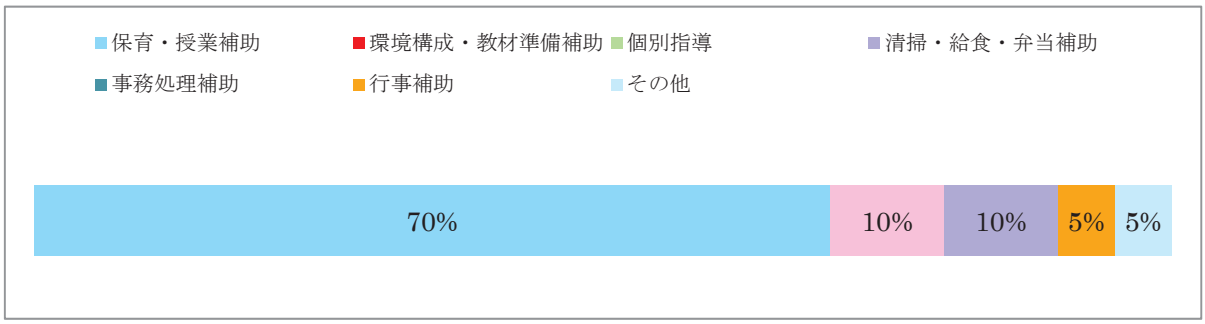


図 11－2：インターンシップで体験した内容（保幼）

保育園・幼稚園では 2・3 年生は保育補助、環境構成、昼食・掃除補助、行事補助等を体験している。4 年生では保育補助が増えている。継続して保育園、幼稚園に行っている学生には園の先生方からいろいろな仕事を依頼されることがあり、ポートフォリオに「たいへん勉強になっている」との記述が見られた（図 11－１～２参照）。

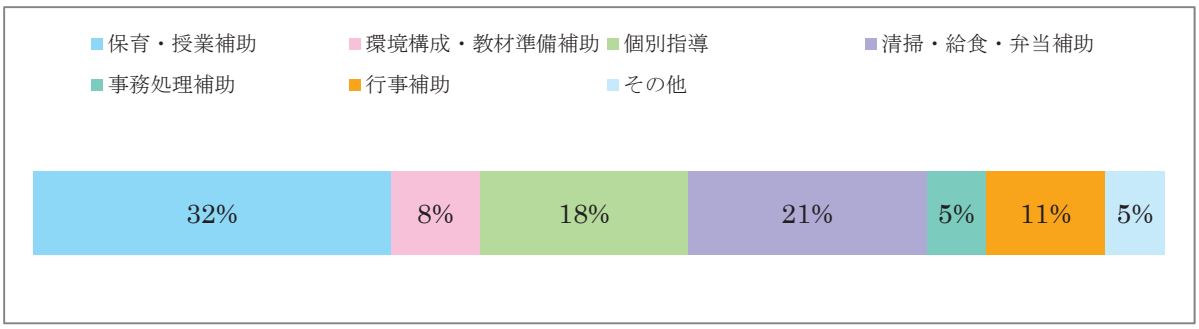


図 11－3：基礎実習で体験した内容（小学校）

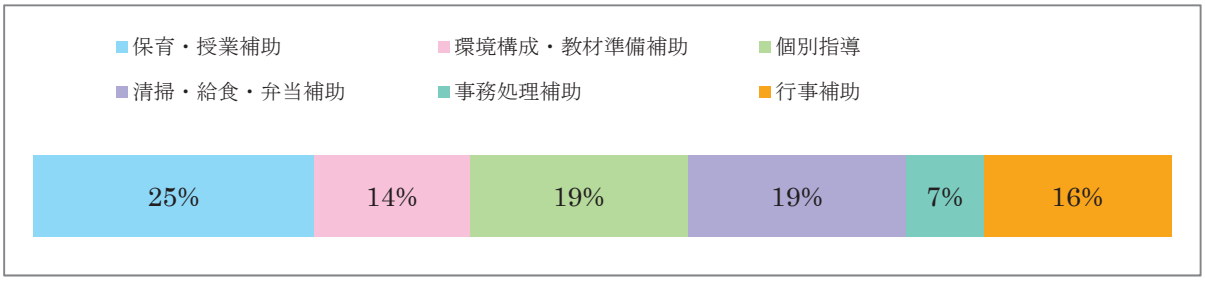
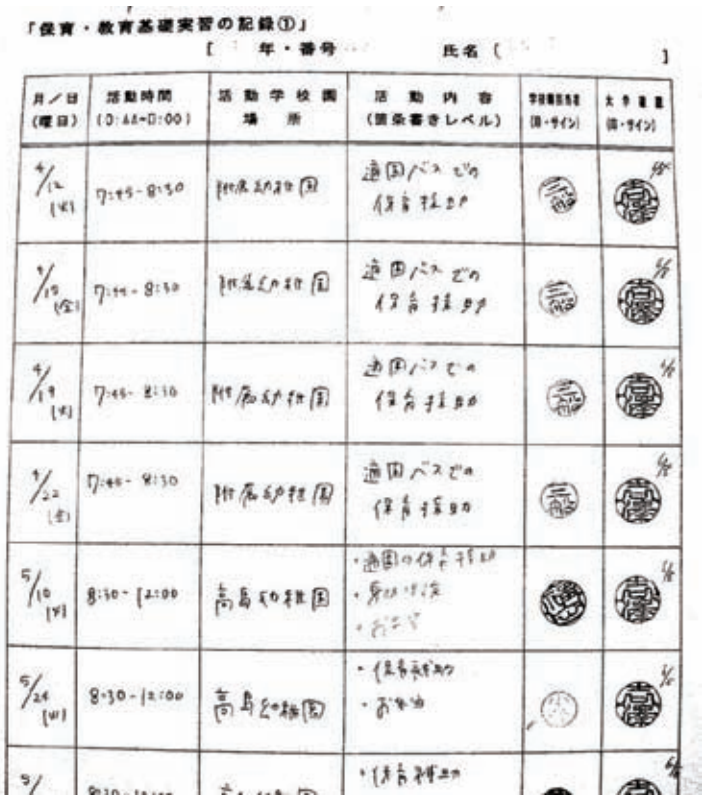


図 11－4：インターンシップで体験した内容（小学校）

小学校では、2，3 年生も 4 年生も授業補助、掃除・給食補助、個別指導、行事補助等を体験していることがわかった。学生自身もできるだけいろいろな体験を望んで取組んでいることもわかった（図 11－3～4 参照）。

学生は各学校園での基礎実習・インターンンシップに行ったとき、保育･教育基礎実習の記録用紙①（保育･教育インターンシップの記録用紙①）に、いつ、何を、どこで、どのように記録し、担任よりサインか印をいただくようにしている（表 2 参照）。学生が保幼小学修支援センター事務局へ記録用紙①をポートフォリオとともに提出すると、大学担当者や GP 支援員がポートフォリオを見て個別にアドバイスをしている。その後、記録用紙①の大学確認欄にサインか印をおしている。このように、学生ががんばっている様子を把握して、アドバイスできる体制を整えている。

表２：保育･教育基礎実習の記録①


「保育・教育基礎実習の記録①」

［　年・番号　　氏名（　　）］

月／日（曜日）	活動時間（0:00～0:00）	活動学校園場所	活動内容（箇条書きレベル）	学園園長等確認（印・サイン）	大学担当者（印・サイン）
4/12（木）	7:45-8:30	附属幼稚園	通園バスでの保育補助		
4/13（金）	7:45-8:30	附属幼稚園	通園バスでの保育補助		
4/19（木）	7:45-8:30	附属幼稚園	通園バスでの保育補助		
4/22（金）	7:45-8:30	附属幼稚園	通園バスでの保育補助		
5/10（月）	8:30-12:00	高島幼稚園	・通園の保育補助 ・身体測定 ・おやつ		
5/24（木）	8:30-12:00	高島幼稚園	・保育補助 ・おやつ		
5/			・保育補助		

ウ　連携学校園学外実施委員会の実施状況

連携学校園において、学生の基礎実習・インターンシップを振返る学外実施委員会を行った。学外実施委員会では、学生、学校園長、学校園の関係教員・保育士、大学担当者等の参加によって行われている。ほとんどの学校園で、学生の基礎実習・インターンシップでの取組について検討する、「合同カンファレンス」の形で実施している。学外実施委員会の内容については、下記のような学外実施委員会の「写真」や「実施報告書」（実施日時、場所、実施内容、実施効果等）にまとめている。

「Ｄ幼稚園学外実施委員会」

「Ｈ小学校学外実施委員会」

＜M保育園実施委員会実施報告書＞

1　実施日時等

(1) 日　時　　平成 23 年 8 月 29 日（火）13:00 ～15:30

(2) 場　所　　M保育園

( ) 参加者　　M保育園園長、大学担当者 3 名、学生 4 名

2　実施内容

（1）自己紹介

（2）M保育園における、これまでのボランティア体験について､学生より発表。

（3）ボランティア体験について検討する。

・自由に遊んでいる姿から、子どもたちの伸び伸びさを感じた。

・3 才児を担当したとき、ブロックの取り合いとなり、けんかに発展した。どうかかわればよいのかわからなかった。声かけもできず、自分の態度を反省した。

・5 才児を担当したとき、絵本の取り合いになった。声かけはしたが、5 才児の幼児が納得する言葉にはならなかった。どう言葉かけをすればよかったのだろうか。

・ちょうちん作りを 5 才児でしたとき、作り方の指導や伝えることの難しさを感じた。自分自身の理解と 5 才児の理解との差を感じた。

・1～2 才児のおしめ交換を体験することができた。乳児がよく動くことを実感した。

3　実施効果

○ボランティア実習での取組について、自分なりに整理する機会となった。

○参加した学生からたいへん勉強になったという感想がでている。

○一人で考えていても答えが出そうもない悩みや疑問を、先生方のいろいろな角度からお話を聞くことによって、不安を取り除くことができた。

○今後取組んでいく意欲につながっていくことができた。

○これからも合同カンファレンスに参加したいと参加者全員からでている。

○ボランティア実習を経験するだけでなく、このように経験したことを出し合い、検討することによって、次への課題を見つけ、次への意欲を高めていくことがわかった。

4　その他

○M保育園の温かいご支援とご指導のおかげで学生たちはたいへん勉強になった。

エ　各学校園のコミュニティでの取組

基礎実習・インターンシップが円滑に推進できるよう、ネット上で各学校園のコミュニティをつくっている。コミュニティでは、大学や連携学校園からのお知らせ、学生からの連絡、同じコミュニティ内での意見交換、基礎実習やインターンシップの実施計画表作成など、学生にとって役立つように取組んでいる。同じ学校園で実習する友だちとの交流、

自分たちの力で運営等をしていくことができるようリーダーを選んで今後取組んでいきたいと考えている。

コミュニティはマナバフォリオのマイコミュニティに設定している。学生がコミュニティに加入するとそこでの活動に参加できるようにしている。連携学校園では各月の計画表提出、学外実施委員会（合同カンファレンス）を行って連携を深めている。また、学生が行きやすい連携学校園以外の学校園での基礎実習・インターンシップも、今後連携していく学校園を拡大していく糸口をつかむため、試行として認めている。

●連携学校園のコミュニティ（19 学校園）

・保育園：南方、伊島、昭和、中山、あゆみ

・幼稚園：附属、石井、三勲、三門、高島、伊島、中島、葦高、中庄

・小学校：附属、石井、茶屋町、倉敷東、万寿東

●連携学校園以外の学校園のコミュニティ（23 学校園）

連携学校園以外に、自宅近くの学校園や、保育実習・教育実習の学校園にボランティアに行っている。

・幼稚園：横井、古都、財田、芳泉、鹿田、庄内、江西、桃丘、福浜、中州
味野、長尾など

・小学校：大元、伊島、御南、高島、三門、高島、財田、灘崎、中央、西支援学校小学部

●今後取組んでいきたいコミュニティでの活動について

①学校園でのボランティアの各月の計画表づくり

②学校園での合同カンファレンス運営

③学校園からのお知らせ

④大学からの連絡

⑤学生からの報告・連絡・相談

⑥学生同士の情報交換

オ　学外実施委員会の実施効果

学外実施委員会における合同カンファレンスについては、参加した学生のほとんどが「たいへんよかった」という評価であった（図 12 参照）。学校園等の都合で夏季休業中や夜などの実施となったため、参加する学生が多くはなかったことが課題として残った。

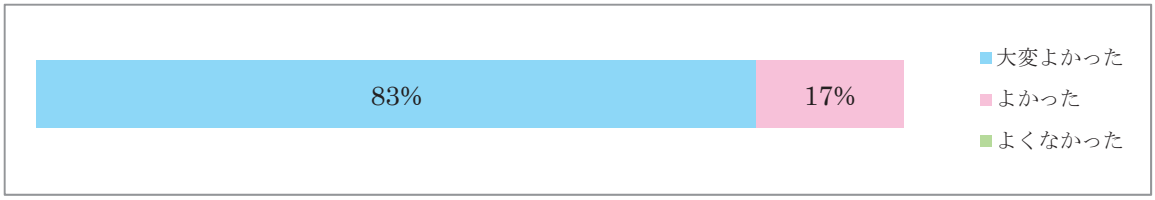


図 12：学外実施委員会の実施効果（学生評価））

また、学校園からは「学生にとってたいへん勉強になる検討会となっている」「学生が明るく誠実で、前向きに取組むので学校園としては喜んでいる」など、学生の取組について温かい評価をいただいている（図 13 参照）。

基礎実習・インターンシップについて

H小学校長　　○○○○

1　基礎実習・インターンシップを受け入れて、よかったことについて

・学校のスタッフだけでは十分な活動ができにくいもの（グループ活動に支援など）をお手伝いいただき学校としてはたいへんありがたかった。

・みんな意欲的でよく働き、好感が持てた。

2　基礎実習・インターンシップを受け入れて、困ったことや気になったことについて

・メールアドレスを登録していただくとき、登録できないアドレスがあり、連絡などをする上で対応に困った。

3　学生について

・もう少し学校側から、学生に積極的に、かつ具体的に情報発信して学生に役立つボランティアになるよう工夫していきたい。

図 13：基礎実習・インターンシップについて（学校園の評価）

合同カンファレンスでは、「保育職・教職への自信や意欲を持つようになってきていること」、「いろいろな疑問や不安が解消できていること」、「友だちや先輩の取組状況や考えを知ることができていること」など多くのことを学び、基礎実習・インターンシップの体験を深めていく上でたいへん重要な検討会となっている。

（3）ポートフォリオへの取組

基礎実習・インターンシップで体験したことをポートフォリオに記録を残すようにしている。形式は自由にした。日記風、時系列の体験記録、特に大切な体験のみの記録など様々な記述となっている。

ア　ポートフォリオの実施状況

ポートフォリオはボランティア表とともに適宜提出するようにしている。ポートフォリオの内容を見ると、

- 子どもの様子
- 教師の指導の様子
- 保育･授業の様子
- 自分が取組んだこと
- 子どもへの関わり
- 環境構成
- 教師への相談
- 教師からの指導助言
- 保護者
- 体験の感想
- 体験での気付き
- 体験での疑問
- 次への課題

など記述内容は様々であった。学生のポートフォリオの提出状況は図 14 の通りである。

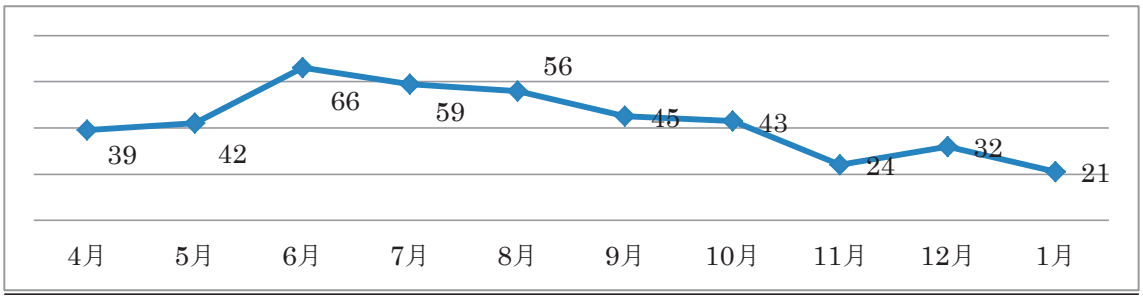


図 14：ポートフォリオの提出状況

イ　ポートフォリオの実施内容

学生はそれぞれが体験したことをポートフォリオに自由に記録している。どんなポートフォリオにしていくとよいのか悩んでいる学生のために、次のような資料をもとに各自のポートフォリオを振返る機会を持った。

参考資料：**ポートフォリオの振返**

＜ポートフォリオ振返の観点＞

◇ポートフォリオをうまく活用して、保育職・教職の力を蓄積していきましょう。

これまでの自分のポートフォリオを、ア～エの観点から読み直して、「自分の成果と課題」をチェックしてみましょう。＜作業＞

ア、今日､学ぶことができたのは何か。できるようになったことは何か。
チャレンジしたのは何か。　（赤色で線を引きましょう。）

イ、今日、できなかったことは何か。チャレンジできなかったことは何か。
（青色で線を引きましょう。）

ウ、今日、どんな課題を見つけたか。これからすべきことは何か。
（緑色で線を引きましょう。）

エ、学校園の先生等のアドバイスや指示等言われたことをポートフォリオに残していますか。　　（オレンジ色で線を引きましょう。）

オ、次のボランティア体験振返シートで、自分はどこまでできているか、チェック！

＜事例１＞懸命に取組む児童　○月○日（月）活動時間：８：３０～１２：００

活動場所：○○小学校３年Ｃ組

今日は39人の３年Ｃ組だ。朝、「おはようございます。」と先生や来ている子どもたちにあいさつをすると、先生から、「本読みカードのチェックと算数の宿題の○付けをしてください。」と言われた。本読みカードはすぐチェックできたが、○付けは先生の○付けを参考にていねいにつけた。しかし、まちがいには×を入れるのかどうかわからないのでそのままにした。

朝の会、このクラスは先生が遅れてきても時間が来ると、日直が前に出て朝の会を始める。すばらしい！スピーチタイムでは家の人から昔の遊びを教えてもらったことを紹介した。どう指導すると、３年生の児童が自分たちで朝の会ができるようになるのだろうか。

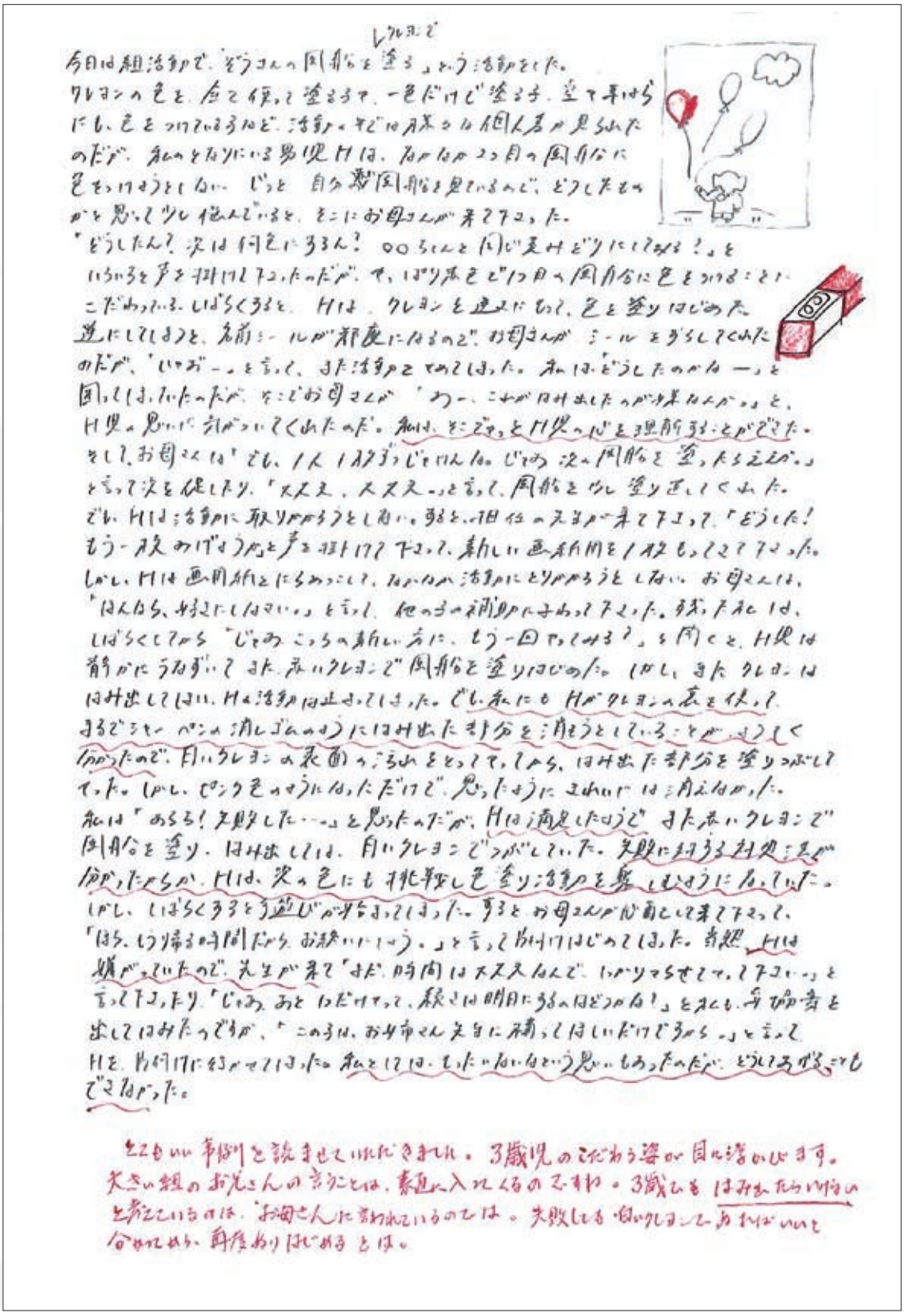
１時間目は、国語の授業だ。もちもちの木の最後の場面だった。めあては「すごい。勇気があるなというところを見つけよう」だった。児童はワークシートの言葉に線を引いて、なぜそう思ったか理由を書いていた。静かに懸命に取組んでいることに驚いた。その後の発表も「・・・ところがすごい。わけは・・・だからです。」と発表の仕方もすごいなと思った。その中に友だちとのコミュニケーションがとれない A 児がいた。多くの児童はその場で発表したが、A 児は前に出て、黒板に貼ってある拡大したワークシートを指さしながら発表した。たどたどしくしかも長々と話すので、何を言いたいのか私にもわからなかった。周りの児童はふぅと言って聞けそうもない雰囲気になって来た。すると、先生は、「A さんが一生懸命に説明しているのよ。聞いてね。」とか、「えっ、ここのところがすごいのね。みんなどう？」等と言って、周りの子どもの注意を向けていった。発表が苦手で言い出せない児童には、「いま、考えているのね」といって待っていた。全員が発表した。

どんな指導をしていくと、こんなすごい授業になるのか、いくつか見えてきたような気がした。

帰る時、先生は、朝の算数の○付けを見て、「まちがいに×を入れていなかったのはよかったよ。子どもたちが直したとき、○をつけてかえせるからね。ありがとう」とほめてくださった。うれしかった。

実際の学生のポートフォリオを紹介する。

事例１　**Mさんポートフォリオ**　赤字はGP支援員のアドバイス



今日は組活動で、「ぞうさんの風船を塗る」という活動をした。
クレヨンの色を、全て使って塗るまで、一色だけで塗る子、塗り終わっても、色をつけているうちに、活動の中には基本の個人差が見られたのだが、私のとなりにいる男児Hは、なかなか2つ目の風船に色をつけようとしない。じっと自分の風船を見ているので、どうしたものかと思って少し悩んでいると、そこにお母さんが来てくださった。
「どうしたん？次は何色にするん？○○ちゃんと同じ黄色にしてみる？」などいろいろ声を掛けてくださったのだが、やはり赤をどうしても風船に色をつけることにこだわっている。しばらくすると、Hは、クレヨンを逆さにもって、色を塗りはじめた。逆にしてしまうと、名前シールが剥がれるので、お母さんがシールをずらしてくれたのだが、「いやぁ～」と言って、また活動をやめてしまった。私は「どうしたのかな～」と困ってしまっていたのだが、そこでお母さんが「わー、これがはみ出したのが嫌なんかぁ。」と、H児の思いに気がついてくれたのだ。私は、そこでやっとH児の心を理解することができた。そして、お母さんは「でも、1人1枚ずつじゃけんな。じゃあ次の風船を塗ったらえぇが。」と言って次を使ったり、「えぇえ、えぇえ～」と言って、風船を少し塗りなおしてくれた。でもHは活動に取りかかろうとしない。すると、担任の先生が来てくださって、「どうした！もう一枚あげようか」と声を掛けてくださって、新しい画用紙を1枚もってきてくださった。しかしHは画用紙をにらめっこして、なかなか活動にとりかかろうとしない。お母さんは、「はんなら、好きにしなさいぃ。」と言って、他の子の補助にまわってくださった。すると私は、しばらくしてから「じゃあ、こっちの新しい方に、もう一回やってみる？」と聞くと、H児は静かにうなずいてまた赤いクレヨンで風船を塗りはじめた。しかしまたクレヨンははみ出してしまい、H活動は止まってしまった。でも私にもHがクレヨンの底を使って、まるでまるで、ペンの消しゴムのようにはみ出た部分を消そうとしていることがすごくわかったので、Hはクレヨンの表面のこすれをとってやってから、はみ出た部分を塗りつぶしていった。しかし、ピンク色のようになっただけで、思ったようにきれいには消えなかった。私は「あらら！失敗した～～」と思ったのだが、Hは満足したようで、また赤いクレヨンで風船を塗り、はみ出しては、白いクレヨンでつぶしていた。失敗に対する対処法が分かったからか、Hは、次の色にも挑戦し色塗り活動を楽しむようになっていた。しかし、しばらくすると遊びが始まってしまった。するとお母さんが心配して来てくださって、「はら、もう帰る時間だから、お終いにしよう。」と言って片付けはじめてしまった。当然、Hは嫌がっていたので、先生が来て「まだ時間はえぇえんで、ゆっくりさせてやってください。」と言ってくださり、「じゃあ、あと1だけやって、続きは明日にするのはどうかな？」とまた、妥協案を出してはみたのだが、「この子は、お母さん先生に構ってほしいだけだから。」と言ってHを、片付けに誘ってしまった。私としては、もったいないなぁという思いもあったのだが、どうしてあげることもできなかった。

とてもいい事例を読ませていただきました。3歳児のこだわる姿が目に浮かびます。大きい組のお兄さんの言葉は、素直に入ってくるのですね。3歳児もはみ出たらいけないと考えているのは、「お母さんに言われているのでは。失敗しても白いクレヨンでかくしていいと分かってから、再度ぬりはじめる」とは。

事例２　（Kさんのポートフォリオ）

初めは自分の体験したことを単に羅列したポートフォリオが多かったが、友だちのポートフォリオの内容を聞いて、自分の体験したことに対して考察を加えたり、担任の先生か

ら指導されたことを記録に残したり、自分の学んだことやこれからの課題を書いたりするなど、単なる記録のポートフォリオから問題解決型ポートフォリオへと高まっている。

ウ　ポートフォリオ上の学びの深まり

ポートフォリオは形式を示さないで、学生が思うまま自由に記述できるようにした。学生のポートフォリオは、「体験をありのままに記述する」、「不安や悩みなどを記述する」「質問など聞きたいことを記述する」「見たことや聞いたことを記述する」など、書いている内容はまちまちであった。

基礎実習・インターンシップを体験し、事前事後指導や合同カンファレンス等にも参加して、学生のポートフォリオの内容が次第に変わってきている。いくつかの傾向をあげてみる。

①「取組について考えていることや気持ち（感想）を書いている記述」

例：A さんと遊ぶ約束をしました。ところが、B さんとかかわらなくてはならなくなり遊べなくなりました。A さんから、「先生とは、一生遊ばん」と言われてしまいました。このことがあって、A さんにどうかかわればよいのか、悩んでしまいました。A さんを避けようとしている自分に気付きました。これでは教師失格だなと思うと、ますます深刻になってしまいました。担任の先生に相談しました。「A さんも先生にどうかかわっていいか迷っていますよ。どんなときも子どもの立場で考えてはどうかな」と言われて、気持ちが吹っ切れました。

②「自分の体験を振返っている記述」

例：R 児が自分のお芋の絵をぐじゃぐじゃにやぶってしまった。いろいろ声かけしたけど「もうやだっ」と言ってあちこちに投げつけだした。新しい紙を用意してかかそうとも考えたが、やぶった絵を黙って集めてしわを伸ばし、破片を合わせて、「こんなお芋さんだったのね」というと、R 児は「うん」と頷いた。そこで、「ぽっかりあいた部分、おいしいので虫さんが食べたのかな」というと、ぱっと顔を上げて、「そう、ぼくのお芋おいしかったんだよ」とうれしそうに言いました。R 児の心によりそうことができて、私自身がうれしくなりました。

③「担任の考えや大学の先生の考えを取入れている記述」

例：担任の先生から「子どもたちの様子をよく見てね。」と言われたので、よく観察しました。Y さんは大きな音などがにがてのようです。A さんは一度にいくつかの活動をすることが難しいようでした。H さんは叱られたり注意されたりすると、いらいらします。限界に達すると大声を出したり物や人にあたります。学級にはいろいろな子どもたちがいるんだと思いました。先生は、どの子どもにも一生懸命かかわっておられました。お手伝いしようと思うのですがなかなかうまくはいきません。先生から、「できるようだったら、子どもたちにかかわってみてね」と言われました。先生がしておられたことを参考にして、H さんが注意されていらいらしていたので、気持ちを聞いてみました。少しだけいらいらがなくなりました。大きな音がしたの

でＹさんのそばにすぐいきました。

④「取組から新たな課題を見つけている記述」

例：園庭で遊具の取り合いをしていました。A 児も B 児も自分の気持ちを相手に伝えることができません。「B さんはいま座ったばかりなのでもう少し待ってあげてね」といったが、A 児は納得がいきません。もうどうかかわっていいのか困ってしまいました。

例：体育の時間、なかなかシュートができないＡくん。かんしゃくを起こしながら泣き出しました。6 回シュートできた人から先生のところに集まるのですが 2 回しかできません。また、かんしゃくがエスカレート。そのとき、笛が鳴って先生の「集合」の合図。「Ａくん集まろう」と言うと、「いやだ」と言って泣き出しました。どう対応したらと困っていると、一人の女児が「このゴールが入ったら集まろうね」といって入るまで待っていました。この女児の対応に集まることばかりに気をとられていた自分がはずかしくなりました。子どもの心をつかんで対応できるようにならなければと思いました。

⑤「子どもの行動を考察し、自分の行動を考えている記述」

例：今日は H 児について振返ってみる。H 児とかかわるには彼との信頼関係を築くことが必要だ。まず、H 児が楽しんで遊んでいる時にタイミングよくかかわってみよう。

⑥「いくつかの体験例から自分の取組を考えている記述」

例：「待つこと」について、子どもがしていることを待つゆとり、「できるまでの時間待つ」こととととらえていたが、子どもにしばらく考えさせる、様子をしばらく見守るなど、子どもの心の準備が整うまで待つ、子どもが考えてから行動するまで待つ、2, 3 日経ってから話をするなどの待つことにもいろいろあることに気付いた。

⑦「自分の書いたことを読み直して、さらに考えを付け加えている記述」

例：降園時、担任が A 児の今日の様子について保護者に話している様子と A 児がまだ色を塗りたくて帰りの用意ができないことについてありのままに書いていた。後から、自分の書いたことを読み直して付け足した記述をしている。

「あのとき、お母さんに、『あと 2 個で塗り終えるのでちょっと待っていただけますか』とお願いし、A 児には、『時計の針が 3 に来たら終わることができるかな』と約束してから、帰りの用意をさせてみるとＡ児はきっと満足して帰ったのではないかと思った。」

⑧「図や絵を入ったわかりやすい記述」

例：子どもたちが砂場で遊んでいる様子を、子どもの位置、人数、遊び道具など絵で示し、子どものかかわりや環境構成がよくわかるように図示していた。

⑨「子どものつぶやきや自分の考えの重要なことについて短いコメントを入れている記述

例：今日の名言「窓から雨の降る様子を見て、お花さんもおなかがすいとったんかなあ！」と幼児のつぶやきをメモしていた。

例：担任の一言「まちがっていても×はできるだけつけないように工夫する」「連絡帳にはよいことを書く」など。

次第に、基礎実習・インターンシップでのボランティア実習にポートフォリオを役立てていくことができるようになってきている。

エ　ポートフォリオの実施効果

ポートフォリオについてアンケート調査を実施した結果、多くの学生が役に立っていると答えた（図 15－1 参照）。また、ポートフォリオの内容は、「学ぶことができた」「その日の感想」「自分がチャレンジしたこと」等について書いている（図 15－２参照）。

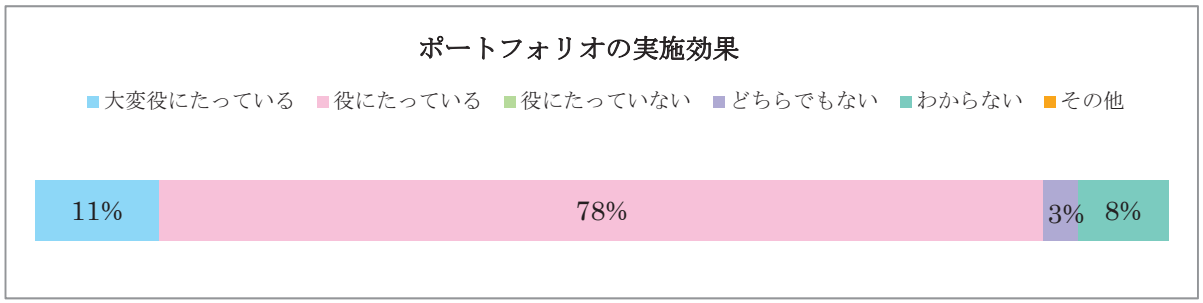


図 15－1：ポートフォリオは役立っているか

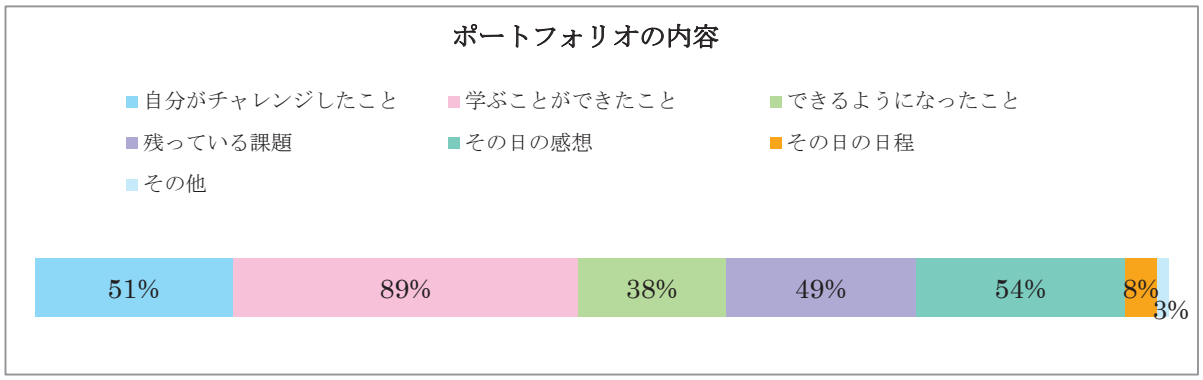


図 15－2：ポートフォリオに記録している内容

ポートフォリオに整理することを通して、自分の実体験を振返ることができている。

（4）合同カンファレンスの取組

合同カンファレンスはいろいろな形で実施している。

①全体会をして共通理解を図り、その後、グループにわかれて検討する

②はじめから、全員で検討する

③シンポジウムなどの形式で行う

④大学担当者が運営する場合と、学生が運営する場合がある

⑤連携学校園で実施する場合と大学で実施する場合がある

⑥卒業生が参加して行う場合、上級生が参加して行う場合、同学年で行う場合がある

合同カンファレンスは学校園では全体で行うことが多いが、人数が多い場合は全体とグループで行っている。大学の合同カンファレンスは研修、学生代表の発表、学生によるシンポジウム､学生主体の運営など多様な形態で行っている。

ア　大学における合同カンファレンス

大学で実施した合同カンファレンスの実施報告書を下記に紹介する。大学の合同カンファレンスでは、基礎実習・インターンシップで体験した中で、誰もが遭遇したと思われる事例を取り上げて検討している。体験に基づいたいろいろな意見が出され、友だちの考えや関わり方、大学担当者の考えなどから、自分の考えや取組を見直す機会となっている。

＜幼稚園合同カンファレンス実施報告書＞

1　日時　　平成 23 年 7 月 20 日（水）7，8 限　14：45～16：15

2　場所　　4－1 セミナー

3　出席者　学生 12 名　大学担当者 3 名

4　実施内容とその効果

（1）実施内容

・テーマ「ボランティアをしている学生誰でも出会うと思われる事例」の検討

・ポートフォリオをもとに、3 名の学生から、提案があった。

事例１　牛乳を飲む時間のこと。A児がなかなか座らない。声かけすると、B児と座りたいという。B児はすでにC児と座っていた。B児と一緒に座りたいA児をめぐる 3 名への対応問題に直面したときの事例。私の対応と先生の対応は同じであったが子どもたちの反応は違っていた。しっかりと子どもたちへかかわっていた学生の自分自身の対応を見つめた事例を発表した。

事例２　A児は朝から新聞ボールを作りたいと言っていた。しかし、お面ができていないA児に先生はお面を作るよう声かけをしていた。環境構成の準備から帰ってみると、A児は泣いていた。A児は「もう何もしない」と言ったまま何も話さないで座り込んでしまった。かなりの時間、そばに黙って座っていた私が、シャボン玉が飛んできたので、「見て、シャボン玉がお空まで上がっているよ」という声かけするところから、A児との話が始まった。A児と共に過ごした貴重な体験を発表した。

事例３　年少のY児と一緒に遊んだ体験。Y児はアゲハ、トカゲ、アリ、ダンゴムシ、カマキリ、バッタと次々と関心を示していく。その観察の様子と私の驚きを報告した事例。

・日常よく見られる事例をもとに、参加者全員で検討した。（検討内容略）

（2）実施効果

・友だちや先生との話し合いの中から、ボランティアをしての悩みや疑問などを出し合い、多くのことを学ぶことができた。

・子どもたちの立場に立って考えることの大切さを学んだカンファレンスであ

った。

・子どもたちへのかかわりは、担任の先生や母親にはやはりかなわないことがわかった。

イ　卒業生参加による合同カンファレンス

合同カンファレンスの中で学生からたいへん役立ったと評価されたのが卒業生（５年以内の現役経験者）参加の合同カンファレスである。この合同カンファレンスは学生の進行で行われた。学生の代表が集まって事前に打合会をもち、下記のような準備をして臨んだ。また、発表者（提案者）にはできるだけ下記のような発表資料を用意してもらい、検討しやすい工夫をして行った。

＜卒業生参加による合同カンファレンス＞

1　日時　平成 23 年 12 月 3 日（土）　10：00～12：00

2　場所　520ND（保幼）、640ND（小）

3　実施内容

①受付（卒業生参加者名簿、検討資料配布）

②全体会：卒業生自己紹介（勤務学校園、担任等）

発表者（提案者）各 3 名ずつ

③グループ（10 グループ程度）で検討会（学生は自己紹介）

④司会進行者は全員発言できるような工夫をする

⑤卒業生からのアドバイス

⑥卒業生への質問コーナー

⑦グループで閉会

4　合同カンファレンスでの体験発表例

＜3 年生学生Ａさんの体験発表（提案）：クラスの中の支援の在り方＞

私が実習で担当させていただいた４歳児クラスの中には，特別な支援を要する幼児が複数人いました。Ｙくんは，集団活動が苦手で新しい環境に適応するのに時間がかかります。また，大きな声や音が苦手で，配慮が必要です。Ａちゃんは，一度にいくつかの活動をすることが難しく，次の活動については，常に教師がわかりやすく指示をしていかなければなりません。Ｈくんは，怒られたり注意されたりすると，イライラする感情を一度は溜めることはできるのですが，限界に達すると，感情を爆発させるかのように，物や人にあたったり，大きな声を出します。しかし，友達と関わりたいという気持ちは強く，遊びにも積極的です。

Ｈくんは，ＹくんやＡちゃんとも関わろうとしますが，二人はＨくんを怖がり，逃げだします。例えば，Ｙくんは毎朝，早く登園してきますが，Ｈくんが保育室に入ってくると，朝の準備もそのままにして，保育室を出ていきます。また，保育室での集まりがある場合などは，Ｈくんがどこにいるのかをまず一番に確認するかのように見回します。そして，Ｈくんが何をしているのか，怒っているのかなどについて，私に尋ねたりもします。「怒ってないよ，今日は楽しそうにしているよ」と伝えると，一旦は安心したかのような表情を見せますが，目の前にＨくんが現れると，「怖い！」といって逃げるように走り去っていきます。Ａちゃんは，当初はＨくんとも普通に話しをすることはできていましたが，Ｈくんが一度，激しく怒った場面に遭遇して以来，Ｙくんと全く同様の行動を行うようになりました。ＹくんやＡちゃんの中に生じたＨくんに対する「怖い」という思いを，いかに取り除いていきながら，彼ら同士を繋いでいくことができるのか。これは，実習中に解決することはできなかったとても大きく難しい課題でした。

＜みんなで検討する内容＞

質問１　Ｙくんが，集団活動が苦手だと言われていましたが，保育者はどのような配慮をされていたでしょうか。

質問２　ＹくんやＡちゃんが，Ｈくんに対して，「怖い」という表現を行った場合，保育者はどのように対応をされていたのでしょうか。

質問３　Ｈくんに対して，他の子どもはどう思っているのか。

質問４　Ｈくんは，興奮したら，どのように落ち着かせるのか。

質問５　ＡちゃんとＹくんは誰と遊んでいるのか。二人は仲良しか。

このような体験発表（提案）資料をもとに、保幼分科会と小学校分科会に分かれて、それぞれ 3 名が体験発表をし、それぞれ課題となっていることについて検討した。小学校分科会では 10 グループに分かれて先輩を囲んで検討会を行った。保幼分科会では卒業生のシンポジウム形式で実施した。現職で活躍している先輩卒業生のアドバイスや苦心談などは身近な存在の卒業生だけにたいへん参考になったとの感想が多かった（図 16 参照）。

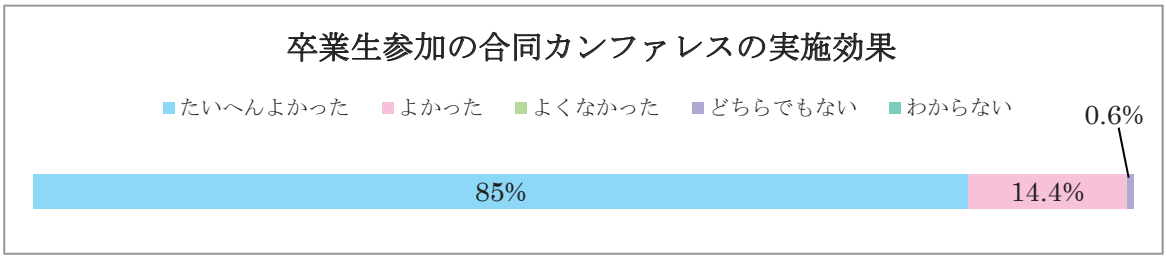


図 16：卒業生参加の合同カンファレスについて（学生評価）

ウ　学外公開による合同カンファレンス

保育園希望者の合同カンファレンスを、平成 23 年 2 月と平成 23 年 7 月の 2 回保育講演会と兼ねて学生や学外参加者対象に実施した。

2 月 23 日（水）に実施した保育講演会、保育カンファレンスでは内外から 138 名の参加を得て、「保育者とは誰のことか―大人と子どもの関係論」と題してお茶の水女子大学大学院浜口順子准教授が講演された。その後、保育カンファレンスを行い、5 名の学生から試行中の基礎実習・インターンシップ体験談を報告し、浜口准教授から指導助言をいただいた。参加した学生からは、「これからの基礎実習・インターンシップに生かしていくことができる」、「勉強になった」という感想が出ている。

7 月 9 日（土）に実施した保育カンファレンスには学内外から 126 名参加した。基礎実習履修者 2 名、インターンシップ履修者 2 名が体験発表をして、講師から指導助言を受けた。基礎実習・インターンシップで多くの学生が体験している事例であったので、参加した学生から、「自分自身も体験した事例だったのでたいへん勉強になった」「視野が広がりました」「先輩の体験談、考えを聞くことができてよかった」等の感想が記述されていた（図 17－1 参照）。

＜保育カンファレンス実施効果＞

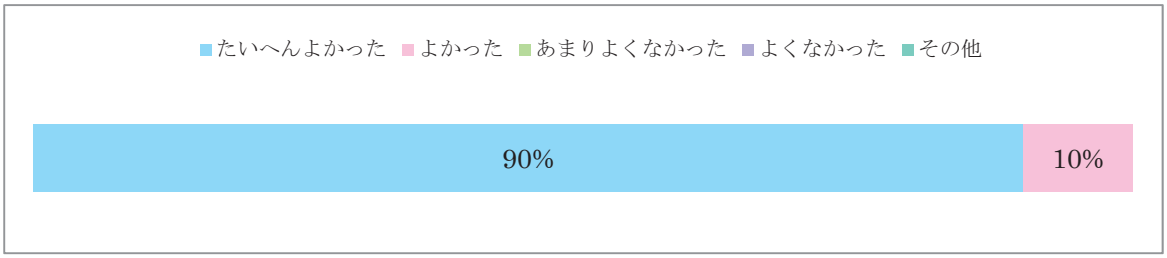


図 17－1：保育カンファレンスの学生評価

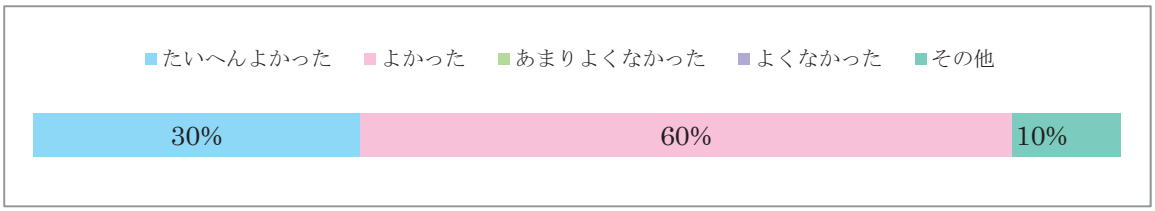


図 17－2：学外参加者の評価

また、学外参加者のアンケートには、「学生が保育者としてあるべき姿を模索した熱心な取組はすばらしい」「学生の学びに、私自身が学ぶものがあった」「学生がしっかり考察されていることに驚いた」等の感想が記述されていた（図 17－2 参照）。

エ　学校園の合同カンファレンス

連携学校園で合同カンファレンスをそれぞれ 2 回実施した。どんなことを検討していたか、保育園、幼稚園、小学校の実態によって異なるが、実施報告書をもとに、H 小学校の例を紹介する。小学校では 1 年生から 6 年生と多岐にわたるが、子どもの実態や子どもへのかかわり方が問題になることが多い。H 小学校でも教師としてどうかかわっていくとよいのかについて検討した。意見が出しやすいようにグループに分かれて話し合った。学生の体験では考えにくいところではH小学校の先生や大学担当者が一つの考えとして提案した。H 小学校学外実施委員会での合同カンファレンスは次のようであった。

＜H小学校学外実施委員会実施報告書＞

1　日　時　　平成 23 年 8 月 23 日（火）10：00～12：00

2　場　所　　H小学校多目的教室

3　参加者　　・H小学校校長､教頭　・大学担当者 3 名

・H小学校基礎実習・インターンシップの学生

（2 年生 10 名、3 年生 9 名、4 年生 1 名計 20 名）

4　実施内容とその効果

(1) 実施内容―実施委員会の日程

①テーマ「こんなとき、どうする」「こんなこと、どう考える」

②ボランティア体験発表

ア、「称揚の仕方と注意の仕方」　　3 年Ａ組

イ、「得意な子どもだけでなく、みんなでつくる授業や遊び」

4 年Ｂ組

ウ、「勉強を教えるってどういうこと？」　2 年Ｃ組

③発表について、意見交換

・アの問題提起については、全体で考える

指導助言（H小学校長、教頭）

・イ、ウの問題提起に分かれて考える

イのグループ　指導助言（H小学校長、大学担当者）

ウのグループ　指導助言（H小学校教頭､大学担当者）

(2) 実施内容―合同カンファレンス実施記録

10：00～　これから実施委員会での合同カンファレンスを行います。

本日の出席者を紹介します。

・H小学校から校長、教頭、大学からＧＰ支援員、大学担当者を紹介する。

・それでは学生は自己紹介でお願いします。学年と名前をお願いします。

10：10～

・今日は、基礎実習でのボランティア体験で思ったこと、考えたこと、悩んだことなどについて 3 人の方から問題提起をしていただきます。ポートフォリオをもとにうまくまとめてくださっています。この三つは誰でもが出会いそうな事例ばかりだと思いました。

・まず、3 人の報告をお聞きしたいと思います。そのあと、検討していきたいと思います。皆さんも自分のボランティア体験をもとにご意見や悩みなどを出してくだされば と思います。

・それでは、Ａさんから、どうぞ。

・では、Ｂさん、どうぞ。

・最後に、Ｃさん、どうぞ。

・これだけのものを検討するのは時間内にはできないと思われます。

・そこで、1 事例をみんなで考え、あとの 2 事例はグループにわかれて考えることにしたいと思います。

10：30～

◇はじめに、Ａさんの事例、ほめかたと注意の仕方について 7 つほどの問題提起がありました。これをみんなで考えてみましょう。

まず、掃除の場面。

・がんばって掃除をしている子どもに、さらに意欲を持つような、ほめかた。どう声かけしたらよいのだろうか。

・掃除をさぼっている子どもが掃除をするようになるような、声かけはどうすればよいのだろうか。

・子ども同士の声かけができているときはどうか。

＜参加した学生の意見＞

○「Ｅさん、Ｆさんはこんなに協力してそうじをしているよ。」と称揚し、他の児童の意欲を駆り立てたい。

○汚れているところをしている児童を見つけ、「先生も気付かなかったけど、きれいになったね」と称揚する。

○「ここはこうすると、きれいになるよ。してごらん。」として見せ、やらせてみることも効果的ではないか。

○どの子どものほめてもらいたいという気持ちはあると思う。今までしていなかった子どもがし出したときにほめるなど、しっかりほめていくことが必要だと思う。

＜Ｈ小学校校長からの助言＞

◇先生は児童のしていることをよく見ることが大切である。叱るにもほめるにも児童のしていることを見ないとできない。

◇学年によっても違うが、掃除場所での人数、道具、仕事量などを考えることも進んで

する上で大切ではないか。次に、授業の場面での問題提起が４つほどありました。

・子どもに手を貸す場面とそうでない場面。具体的にどんな場面が考えられそうか。

・個別指導や、その子どもに合わせて指導は、他の子どものことを考えると、不公平が起きないか

・その子どもの試行錯誤、一生懸命考えることの邪魔にならないか。

・教師一人で全員を注意して見守ることができるのか。できないときはどうするのか。

○ボランティアの体験から一点を見るのではなく、たえず全体を見回すことが必要だと思った。

○安全の配慮はさまざまであった。危険な版画での彫刻刀の使い方などは何度も注意されていた。ボランティアで行ったが私たちが必要ないぐらい気を付けて指導されていた。

＜Ｈ小学校教頭の助言＞

◇高跳びは事故が多いが、例えば、初めゴム跳びで行い、それからバーを使うことが考えられる。先生の立つ位置も考える必要がある。

◇子どもの力を借りることも考えられる。例えば、人数確認など。

◇授業の中で個別指導はどんなときにすると良いのか、これからも先生の動きを見てほしいと思う。

11：10～　2グループに分かれて話し合う。

・Ｂさんの事例には、3年生が参加。Ｈ小学校校長、大学担当者

・Ａさんの事例には、2年生が参加。Ｈ小学校教頭、大学担当者

◇Ｃさんの事例。教えることの難しさについて、３つほど問題提起がありました。

・Ｅ児の算数引き算の指導。○匹のうさぎ、３匹帰る。残りは何匹。
どう対応したら良かったのか。

・やる気をそがないためには、どう意欲づけしたらよいのだろうか。

・Ｆ児の国語作文の授業。「ぼくは、きのう、○○をしました。」口頭ではできる。書けない。「は」や「を」がうまく書けない子どもも多かった。こんなときどうすればよかったのだろうか。
いずれも教師になると出会う問題ばかりです。

◇Ｂさんの事例。得意な子ともの活躍だけでなく、みんな参加できる授業や遊びはできないか。6つの問題提起をしています。まず、授業の場面。

・社会科の得意な子ども、どう位置づけたらよいのか

・その他の子ども、どう生かしていくとよいのか

・みんなが達成感や充実感を味あうことのできる授業にするにはどうしたらよいか

○机間指導をして、できている児童に発表するよう頼んでおくことも考えられる。

○新聞づくりなど活動を取入れ、発表ばかりの授業でないように工夫する。

○わかりやすい発問をして、みんなが参加できるようにする。

○グループ学習など子ども同士で教え合うような授業をする
○手の上げ方のルールを決めてみてはどうか
○キーパースンとして、必要な場面において発言させてはどうか
・遊びの場面。ドッチボールの得意な子どもは大活躍。得意でない子どもはどうして参加しているのか。
・友だち関係いろいろな理由から、仕方なく参加している子どもが増えているように思えるがどうか。
・遊ぶは自由にさせておくのがよいのか、何かいろいろな遊びを選択できるような工夫をしてもよいのではないか
・遊びは個人が決めること、子どもに任せておいてはどうか。
・日替わりメニューを考えてはどうか。
・個別にその子どもの気持ちを聞いたり、関わったりするのはどうか。
◇子どもと遊ぶことはとても大切。子どもとの親近感が生まれる。次第に信頼関係を気付くことができる。
◇子どもとともにいると、トラブルや遊びへの気持ちなどがわかるようになる。
◇遊びで不十分だったことを体育の時間に取入れて指導いくこととも可能だ。
12：00～本日の合同カンファレンスについてアンケート調査。
（3）実施の効果
①合同カンファレンス参加者のアンケート調査集計結果、参考になったとの意見が多かった。
・参加学生から、次のボランティア体験にたいへん役立つという意見が多かった。
・とくに、これから教育実習をする 3 年生は教育実習に役立てたいと言う学生が多かった。
・ボランティア体験の少ない２年生は先輩の体験や考えが大いに参考になったという感想が多かった。
②感想例
「今日の話し合いではいろいろな意見や考えが聞けてよかった。たいへん勉強になった。子どもの遊びについて、こんなに深く考えたことがないので参考になった。遊びは子どもに自由に活動させつつ、体育の授業の中で育てて、また遊びに生かしていくなどすごい工夫だなと思いました。」＜2 年学生＞
「自分にとって、ためになる時間でした。自分のボランティア体験の中にもこのような問題があったのだと私が発見できなかったことを改めて感じました。一つのことについて、いろいろな意見が聞けて良かったです。今度、このような機会がありましたらぜひ参加させていただきます。」　＜3 年学生＞

次に、S 幼稚園での合同カンファレンスの例を紹介する。S 幼稚園では参加学生は少なか

ったが内容の濃い検討会となった。

＜Ｓ幼稚園学外実施委員会実施報告書＞

1　日　時　　平成23年8月29日（月）　13：00～17；00

2　場　所　　Ｓ幼稚園

3　出席者　　○学生４名　Ｓ園長・主任・３歳児担任　○大学担当者３名

4　実施内容とその効果

（1）実施内容

①　自己紹介

②　基礎実習・インターンシップで体験したこと

・　登園指導の補助

・　先生の指導の観察

・　定期的に訪れ、幼児とかかわりながら、幼児の遊びの姿を観察

・　行事前の準備補助・環境整備、保育室の清掃

③　合同カンファレンス

・　共同と協同の違いについてどう考えたらいいのか。

＊学生のポートフォリオによる質問を受けて、事前に『幼稚園じほう』に記載されているＢ先生の文献をコピーし、回答を準備くださっていた。

この文献を４名の学生が輪読し、質問に対する基本的な考え方を学んだ。Ｂ先生によると、子どもたちが遊びの目的を達成するために役割を分担して遊ぶ協同活動ができるようになるまでには、共同―共存―共有―協同のプロセスがあると述べられていた。具体的な事例を通して解説されていたため、学生も納得して理解できたようである。この後、園での具体的な事例も交えながら話し合いがなされた。

・　３歳児の思いを受け入れながら指導することはなかなか難しいと感じた。先生方はどのような願いをもって指導されているのか。

＊４月当初は、園での生活スタイルが理解できず、すぐ遊びたいという気持ちが強く、登園すると直ちに園庭で遊びはじめ、なかなか保育室に入って来ない子どもがいる。園生活のルールも知らせたいが、まずはその子の気持ちを受け入れ、満たしてあげたいと考えている。ひと遊びしてから出席シールを貼ることや持ち物の始末をすることに気づいていけばよいと思う。とにかく、「幼稚園に来たい・遊びたい」という気持ちを受け入れることが大事である。そして、幼稚園は楽しいと感じてほしいと願っている。いきなり禁止の言葉ではなく、子どもの気持ちを動かす援助や、一人一人に寄り添った指導を心掛けている。ただし、担任一人だけの力では十分受け止められないため、園の先生方すべての協力や年長児の助けをいただきながら、進めている。

・　終業式の日、３歳児が担任と園内を巡り、年長・年中の子どもたちや用務員

さん、先生方にお礼の言葉を言っていた姿が深く印象に残った。とても自然でほほえましく３歳児の１学期の園生活が楽しいものだったに違いないと感じることができた。

＊長い夏休みを前に「いっぱい遊んだ幼稚園の探検に行こう」という誘いかけではあるが、１学期間お世話になった大きい組の友達や先生方、用務員さんへの親しみと「ありがとう」の気持ちがもてたらいいなと考えていた。しっかり意味づけをしていただいて、とても嬉しく自信になった。

・ 終業式で園長先生が園歌の歌詞について子どもたちに分かりやすく話されるのを聞いて、園歌に込められた願いが感じられて、きっと子どもたちにも理解できると感じた。

＊そのように感じていただけてとても嬉しい。このような気づきをこれからも大切にしてほしい。

（２）実施効果

・ 3歳児の担任の先生も参加してくださり、保育について具体的な話し合いができた。一人一人の子どもが園生活を楽しむことができるように、子どもの実情に寄り添いながら、子どもだけでなく保護者をも支え導いている大きな役割が実感できていた。

・ 今回のカンファレンスを通して、自分なりの保育観を再構築するよい機会となったようである。

・ 4年生は、保育の醍醐味を味わうことができ、幼稚園教諭になりたいという思いを高めることができていた。

・ 3年生は、10月からの教育実習に対する不安が和らぎ、期待となって９月のボランティア活動への意欲を高めていた。

・ 学生の素直な感想や意見に、教師側にも多くの学びがあったようだ。特に、3歳児担任からは、「日々なにげなくやっていることを、いい視点で観察し、意味づけまでしてもらえて、自分の保育に自信がもてた。」と、感謝の言葉をいただいた。学生は、今後さらに意欲的に観察をすることができると思われる。

5　その他

・ 園側の温かい受け入れ態勢があるため、学生が安心して子どもに関われると感じた。また、学生の質問や気づきにも細やかに対応して、ご指導いただけていると大変ありがたく感じた。

連携学校園での学外実施委員会は各学校園の温かいご支援があって実施できている。この学外実施委員会の合同カンファレンスに参加している学生の実践的能力は確実に高まっていると感じている。

オ　合同カンファレンスの実施効果

合同カンファレンスの実施効果について、学生の評価、大学担当者の評価、学校園の先生方の評価から考察した。学生は合同カンファレンスはよかったと答えていた（図 18－1 参照）。また、合同カンファレンスでは子どもへのかかわりかたや友だちや先輩の取組や考え等が勉強になったと記述していた（図 18－2 参照）。

学生の「合同カンファレンスをしての感想」をみると学生が実践的能力を高めてきているのは、実体験だけでなく、ポートフォリオへの記録の仕方や合同カンファレンスでの検討などが効果を上げていることがわかってきた。

＜合同カンファレンスについての実施効果＞

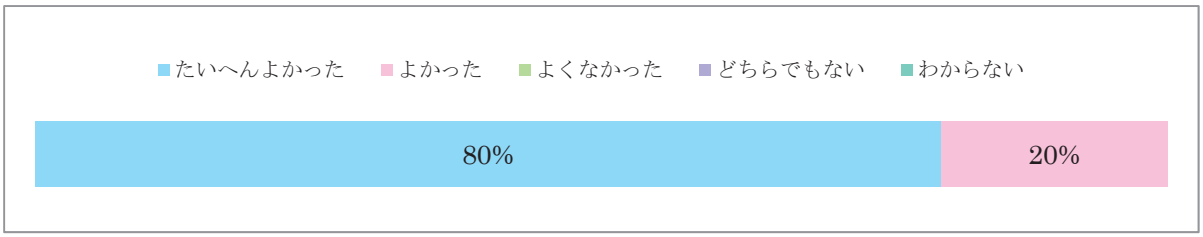


図 18－1：合同カンファレンスについての学生の評価

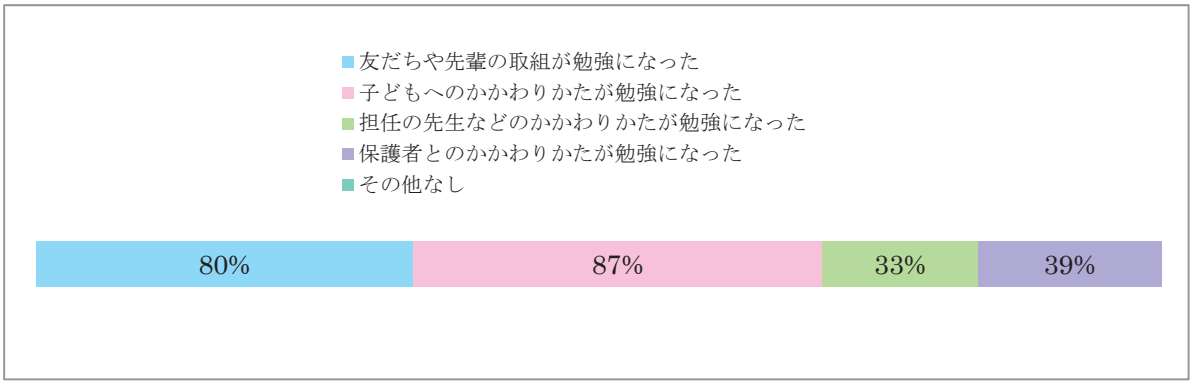


図 18－2：合同カンファレンスで勉強になったこと

＜合同カンファレンスをしての感想＞

・友だちの取組の様子や考え、子どもへのかかわりかたが聞けてたいへん参考になった。
・現場の先生方の生のお話が聞けてたいへん勉強になった。
・疑問や質問を直接聞くことができ、不安な気持ちが解消され、またがんばろうと思った。
・現場の先生方のアドバイスやコメントが聞けて、明日からに役立てることができると思った。
・いろいろな学校園の現状や保護者とのかかわりがよくわかってよかった。
・ボランティアの参加の仕方、子どもへの関わり方について相談できてよかった。

・園長先生や先生方の何気ないお話から、自分は保育職に向いていないのではと悩んでいたが安心することができた。
・ボランティアだけではわからなかったことがカンファレンスのおかげで理解できてよかった。
・現場の先生が苦労されていること、工夫されていることがよくわかった。
・自分だけでは気づかなかった点を新たに見つけることができてよかった。
・学んだことや悩み等が共有できた。
・不安な気持ちを軽くすることができた。
・学校が保護者と協力して子どもを育てていることがわかり、がんばろうと思った。
・現場で活躍されている先生の生の声を聞くことできてよかった。

推進した大学担当者から学生の基礎実習・インターンシップについて感想を聞いた。

＜合同カンファレンスに参加した大学担当者の評価＞

・ポートフォリオと合同カンファレンスが実体験をした学生の実践的能力を高めていることはまちがいない。
・ただ体験しただけでは即戦力にはつながらない。ポートフォリオに書いて自分の取組を振返ったり、合同カンファレンスでみんなの意見や考えを聞いたりして、子どもへのかかわり方、指導の仕方が子どもによって、その場面によっていろいろあることをつかんできている。
・指導の先生方、先輩、友だちの意見を参考に自分なりの取組を振返り、さらなる課題を見つけて取組んでいる学生が即戦力につながってきている。

実際に実施して、大学担当者も学生もポートフォリオや合同カンファレンスが実践的能力を高めていく上で大切であると感じてきている。

また、合同カンファレンスに参加した学校園の先生方に「合同カンファレンスは学生にとって深まりがあったのか」と尋ねた結果、学生は多くの点から学んでいるとのご指摘があった。

＜学校園の先生方からのご感想＞

・一つのことについて学生から多面的な意見が出てきており、話し合いの内容も深い。
・学生の前向きな取組に担任をしている我々が参考になった。
・内容の濃いアドバイスをすることが多かった。
・合同カンファレンスをする上で学生が事前に打合会をして、準備をして臨んでいる。コーディネーターとしての役割も身についてきている。
・ポートフォリオの内容をもとに提案したり、話し合ったりするので、ポートフォリオの内容も深まっている。
・学生の熱心さから時間が延長することもしばしばであった。3時間もの合同カンファレンスがあっという間であった感じがした。

カ　合同カンファレンスで学んでいること

基礎実習・インターンンシップを履修している学生にとって、合同カンファレンスがどんなことに役に立っているのかについて調査した。

・友だちの取組・考えが参考になった
・先輩の考え・アドバイスが参考になった
・子どもとのかかわりかたが参考になった
・学校園の先生（担任など）のアドバイス・考えが参考になった
・保護者の考えが参考になった
・大学の先生のアドバイス・考えが参考になった
・検討した事例が参考になった
・一つの事例を深く考えたことが参考になった
・自分が体験した事例なので参考になった

等参考になったことをあげている。

合同カンファレンスでは、自分の体験をもとに全員が自分の考えを発表するようにしているため、参加者からは友だちの取組や考えがたいへん勉強になるとの声を聞く。また、連携学校園の先生や大学担当者等からの適切なアドバイスを楽しみにしている学生も多い。合同カンファレンスで取り上げている検討内容が共通に体験している事例が多いのも効果を上げている一因となっている。

合同カンファレンスには、学校園での合同カンファレンスと大学での合同カンファレンスがある。学校園での合同カンファレンスでは学校園での基礎実習・インターンンシップの体験について検討している。また、大学の合同カンファレンスでは､学生が基礎実習・インターンシップで必要と思われることを取り上げて行っている。

キ　ＧＰ支援員による個別アドバイス

ポートフォリオを大学に提出すると、元保育園・幼稚園園長、元小学校校長であるGP支援員が保幼小別に学生のポートフォリオを読んで一人一人にアドバイスをしている。学生のネット上でのポートフォリオ例と、そのポートフォリオにアドバイスをしているＧＰ支援員のコメント例の一部を紹介する。

＜マナバフォリオ上でのＡさんのポートフォリオ＞

1　8月17日　9：00~16：00
2　担当クラス　2歳児いちご組
3　1日の流れ
・外遊び・着替え・絵本の読聞かせ・プール・着替え・積み木遊び・絵本の読み聞かせ
・昼食・着替え・お昼寝・着替え・おやつ・外
4　活動の内容と考えたことなど

・外遊びの時は、とんぼ組の男児Kといちご組の男児Sを側で見守っていた。男児Kは片付けのプラスティックのかごを持ってきて車に見立てて遊んでいる。Sがやってきてそのかごに無理矢理入った。2人がちょうど入れるサイズだったこともあり、2人は仲良く車ごっこを始めた。「どこに行きますか?」「〇〇〇ですよ」「着きましたよ」と言いながら 2 人ともハンドルを持つ真似をして運転をしている。目的地に着くと男児Kがかごから降りて遊びだした。
・プールの前の着替えが終わり、先生が「お姉さんに本を読んでもらおうか」と言った。私は突然のことだったのでびっくりしたが、初めてだったのでとてもわくわくした。先生の持ってきてくれた本は「もこもこもこ」だった。最初、4人の女児が私を囲むようにして座り、「ぱく」「もぐもぐ」「にょき」などの言葉に合わせて食べる真似をしたり、体を動かしたりしていた。そのうち男児も寄ってきてみんなで本からむしゃむしゃ食べる真似をした。
・プールのとき、女児Hがジャンプして水の中にもぐり「からいよ!」と私に教えてくれた。私が「えーからいの?プール」というと女児は「からいからい」と笑いながら何度も話してくれた。すると周りにいた子どもたちも口々に「からい」「からい」と言ってきた。私もそれぞれに「からいの?」「からいの?」と聞き返した。子どもたちはやはり「からい」「からい」と言い、笑い合っていた。プールがからいなんて聞いたことないなぁと思いながらも楽しそうな様子にどんな気持ちや味がするのだろうと私もプールに入りたくなった。
・プールに入りながら女児Hは、「ひまわりしゃんさいてるー」という。プールから見える畑には2本のひまわりが堂々と咲いていた。先生がその言葉に気づいて、「本当だ、ひまわり咲いてるね」と言った。「みんな来てごらん」と先生が言うと、プールの中にいた子どもたちがふちに並んでひまわりを皆で見た。「おーい」とHが言うと、みんなも口々に「おーい」と繰り返した。ひまわりにこんなに嬉しくなれるなんて素敵だなと思った。私も先生みたいにその喜びを分かち合えるような関わりができるようになれたらいいなと思った。女児Hはその後も何度か「ひまわりしゃんがね、さいてた」と教えに来てくれた。皆でひまわりにあいさつしたことが嬉しかったのだろう。
・プールでは1歳児クラスのうさぎ組の 2 人も一緒にプールに入っていた。うさぎ組の男児Tはまだ顔つけが出来ないが楽しそうに水に入っている。少し時間が経つと、プールのふちにずっと居るので私は「T君、どうしたの?」と声をかけた。するとTは両手を挙げてこちらに近づいてきた。Tはまだあまり言葉で表現するということが少ないので私が、「お外に出たいの?」と聞いた。Tは、うなずくこともなかったがきっと出たいのだろうと思い、抱っこしてプールの外に出した。プールは屋上にあるので、そこからは畑や駐車場や山が見える。Tがそちらをずっと見ていたので「何が見える?」と聞くが返事はない。私はTを見ながら他の子どもたちを見ていた。ふとTを見るとまた手を挙げてきた。私は「プールに戻りたいの?」と聞き、抱っこしてプールに戻した。すると今度は違ったようでまだ手を挙げている。出るのかなと思い、出そうとするとTは離れようとしなかった。抱っこした

ままの風景が見たかったようだった。Ｔよりは背の高い私に抱っこされると随分と景色が変わるのであろう、Ｔは少し嬉しい顔になった。私はその顔を見て少しは要望に応えられたかなと思った。ずっと外を見ている訳にもいかないのでプールの方に向き、「プールはいる?」と聞いてみた。するとＴは乗り気ではないようだったので「みんなの方を見てようか」と言うとうなずいたので、私はＴを抱っこしたままみんなの様子を見ることにした。Ｔは抱っこされたまま一緒にみんなの様子を見ている。何も言わないが一緒に居ることで温かくなった。プールが終わり、Ｔの着替えを手伝った。うさぎ組はまだ園庭で水遊びをしていたので、Ｔは先生から「遊ぼうよ」と誘われていた。私はＴに「どうする、行く?」と尋ねた。Ｔは「行かない」とだけ答えた。私は「じゃあここでまた見てようか」と言った。Ｔは「見てる」と言い、私の隣に座った。会話はほとんどないが目を合わせるたびに笑いあっったりしながら時間を過ごした。共にいるということだけでこんなにも嬉しいな幸せだなと感じた温かい時間だった。何か特別なことをして遊ばなくても一緒に座って外を眺めることだけでも、お互いにきっとなにか感じるものや得るものがあると思う。

・昼食の片付けのとき、男児Ｔ と Ｓが食べ終わり、口を拭く時間にお手拭きをたたんだり投げたりして遊んでいた。口を拭いた人からパジャマに着替えてお昼寝という流れなので、私は「お口拭こうね」「きれいになった？」と声をかけていた。しかし男児Ｔ と Ｓはお手拭で遊ぶことに夢中で聞いていない。何度か近づいて言ってみたが楽しいのかなかなか口を拭こうとしなかった。そこで私は言うのをやめ、片づけをしながら見守ることにした。少し時間がたって、2 人は椅子を拭いている。私はそれを見て「Ｔくん、椅子はきれいになった？ありがとね」「椅子を運んでくれると嬉しいな」と声をかけた。Ｔは「いやなんじゃ」と言いまた遊び始めた。しかし Ｓ の方はお兄さんタイプなので手伝いがしたくなったようで運んでくれた。近くに残っていたお友達の椅子まで持ってきてくれた。「Ｓくんありがとう、助かったよ。おやすみ！」と私が言うと Ｓ はお昼寝のお部屋に走っていった。その椅子を私が運んでいると、今度は笑顔のＴが自分から椅子を持ち走ってきてくれた。「ありがと～」と私が言うと、Ｔは更に笑顔になった。まだご飯を食べていた女児 Ｃ が横を向いて食べていたので、「Ｃちゃんも運んでくれるかなぁ」と私は言った。すると「うん！」と Ｃは元気よく答えまた食べ始めた。声かけや友達の行動がきっかけになって、役に立ちたいという思いや楽しそうという思いが生まれたのだと思う。せっかくなら楽しい気持ちで生活してほしいと私は思うので、上手く楽しい気持ちを引き出せてよかったと思った。

５　本日の感想

今日、初めて子どもたちの前で本を読ませてもらったことが 1 番嬉しかった。まさか読み聞かせをさせてもらえるなんて思っても見なかったので緊張もしたが、楽しく一緒に読むことができたと思う。子どもたちはその本のことをよく知っていて、次のページのことをよく覚えて先に読んでくれる。私は、読み聞かせをしてはいるが、読んでもらっているようにも思えた。時には違うことを言っていることもある。しかし、それを直すのではなく、子どもたちと一緒に読んでいるということを大切にしたいと思った。その子がそう表現し

たのならそうなのかもしれないとも思う。プールが辛いと言った女児 H もぱんぱん菓子を「ずっと甘い」と言った男児 R も、そう感じたのだろうなとふと思った。この表現が正しいとかそんなことはないと思う。むしろ、人と違ったことを自分の思ったとおりに表現できる子どもたちって素晴らしいな、かわいいな、愛しいなと思った。これからもたくさんのかわいい言葉に触れていきたいと思う。

＜A さんへのＧＰ支援員のアドバイス＞

ボランティア実習よくがんばっておられますね。

いつも感心しています。

＊プール水温について

◎子どもたちの「寒い」の声からプールの水温を温水へ。水温は、とても大切です。

子どもたちが入る前に調節しておくことができれば、よりいいですね。

・遊びに入る前にできている準備

・子どもと共にする準備　　等、準備について又研究してみてください。

＊電車ごっこに発展について

◎プールの周りを回ることから電車ごっこに遊びが自然と生まれ発展。

子どもたちの笑顔の姿に「ホッ」とされたことでしょう。　私たちも子どもたちから教えられること沢山あります。

＊子どもの成長について

◎子どもの成長する（男児 R）姿に目を向け、よく観察できていますね。「何かできる瞬間は、いつやってくるかわからないと思った。」その通りですね。又、子どもの心は、昨日の子どもと今日の子どもの心は異なる事もあるのです。環境が左右したり言葉がけが左右したり・・・いろいろあります

＊表現力のおもしろさについて

◎パンパン菓子→「ずぅーっ！と甘いよ」→どれを食べても同じ甘さの表現。男児の言葉に思わず笑ってしまったのですね。子どもたちと一緒にいると、子どもの発する言葉、表情から思わず笑みがこぼれたり、ドキッ！とさせられたり、きらり！と光る生き生きとした姿に感動させられること、しばしばあるのです。

＊おもらし対処について

◎男児 R のお漏らしから、いろいろな場面との出会い。良い体験となりましたね。

自分のとった行動を見直され反省し、子どもの気持ちを大切に考えられたことは、素晴らしいことです。私まで嬉しくなりましたよ。

２歳児クラスは、そのための複数担任なのだと思います。一人の職員が他の行動を起こす時は、「ひと言」の声掛け（＝連携）が大切となります。担任の先生が、「大丈夫、パンツはこうね」と、言ってくだされば、安心しておしっこ拭きの始末ができたことでしょう。今後の課題にしてみましょう。

＊子どもの気持ちについて

◎二人の道具の取り合いから一人増し三人へ。そして、もう一人加わり四人へ。
それぞれの心の揺れ、動き、よく観察できています。ふとした事をきっかけに、うなずいたり笑ったり、「子どもの気持ちって面白い。楽しい気持ちも悲しい気持ちも紙一重だと思った」・・・と。ほんとにそうですね。可愛く、頼もしささえ感じます。

＊帰宅時“幸せ倍増”について

◎帰るときの、子どもたちの「また来てね」「ダメ！」「バイバイ」・・・これらのひと言！
充分「幸せ」だと思っているＡさんを更に、「幸せ」の波が押し寄せてきたのですね。Ａさんの幸せの波は、私まで届きましたよ。子どもたちの心をしっかり掴んでおられるからでしょう。

＊見立てて遊ぶ楽しさについて

◎この時期になると、模倣遊びが盛んになります。積み木を消毒液に見立てているのですね。動きを十分楽しみながら、生活する中で友だちや物との関わりを広げているのです。今後もますますイメージを膨らませていく子どもたちの様子を見守ってあげてください。

＊男児Ｔの心をのぞく

◎男児Ｔの様子を長い目で見守られてきたことは、とても嬉しく思います。以前の、自分自身の反省から、Ｔ児と向き合い心の揺れをキャッチし、待ってあげた“心のゆとり”です。
保育士として、専門職として、とても大切なものをＡさんは感じ取れたのです。
今後もその気持ちを大切に忘れずにいてくださいね。

＊「本日の感想より」について

◎2歳児との関わりから、得られ感じられたもの

・自己中心的年齢でもきちんと見ている。もしかしたら保育者よりも沢山のことに気づいているのかもしれないなと思った
・気持ちがぶつかりそうになった時、不満に思っている時のきっかけを笑顔に。その心を掴める保育者になりたいのですね。
Ａさんならきっとなれますよ。応援しています！

「**ＧＰ支援員の個別アドバイスの内容**」を見ると、

・コメントする部分に赤で波線を引く
・記述の大切な部分に赤でチェックをいれる
・学生の記述に共感する
・学生の取組を称揚する
・学生の取組への励まし
・学生の取組への意欲づけ
・記述についての感想
・子どもへのかかわりかた、ほめ方などについて助言する

・記述について感想（気持ち）

・学生への「してみよう」等のやわらかな指示やお願い

など、ポートフォリオの内容によって、異なるアドバイス等を一人一人に行っている。また、すでに紹介しているネットを利用してポートフォリオを提出している学生にもネット上で個別にアドバイスを行っている。

ク　GP 支援員による個別アドバイスの実施効果

支援員のアドバイスについてアンケート調査をした結果、役立っていると回答があった。（図 19－1 参照）。

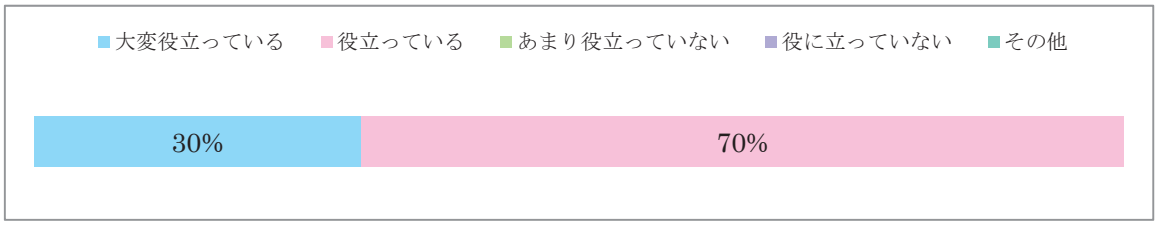


図 19－1：GP 支援員のアドバイスについて（学生評価）

役立っている内容を聞くと、「自信ややる気が起きる」「質問や疑問の答えがわかる」「いま、どんなことをしたらよいかわかる」等をあげていた（図 19－2 参照）

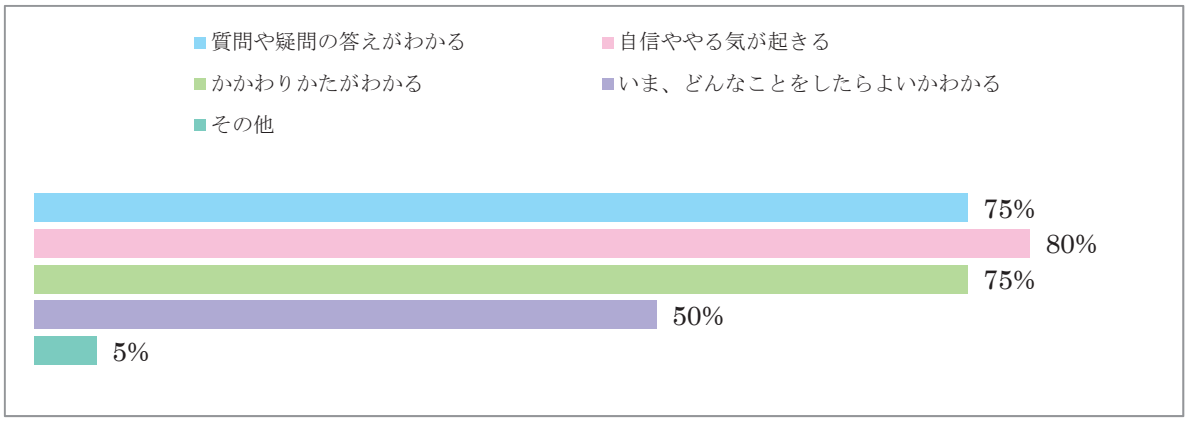


図 19－2：役立っていること（複数回答可）

学生の希望やＧＰ支援員が必要と感じたときは、1 対 1 での対面指導を行っている。対面指導での内容は、連携学校園での取組の不安、体験したことでの疑問、具体的場面での子どもへのかかわり方など、基礎実習・インターンシップで起きた諸問題について相談を受けることが多かった。対面指導によって、学生は自信とやる気を持って、新たな気持ちで取組んでいくことができた。

また、GP 支援員全員が、学生のポートフォリオの内容について、「よく書けている」「内容が次第によくなってきている」という評価をしている。また、「ポートフォリオを書くことによって、基礎実習・インターンシップを振返ることができている」「学校園での実体験に役立っている」との評価であった。

ＧＰ支援員の個別カンファレンスは学生に自信を持たせ、次への体験に意欲を持って取

組んでいく上で大きな効果があることがわかった。

（5）わらべうた講習会の実施

ア　平成 22 年度わらべうた講習会の実施

平成 22 年度 1 月 24 日に 3，4 年生対象にわらべうた講習会を 100 名の学生が参加して試行した。わらべうたをあまり知らなかったという学生は参加学生の 78%であった。講習会に参加した学生から、「わらべうたの楽しさを実感した」「多様なわらべうたを学ぶことができた」「保育の場で実践する参考になった」などの感想が述べられていた。しかし、実際に保育の中で実践することができるかと尋ねると、ほとんどの学生が「わかりやすく伝えられない」「楽しさが伝えられない」「まだ自分のものになっていない」「歌詞の意味がわかりにくい」など、心配だと述べていた（図 20ー1～3 参照）。

＜第 1 回わらべうた講習会の実施効果（学生評価）＞

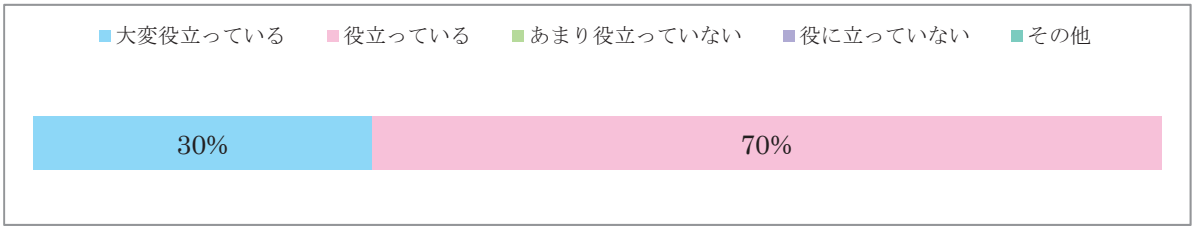


図 20－1：平成 22 年度わらべうた講習会の実施効果

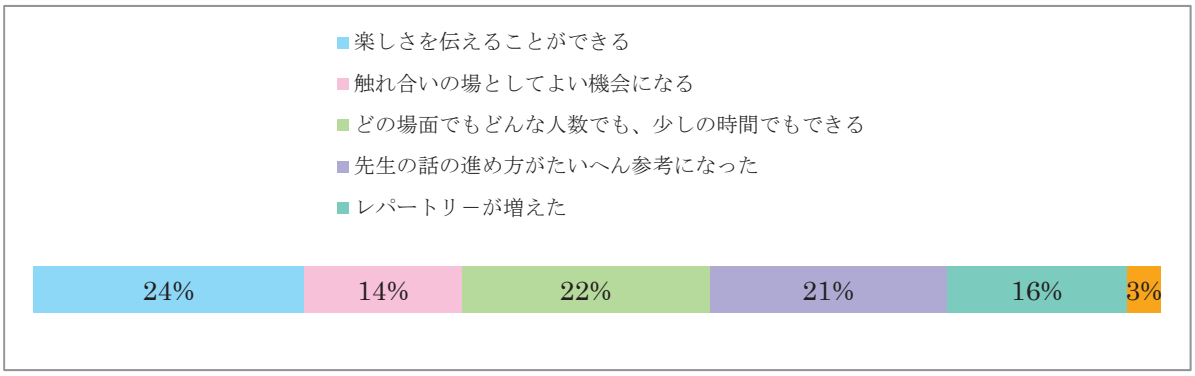


図 20－2：実践する上で参考になったこと

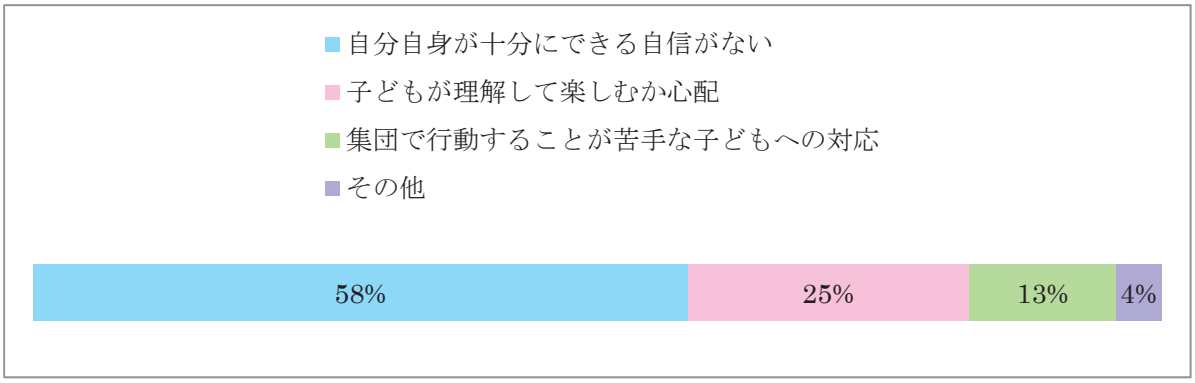


図 20－3：わらべうたを実践する上で不安なこと

イ　平成23年度わらべうたステップアップ講習会の実施

そこで、23年度は、わらべうたステップアップ講習会を3回にわたって実施し、わらべうたを 3 つのステップを通して学び、自信を持って実際に役立てることができることを目的に取組むことにした。

ステップアップ講習会ステップ1

ステップアップ講習会ステップ2

わらべうたステップアップ講習会は 1 年間の長期にわたって行うため、その推進に際してはリーダーとしての役割や学生同士の密なるコミュニケーションが求められる。

講座の内容は、ステップ1（5月実施）で多様なわらべうたを体系的に体験した。

ステップ2（11月実施）では秋のわらべうたを体験し、保育者の立場から実践を行った。学生は4つのグループに分かれて、未就園児の親子を対象とした、わらべうたを15分程度行うという設定で模擬保育を行った。ステップ3（2月実施）では冬のわらべうたを体験し、保育者の立場から実践を行った。年齢に応じたわらべうたの遊び方をグループに分かれて、未就園児の親子を対象とした、わらべうたを15分程度行うという設定で模擬保育を行った。これら3回のステップアップ講座の体験を生かして、平成24年2月25日と2月27日、H幼稚園のご協力で未就園の親子を対象にそれぞれ30分間のわらべうた指導の機会をいただき、学生は自信をもつことができた。

平成22年度の参加学生と同じように、23年度の参加学生もステップ1の体験を通して、わらべうたは子ども同士のコミュニケーションの育成やわらべうたの言葉などに親しむ等、保育にたいへん役立つと感じている。ステップ1では参加した48名の学生のほとんどがわらべうたを保育の中で何とか活用していきたいと思っていたが、ステップ 1 の段階では実際の保育の中で子どもと一緒にできる自信がないと答えていた。そこで、学生が自信を持って取組んでいくことができるよう、ステップ 1. 2. 3 とも講習会後に「わらべうたと保育」をテーマに合同カンファレンスの機会を設けた。ステップ 2 ではわらべうたを実際にどう活用していくとよいのかイメージすることができた。ステップ2ではE幼稚園にご協力いただいて、親子でのわらべうたを実践することができたときの感想を、「親子に楽しさが伝えられた」「親子の触れ合いの場となった」、「子どもたちが喜んでした」「少しの時間でも楽しめた」と述べている。また、全員、「保護者がよく協力してくれた」と答えている。

「自信が持てた」と答えた学生は参加者の 3 分の 1 であったが、全員、「親子の触れ合いの大切さ」、「準備の大切さ」を強く感じていた。また、ほとんどの学生が、「親の我が子への愛情」、「保護者の願い」を感じ取ることもできていた。しかし、親子でのわらべうたのときの幼児の様子の把握や幼児への言葉かけ等の対応については、「十分にできなかった」「まだまだだ」と答えていた。

指導計画を練ってチャレンジするステップ 3 では、図 21－2 のように、「実際の保育に生かす自信を持つことができるようになった」、「ぜひ現場でチャレンジしたい」と答える学生が増えた。

ウ　わらべうたステップアップ講習会の実施効果

＜わらべうた講習会の実施効果（学生評価）＞

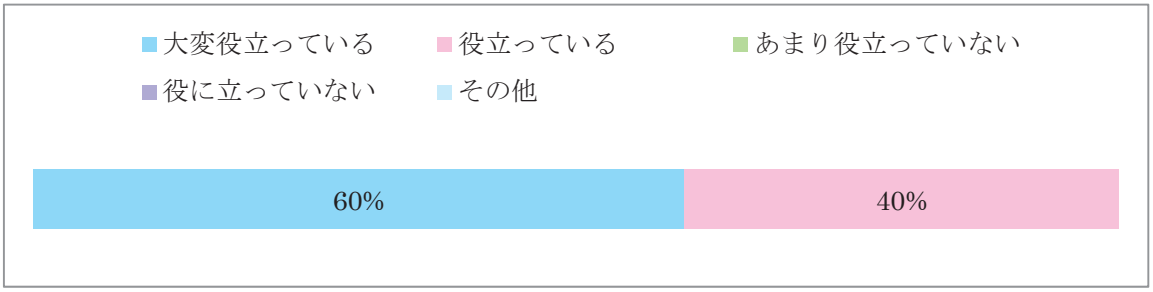


図 21－1：ステップアップ講習会（3 回）の実施効果

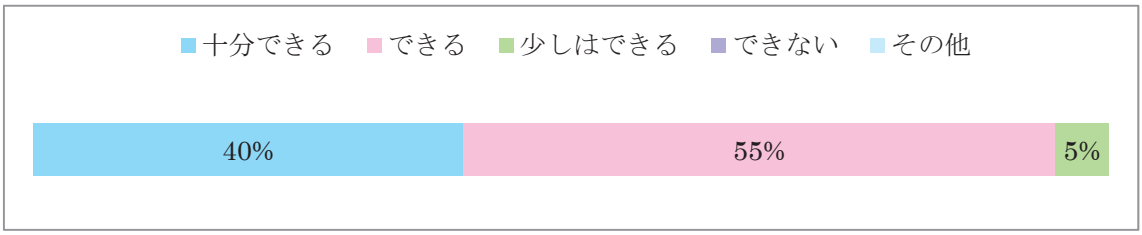


図 21－2：現場で実践できる自信について

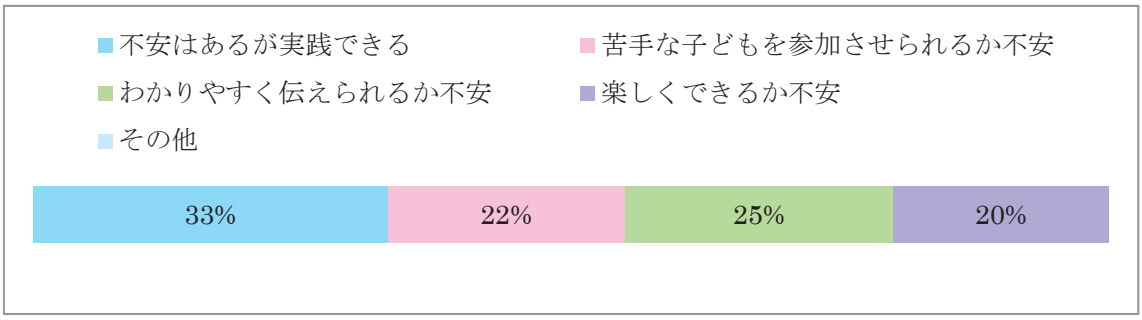


図 21－3：実践していく上で不安なこと

アンケート調査から、講習会に参加した全員の学生が現場の保育にたいへん役立つ講習会であったと感じていることがわかった（図 21－1 参照）。また、指導の先生や大学担当者も、「3 回の講習会と合同カンファレンスによって、学んだわらべうたを子どもたちのために活用できる自信がついている」と評価している。これから現場で実践していく上でまだまだ不安は残るが積極的に取組んでいきたいという学生が増えてきている（図 21－3 参照）。

（6）事前事後指導の実施

ア　事前事後指導の実施状況

基礎実習・インターンシップが円滑に推進できるように、大学の事前事後指導は、いつ、どのようなことを取り上げて指導していくとよいのか、学生の取組の状況を見ながら「大学と学校園の取組」にあるように、適切な時期に、適切な指導ができるよう心がけてきた。

平成 23 年 4 月、基礎実習・インターンシップ科目の開講について、2 年生・3 年生，4 年生に分けて具体的に説明した。また、5 月、マナバフォリオの利用の仕方について実技講習会を 4 回実施して使用できるようにした。

平成 23 年 7 月、基礎実習・インターンシップが始まって 3 ヶ月、ポートフォリオにはどのように記録を残すとよいのか、学生が悩んでいると聞いて、事前事後指導を実施した。ポートフォリオは各自自由に記録してよいことにしていたのでいろいろな書き方をしていた。体験したことを羅列したポートフォリオや自分の取組を見直しながら次への取組について書いているポートフォリオなど代表例をいくつか紹介した。また、基礎実習・インターンシップではどのようなことが理解できるようになったか、また、どんなことが体験できたのかなど振返る場面も設けた。

平成 23 年 7 月、保育園・幼稚園希望者の合同カンファレンスを大学において実施した。

7 月 20 日（水）「基礎実習・インターンシップをしている学生、誰もが遭遇する事例」について、3 名の学生が問題提起した。そのことについて参加者 15 名全員で検討した。牛乳を飲む時間での友だち同士のトラブル、幼児がしたかったことと担任の思いのずれ、生き物に熱中する幼児などどうかかわっていくとよいのかについて、学生、大学担当者、GP 支援員から、自分ならどうかかわっただろうか、時間をかけて話し合った。

学生からは、「いろいろな立場からの考えを聞いて勉強になった」「今度このような事例に出会ったら今日の話を生かしていきたい」などの感想が出ていた。また、大学担当者、GP 支援員からは、「少人数だったが、内容の濃い検討会になった。」「ボランティアを体験するだけ、ポートフォリオを書くだけではなかなかほんものにはならない。今日のような合同カンファレンスの機会があると、保育職についたときっと役立つと思う」などの助言を受けた。

平成 23 年 9 月、ポートフォリオの振返りについて事前事後指導を実施した。ポートフォリオはほんとうに役立っているのか、どんな利用をしていくと役立つのかについて、実際のポートフォリオをもとに研修した。自分のした体験について自分なりに振返って考えること、先生の助言や指導で学んだこと、体験して自分の足らないところや課題をもつことなどの大切さをつかむことができた。その後、学校園ごとのコミュニティづくりをした。コミュニティごとにリーダーを決めた。リーダー会議を行い、コミュニティ内の互いの連携を深めていくことを目指している。

平成 23 年 11 月、教育実習を終えた 3 年生対象に、「教育実習をこれからの自分に生かす」というテーマで、教育実習からインターンシップへの取組について研修した。

平成 23 年 12 月、現役の卒業生を迎えて、合同カンファレンスを行った。現役の先輩のアドバイスは学生にとってたいへん役に立った。保幼と小に分かれて合同カンファレンスを大学において実施した。初めて学生が企画し、運営した合同カンファレンスである。卒業後 5 年以内の現職の教員をしている卒業生をアドバイザーとして招いた。これまで取組んできた基礎実習・インターンシップについて、それぞれ 3 名の学生が体験を報告し、問題提起した。この問題について、参加者はグループに分かれて検討した。卒業生から現場での体験をもとにした意見、大学担当者の意見、GP 支援員の意見など、いろいろな意見が紹介された。「それぞれの出会う問題には、答えが一つではないことがわかった。」「同じ子どもでもそのときの状況によって対応が異なることがわかった」など現場でのかかわりかたについて具体的に学ぶことができた。

また、平成 23 年 12 月、これから基礎実習に参加する 1 年生を対象に事前指導を実施した。3 年生の先輩の基礎実習での体験談を聞く機会を設け、24 年度から意欲をもって取組める場を持つことができた（図 22－1～3 参照）。

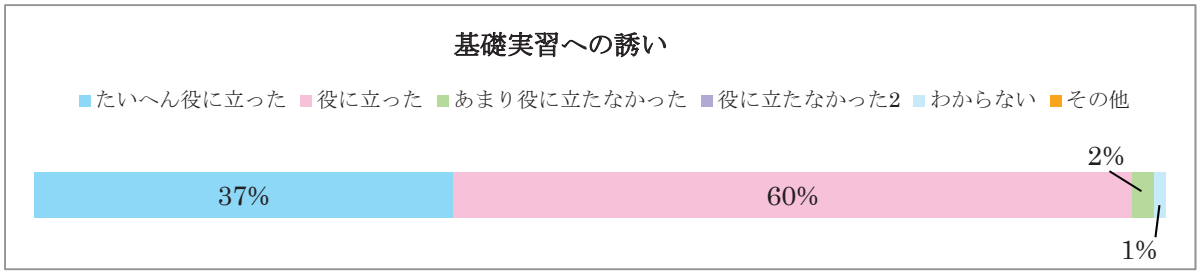


図 22－1：先輩の体験談について（1 年生）

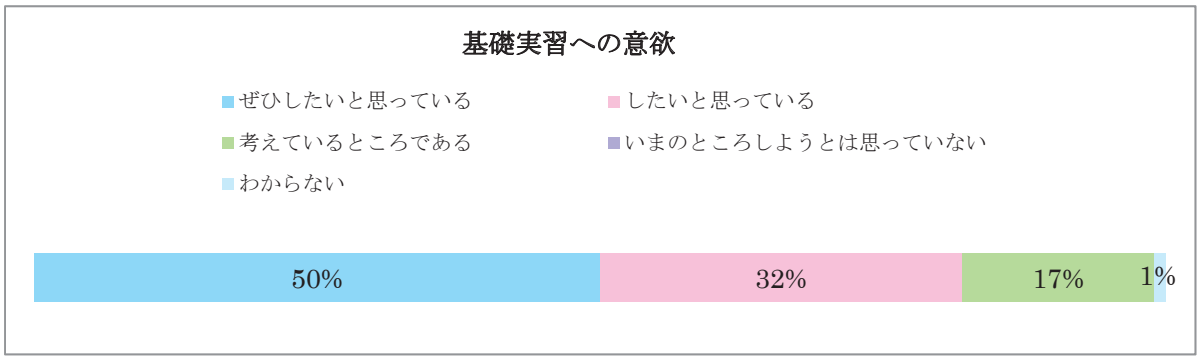


図 22－2：基礎実習の履修について（1 年生）

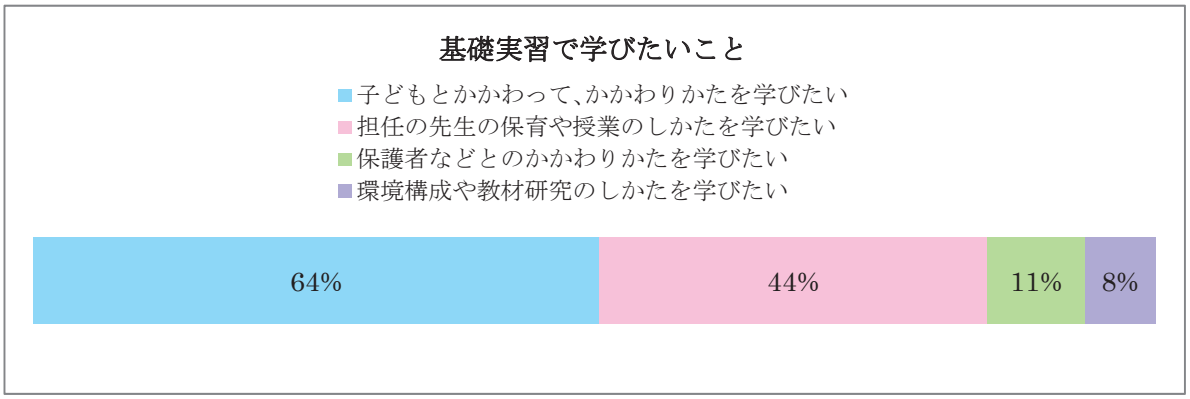


図 22－3：基礎実習で学びたいこと（1 年生）

平成 24 年 1 月、3 年生対象に 4 年生の先輩が自分たちの体験をシンポジウム形式で紹介、インターンシップへの誘いを行った。4 年生は事前に集まり、打合せをして 3 年生のためのシンポジウムを行った。

＜3 年生対象インターンシップ・シンポジウム＞

平成 24 年 1 月 16 日（月）7.8 限実施　630ＮＤ

コーディネーター　：4 年生Ａ　シ ン ポ ジ ス ト：4 年生Ｂ　Ｃ　Ｄ

T1　今日は、私たち 4 年生が「インターンシップで体験したこと」、「3 年生の皆さんにも、4 年生になったら是非取り組んでほしいこと」などについて、シンポジウムという形でお話で出来たらと思っています。4 年生の発表の後に、質問やご意見、感想などをお聞きしたいと思っているので、よろしくお願いします。司会進行は、私Ａがさせて頂きます。ご協力、よろしくお願いします。

T2　それでは、シンポジストの 3 人を紹介します。　Ａ　Ｂ　Ｃ　Ｄ

＊各自、氏名、ボランティア園名、学年を言う　T1.T2　5 分

T3　まず、初めに、①ボランティア体験で印象に残っていることについて、具体例をもとに紹介してください。

＊一人 3 分程度。（ボランティア園名、何歳児、印象に残っている事例の紹介）　15 分

T4　②子どもへのかかわり体験で、チャレンジした体験と、そこで成功したことや失敗したことについてお願いします。＊一人、3 分程度。質疑応答　4 分程度。　10 分

T5　③インターンシップの活動を通して、園の先生から学んだことについてお願いします。　＊一人、3 分程度。質疑応答　4 分程度。　10 分

T'6　続いて、先生との関わり体験についてお聞きします。

④先生に質問や、報告・連絡・相談をしたことがありますか。また、それはどんな時、どんな事でしたか。　＊一人、3 分程度。質疑応答　5 分程度。　15 分

T7　最後に、⑤3 年生の皆さんに、4 年生でのボランティアについてアドバイスを、お願いします。

（学生の時にしか出来ない、ポートフォリオやカンファレンスについて触れる。）

＊一人、2 分程度。　10 分

T8　最後になりますが、3 年生の皆さんから、聞きたいことがありましたら、お願いします。　5 分程度

以上で、シンポジウムを終わります。私たちは、インターンシップで学んだ事を生かして、これから頑張っていこうと思います。皆さんも、インターンシップを通して、子どもへの理解を深めたり、先生方から保育のスキルを沢山学んだりして、これからの自分に生かして下さい。ありがとうございました。

4年生のシンポジウムは多くの3年生からインターンシップを考える上で役だったと答えている。これから保育職・教職に就いたとき、インターンシップは必要だと強く感じた学生が多かった（図 23 参照）。

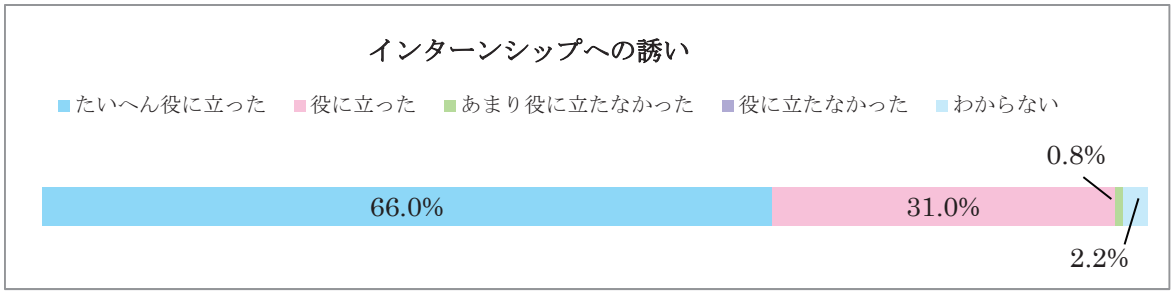


図 23：4 年生の先輩のシンポジウムについて（3 年生）

4 年生のシンポジウムについての 3 年生の感想を紹介する。

3 年生の感想

・基礎実習で学ぶことが多かったので引続きしたい。
・子どもと関わる中で見えてきた課題、学びがあり、ボランティアをする以前の自分とは違って大きく成長したと思う。
・現場の声を聞くことができ勉強になった。
・実際に子どもとかかわり、本当の子どもの姿に接することができたのが一番の学びだった。
・大学で学んだ内容だけではない、子どもたちの思いをたくさん感じることができた。
・教育実習では出会わなかった様々なできごとや状況にどうしたらよいのかと悩みながら続けている。それらをみんなで話し合うことによって意欲をもって取組ことができた。
・ポートフォリオにしたことを書き、振返ことで自分の取組を見直すことができた。
・合同カンファレンスによって、悩んでいたことの答えを見つけることができた。
・自分の指導のヒントや引出しが増えてきた。
・ボランティアをしたあと、とても充実した気持ちになる。
・先生との連絡や相談の大切さがよくわかった。
・やってみなければわからないことを味合うことができ、本気で取組むことができた。
・子どもの成長や笑顔を見ることができた。

・先生の指導を様々な視点から見ることができた。

平成 24 年 2 月、2 年生対象に 3 年生の先輩が基礎実習での体験談や課題などについてシンポジウム形式でそれぞれの考えを発表した。先輩の話を聞いて、2 年生のほとんどの学生が基礎実習を履修して自分自身の力をつけていきたいと意欲を高めていた。

イ　事前事後指導の実施効果

平成 24 年 1 月、大学の事前事後指導について、学生にアンケート調査を実施した。「勉強になった」との評価であった（図 24 参照）。

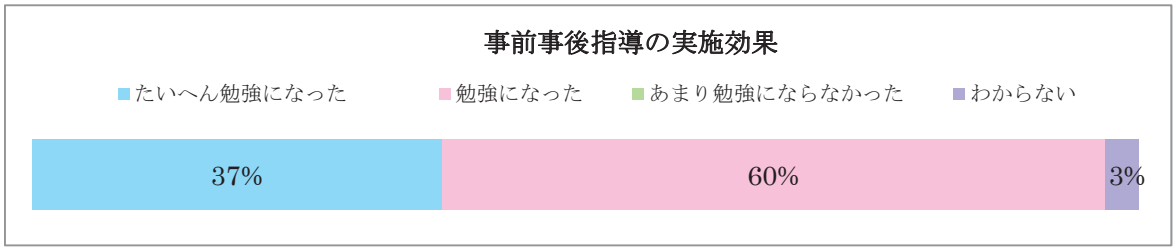


図 24：大学における基礎実習事前事後指導について（学生評価）

事前事後指導の内容について 1 ないし 2 選択で聞いたところ、合同カンファレンス、ポートフォリオについての研修、卒業生参加の合同カンファレンス、GP 支援員のアドバイス、学校園のボランティア計画表作成、マナバフォリオの使い方等が役立ったと答えている。また、事前事後指導での要望として、授業づくり講座等の希望がでていた。事前事後指導についての学生の感想をいくつか紹介する。

事前事後指導の感想

・ポートフォリオを書いて自分自身の振返や、先生からのアドバイスをいただけたことが勉強になった。
・ポートフォリオで保育観をもつことができた。
・先生になりたい気持ちを持つことができた。
・指導方法や対処方法を見て学ぶことができた。
・学校にいきたいという気持ちが出てきた。
・現場に出てやれるという自信がついた。
・合同カンファレンスがたいへん勉強になった。
・子どもにどのような支援が必要か考えるようになった。
・大学では学べないことがよくわかった。
・先生の対応や子どもの反応を見ることができた。
・現場から多くのことを学んだ。
・ポートフォリオはたいへんだったが本当に役に立った。

４　保護者支援にかかわるイベント等への参加

基礎実習・インターンシップをしている中で、学生が体験できなかったのは、保護者等とのかかわりである。そこで、保護者が実際に活動している行事等に参加することにした。

（１）小学校における保護者とのかかわり「バザーでの取組」

平成 23 年 10 月 23 日 H 小学校において保護者会主催のバザーが行われた。このバザーで学生がボランティアとして参加することにした。3 年生を中心に 12 名がバザーの手伝いに参加した。まず、バザーの日より 1 月前にバザーの仕事について保護者会役員から話があった。その後、放送係、販売係、連絡係などいろいろな係を分担した。当日は、8：30 から分担した係に分かれてお手伝いをした。前日の準備は 13：00～17：00 までかかった。子どもコーナー、同窓会の部屋、保護者会のコーナーの展示や飾付に時間がかかった。とくに、うどん、カレー、弁当、焼きそば、飲み物、サンドウィッチ、クッキー、保護者が作ったグッズ、子どもコーナー、生活用品のバザーなど各部屋での準備がたいへんであった。当日、保護者会役員から指示・連絡があると、それに従って動くように心がけた。どの係も大きな問題もなく、いただいた食券で交代して昼食をとった。14：30 バザーは無事終わった。

保護者会役員との打合せ

バザーでのボランティア

バザーでの体験したことをポートフォリオにまとめた。保護者会からはぜひ今後もバザーは手伝ってもらいたいとの言葉をいただいた（図 25 参照）。

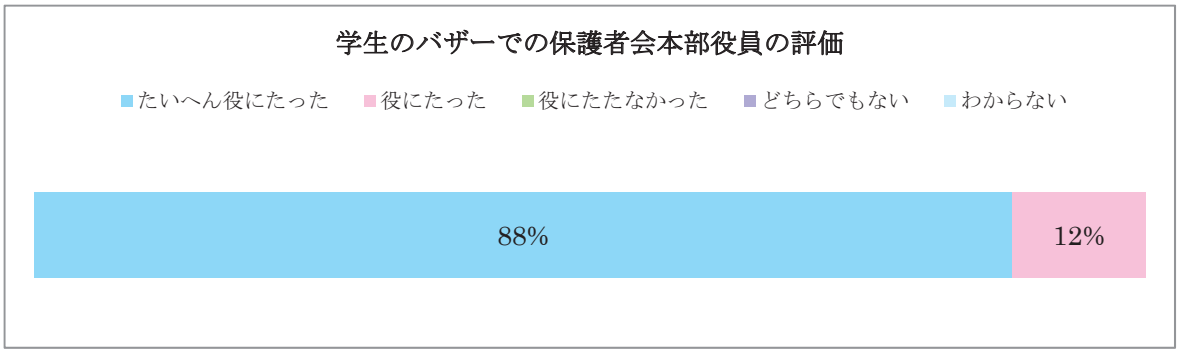


図 25：学生のバザーでの保護者会本部役員の評価

保護者会の関係のある活動として、運動会、バザー、学年親睦会、放課後預かりなどをあげて、学生にぜひ手伝ってもらいたいとのお話をいただいている。

（２）小学校における保護者とのかかわり「交通安全指導での取組」

H 小学校の保護者会では、下校時の安全やマナーの向上を目指して交通安全指導に取組んでいる。6 月、11 月、2 月全保護者全員が分担して行っている。平成 23 年 11 月 19 日（土）、保護者会役員から、交通安全指導の取組について事前の説明を聞いた。子どもたちは岡山県内各地から来ているので、保護者会として、53 号線バス停前、トヨタレンタカー前バス停、鮨竹の信号付近、風呂屋前の 4 カ所に分かれて交通安全指導を行っている。実施期間は 11 月 19 日から 12 月 17 日の毎日である。また、学校では、登校時・下校時に、教員が分担して毎日交通安全指導を行っている。今回は、保護者と同じ H 小学校の交通安全の腕章をつけて、保護者と一緒に子どもたちの様子を見守ることにした。「登下校のマナーは守っているか」、「安全に下校しているか」、登下校時分担して行うことにした。下記のような実施計画表を作成して臨んだ。

＜交通安全指導に参加する学生の実施計画表＞

（１）14：35～15：15　2 年生保護者　　各場所に保護者 1 名配置

（２）15：35～16：30　5 年生保護者

（３）水曜日は 14；35～15：15

（４）土曜日は 11：30～12：00

A（鮨竹前）B（風呂屋前）C（53 号カメラや前バス停）D（トヨタバス停）の 4 カ所

（　）内の名前：黒印字は 3 年生、赤印字は 2 年生を表示

〇登校指導：十字路（先生とともに）

参加者が多いときは、先生から立つ場所の変更があります。

〇人数が多い場所はＡＢＣＤの場所を変更してもよい。

11 月 22 日（火）　登校指導：学生①②

（１）A（　）　B(学生③)　C(学生⑤　)　D(　)

（２）A（　）　B(学生③)　C(　)　D(　)

11 月 24 日（木）　登校指導：学生④⑤⑥⑦

（1）A（学生④）　B(学生⑤⑥⑦)　C(学生①②③)
D(学生⑧⑨⑩)
（2）A（　）　B(　)　C(学生⑦)　D(学生⑤⑥)

11 月 25 日（金）　登校指導：学生⑪⑫⑬
（1）A（学生⑤）　B(学生⑫⑬)　C(　)　D(学生⑩)
午後カット（2）A（学生③）　B(学生⑨)　C(学生⑪)　D（学生①②)
11：30～12：00

11 月 28 日（月）　（1）A（学生①）　B(学生⑤)　C(学生②)　D(学生⑥)
（2）A（学生⑨）　B(学生③⑧)　C(学生⑦)　D(学生⑩)

11 月 29 日（火）　登校指導：③
（1）A（学生④）　B(学生⑤)　C(学生③)　D(学生⑩)
（2）A（学生⑪）　B(学生⑫)　C(学生⑬)　D(学生③)

11 月 30 日（水）　登校指導：学生①④
全校 14：45～15：15　＊（学生⑩）　B(学生⑦)　C(学生⑤)　D(学生①)

12 月　1 日（木）登校指導：
（1）A（学生③）　B(学生⑩)　C(学生⑦)　D(学生②)
（2）A（学生⑫）　B(学生⑤)　C(　)　D(学生⑧)

12 月　2 日（金）登校指導：学生⑥⑦
（1）A（学生⑩）　B(学生⑤)　C(学生⑨)　D(学生③)
（2）A（学生⑫）　B(　)　C(学生⑦)　D(　)

12 月　5 日（月）　登校指導：学生③⑤
（1）A（　）　B(学生⑦)　C(　)　D(学生⑩)

実施期間中、子どもたちの様子や交通安全指導をして気付いたこと等をポートフォリオに残した。また、実施後、参加した学生が集まって、H 小学校の交通安全指導について子どもたちの登下校の様子、気付いたことなどについてまとめた。

＜学生の交通安全指導のまとめ＞

○登下校指導参加者
ア、登校指導 10 名　イ、下校指導 13 名　ウ、登校、下校どちらも指導 10 名
○登下校指導、保護者と一緒にした 13 名、先生と一緒にした 10 名
・鮨竹前延べ 11 名、風呂屋前延べ 18 名　53 号カメラや前バス停 14 名、トヨタバス停前 14 名
○保護者とは子どもの話をした。「お母さんは毎日が忙しいことがわかった」「子どもへの声かけから多くの子どもと面識があるのに驚いた」「子どもへの愛情が伝わった」
○登下校の様子：みんな、きちんと安全やマナーを守り、登下校できていた
○登校時の様子：あいさつするときちんと「おはようございます」と返事がかえってきた
○下校時の様子：2 列できちんと帰っていた。ほとんどの子どもが守っていた。あいさつも

きちんとできていた。何人かで帰っていたので安心した。

・一部安全やマナーが守れない子どもがいた。2，3人で横に並んで帰っていた。
・安全やマナーで問題だと思う子どもがいたので注意した。
・危険箇所、場所、時間帯、子どもの様子
・下校時：トヨタバス停―木や建物で見えにくい。きちんと止まって確認することがほとんどできていたが注意すべき箇所だと思った。
・道に広がって走ってばらばらの時が少しあった。
・走って狭い歩道を通っていた
・後ろ向きで友だちの方に向いて話しながら歩いていた
・マナーには問題がなかった

〇教師や保護者が交通安全指導をすることについて

・下校時：子どもたちの交通への注意が高まるし、あいさつ運動になってよいことだと思った。
・地域の人たちの協力が必要だと思った。指導をしなくても目配せだけでも十分だった
・見られていることにより、マナーを意識する
・車を運転する立場と子どもたちの立場の両方から交通安全について指導できるので良い
・担当場所は車がよく通っていたので大人が立っていることで安全面が確保されていいなと思った

平成23年12月21日（木）9：00～10：30　学生代表が集まって打合せ会を３０８Ｌで行った。学生たちは次のような計画を立てて、校長、教頭参加のもと、平成24年1月6日、学生が司会進行して学外実施委員会を実施した。

＜H小学校学外実施委員会進行案＞

全体の司会進行（学生Ａ）

Ｔ1　それではこれからＨ小学校でボランティアとして、取組んできたことを発表していただき、それをもとに検討していきたいと思います。

初めに、全体の会で5人の人にボランティアの体験発表をしてもらいます。

次にＡ、Ｂのグループに分かれて話し合いを行いたいと思います。

＊ありがとうございました。

Ｔ2　それでは、Ｂさんから、「交通安全指導体験」について発表してもらいます。

＊ありがとうございました。

Ｔ3　次に、Ｃさんから、「交通安全指導体験」について報告してもらいます。

＊ありがとうございました。

Ｔ4　では次に、ＤさんからＨ小学校での学級でのボランティア体験について報告してもらいます。

＊ありがとうございました。

T５　続いて、ＥさんからＨ小学校での学級でのボランティア体験について報告してもらいます。

T６　続いて、ＦさんからＨ小学校での学級でのボランティア体験について報告してもらいます。

＊ありがとうございました。

T７　何か質問などはありませんか。ないようでしたら、それではＡとＢに分かれて話し合いたいと思います。

＜グループの司会進行＞

・司会（学生Ａ）　・記録（学生Ｂ）　・司会（学生Ｃ）　・記録（学生Ｄ）記録２人

T８　それでは、5 人の人が発表してくれましたが、そのことについて話し合っていきたいと思います。

T９　交通安全指導には、登校の時と下校の時がありますが、先生方はどうしておられるのですか。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく

T10　保護者はどうされていますか。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく

T11　まず、初めに 2 人の登下校のときの交通安全指導について話し合いたいと思います。（ここからみんなに順番に発言してもらう。）

T12　登下校での交通安全指導はどうして必要なのでしょうか。

T13　登校のときの交通安全指導は、どんなことに気をつけたらよいのでしょうか。

T14　下校のときの交通安全指導は、どんなことに気をつけたらよいのでしょうか。

T15　下校の時のほうが安全やマナーに問題が起きやすいと聞きますが、どうしてでしょうか。

T16　このような交通安全指導をして効果はあるのでしょうか。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく

T17　登下校時の交通安全は、Ｈ小学校だけの問題というのはあるのでしょうか。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく

T18　学校の責任範囲はどこまでなのでしょうか。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく

T19　それでは、続いて、学級でのボランティア体験について話し合いたいと思います。3 人からの体験報告がありました。一つめは、心にしみる指導についての話しでした。このような話ができるためには、どんなことを学んでおくとよいのでしょうか。皆さんのご意見を伺います。

T20　では、先生方から一言お願いします。

T21　次に、待つことと促すことについての体験報告がありました。子どもたちへかかわ

るときの、「待つこと」にはいろいろあるのだなと思いましたが、
聞いて皆さんはどう思いましたか。

T22　休憩時間の子どもとのかかわり方の方針とか、秘訣とかあれば聞きたいと思いますが、みなさんはどう思われますか。

T23　では、先生方から一言お願いします。

T24　最後に、子どもから学ぶという体験報告がありました。どのクラスにも問題行動をする子どもはいると思いますが、そういった子どもに皆さんはどうかかわってきましたか。

T25　では、先生方から一言お願いします。

＊校長先生か教頭先生に答えていただく。時間があれば、大学の先生にも聞く。

T26　それでは、今日の合同カンファレンスをそろそろ閉じさせていただきます。

T27 最後に、校長先生からお話ししていただきます。

平成 24 年 1 月 6 日の学外実施委員会は進行案通りに実施することができた。

学生の感想から、「登校時よりも下校時のほうが子どもたちの気が緩んでいる感じがした」「ほとんどの子どもはきちんと下校していた」「保護者が下校指導をするのはたいへんよいことだと思った」「学校がどうして登下校の指導をしているのかよくわかった」「立っているだけでも効果があると思った」「あいさつをしたり、声かけしたりでき、登下校の指導だけではないなと思った」など交通安全指導から多くのことを学んでいたことがわかった。保護者や学校から、「今後の交通安全指導にいかしていきたい」「ぜひこれからも協力してほしい」とのコメントをいただいた。

（３）保育園における保護者とのかかわり「親子会での取組」

Ｓ保育園では保護者が集まって子育てについて話し合ったり、子ども同士一緒に遊んだりするなど互いの交流を深める親子会を行っている。この親子会に学生が参加した。参加した日は子どもを保育園に預けて親同士の触れ合いの会であったので保護者の悩み等を聞くことができた。「排便がうまくいかないで困っている」「食事を落ち着いてできない」「好き嫌いが激しくて困っている」など日頃の子どもの様子を互いに出し合って話し合っていた。「勤めが遅くなった日は食事の準備がなかなかできない」「早く寝なさいというばかりで子どもとのコミュニケーションの時間がとれない」など親としての悩みも出てきた。

学生のアンケート調査では、「保護者や子どもたちと触れあう体験ができてよかった」「子どもの扱いはたいへん難しかった」「保護者の話はしっかり聞けた」という感想がでていた。また、保護者から「学生さんは一生懸命聞いてくれた」「将来の母親にためになる話になったかな」など、学生が参加したことによって自分たちの話し合いが深まったと喜んでくださった。

（4）幼稚園における保護者とのかかわり「託児」

平成23年6月24日E幼稚園で託児を8名で受けることにした。保護者はPTAの全クラス合同親睦会をするので、その間園児の弟妹を預かるのだ。保護者に、預かる子どもの人数、年齢、預かる時間、場所などについて聞いたことをもとに、9：00～12：00までの3時間どう対応するか計画を立てた。どんな遊びが可能か、配慮することは何かを幼稚園の先生から聞いて、ブロック、新聞紙、ビニール袋等を準備した。託児場所は広い武道館の中でするので、事前に下見して環境を確認した。「けがのないことが一番」「困ったときは保護者に相談」などの助言をいただいて、それぞれ分担を決めて、シュミレーションした。

当日、託児として15人の幼児を預かった。ブロック、新聞紙を使った遊び、ビニール袋を使った遊び、読み聞かせなど、安全には特に気をつけて行った。とくに、新聞紙を丸めたり、ちぎったりした遊びには熱中した。どの幼児を担当するのかも決めてかかわったので、何とか安全に過ごすことができた。託児での取組についてポートフォリオにそれぞれがまとめておいた。保護者からは、

・学生に子どもを任せるのは初めての試みで不安もあったが、学生たち全員が優しくかかわってくれたので、子どもたちも喜んで遊んでいました。
・子どもが楽しかったといっていました。ありがとうございました。
・安心して親睦会を楽しむことができました。またの機会にもぜひともお願いしたい。

など感謝の言葉をいただいた。園の先生からも、「準備から片付けまで、よくがんばりました。また、可能ならお願いしたい。」と温かいお言葉をいただいた。

平成23年10月21日、2回目の託児を受けた。PTAバザーのため、役員の未就園児を預かることになった。場所はE幼稚園ひよこ組保育室である。その他に出入りする幼児はいたが預かる幼児は常時2名、8：30～11：00の託児である。2名の幼児を中心に、お絵描き、読聞かせ、紙を使った遊びなど、園にあるものを使って遊んだ。2人とも泣くこともなく、2時間30分楽しく過ごすことができたのでほっとした。

親子でわらべうたの実践

10 月の託児も、「前回学生さんの託児、よかったよと聞いていたので安心してお預けしました。これからもぜひお願いしたい。」と役員さんからお言葉をいただいた。

平成 23 年 11 月 14 日、3 回目の託児を受けた。6 月・10 月の託児が保護者に好評であったということで、武道館での託児の依頼がきた。学生 4 人が参加、6 月の託児での経験を生かして行うことにした。これまでの体験を生かして、ボール遊び（サッカー、ボール投げ）、ブロック遊び、人形遊び、新聞紙やナイロン袋を使った遊びを準備した。それぞれ年齢に異なる幼児を相手に苦戦しながらも無事に託児を終えることができた。

＜学生の感想＞

・初めはどうやって遊べばよいのだろうと戸惑いました。遊んでいるうちに興味がある物等が少しずつわかってきて楽しく遊ぶことができました。お母さんから離れられない子どもやお母さんを探しに行く子どもがいて、お母さんの存在は大きいなと思いました。
・なかなかできない体験ができ、勉強になりました。用意したボール当てやビニール袋の風船で遊びました。途中、お母さんのところへ行く子どももいましたがまた帰ってきて遊びました。お母さんの顔を見て安心することも必要かなと思いました。
・１歳児にかかわる体験をしました。無理矢理絵本の読み聞かせをしようとしましたが、その子どもが安心していられる空間を作ることの大切さを学びました。
・抱っこして歌っているときは泣きませんでした。年齢が大きい子どもと一緒に赤ちゃんをあやすこともしました。様々な年齢のいる託児の良さを体験しました。
・新聞紙で遊びました。丸めて、おにぎりや箸に見立てて遊ぶ子どもたちの姿を見ることができました。準備したもので遊んでくれたうれしかったです。きっかけ作りが難しいですが大切だなと思いました。今度はもう少し遊びが発展するような材料を探したいと思います。

3 回の託児で、本学の学生に、「安心して託児をお願いできる。」と保護者からお褒めの言葉をいただいた。学生たちも託児の機会を設けてくださった E 幼稚園に感謝しているところである。

（5）幼稚園における保護者とのかかわり「親子でわらべうた」

平成 23 年 11 月 1 日Ｅ幼稚園のご協力を得て、学生 11 名による「わらべうた」を親子と一緒に行うことになった。「つっつきましょぽこぺん」「ぺっちゃんばな」「いっぽんばしコチョコチョ」「ふねのせんどうさん」「さよならあんころもち」「さるのこしかけ」などのわらべうたを用意した。そのときの様子を学生の感想で紹介する。

＜「親子でわらべうた」体験の感想＞

・一人一人の子どもへの言葉かけの難しさを実感した。今度は始まりと終わりに子どもたちと触れ合って、また一緒にしたいなという雰囲気づくりをしたい。
・保護者の思いは私が思っていた以上に強く、保護者の気持ちを知ることの大切さも学ぶことができた。
・初めて親子と一緒にわらべうたを体験した。きっと楽しんでくれるだろうと思っていたが実際には親子で触れあうことの難しさを感じた。
・子どもの反応がよく見えてよかった。わらべうたにうまくのってこない子どももいたので、時間をかけて繰り返しすることが大切だと思った。
・親子によって反応が異なるのでいろいろと試みていくことが必要だと思った。
・わらべうたを伝えないといけないという意識が強くなって焦りと緊張感が子どもたちに伝わってしまった。
・子どもたちへの言葉かけが十分にできなかったのが残念だ。
・何気ない言葉が保護者や子どもの心に刺さってしまうことがあることに気がついた。
・しっかりと練習して臨むことの大切さを学んだ。
・保護者が協力してくださったので楽しくできたのではないかと思った。
・保護者の笑顔や親子の愛情を見ることができてよかった。

学生の親子でわらべうたについて、保護者からの評価は図 26－1 の通りである。

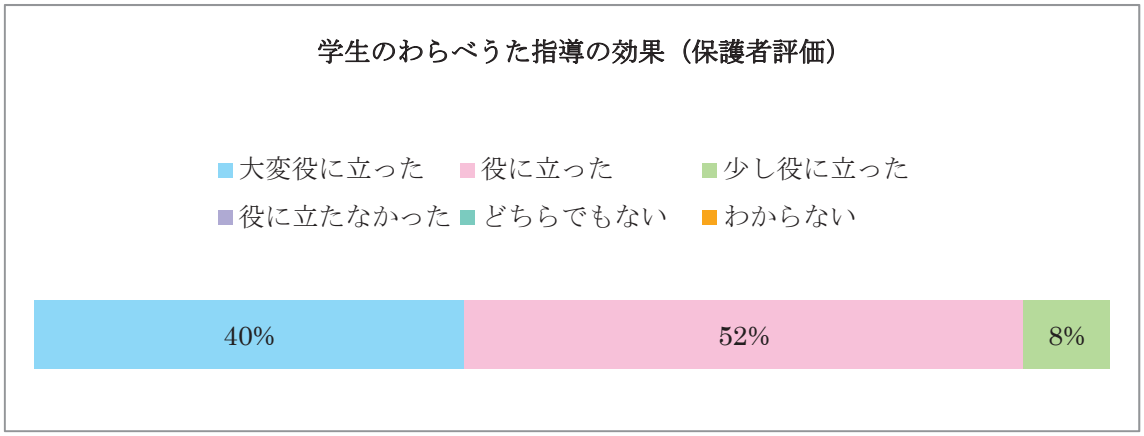


図 26－1：学生のわらべうた指導は役に立ちましたか

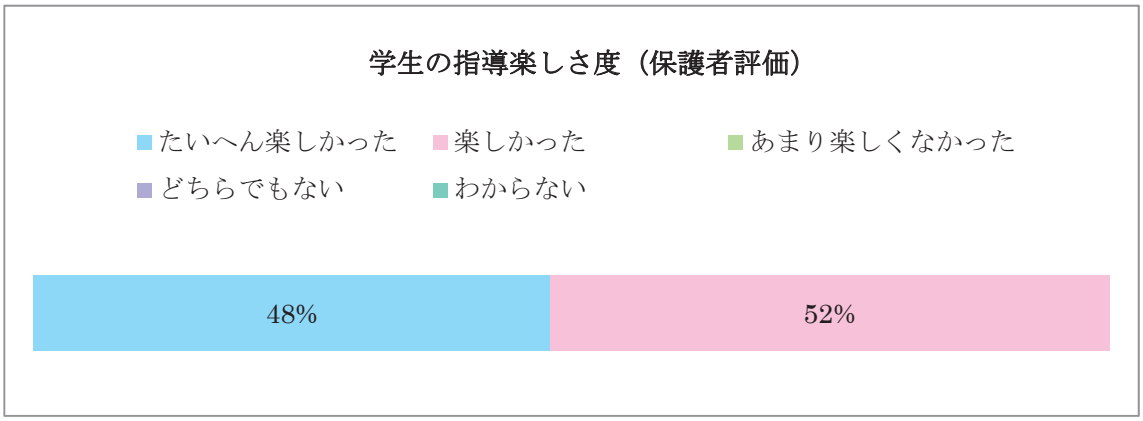


図 26－2：わらべうた指導は楽しかったですか

保護者の協力もあって、何とか子どもたちは楽しく過ごすことができた。学生はたいへんだったが子どもたちの様子を見て楽しかったと答えている。保護者からもよい評価をいただいた（図 26－2）。多くの課題も体験することができた。保護者からのアドバイスと願いを紹介する。

＜保護者から学生へのアドバイス＞

・どんなときも子どもたちの味方になっていてほしいです。
・保護者からいろいろ要望があると思いますが信念をもって教えてください。
・いろいろな子どもたちがいます。みんなの顔を見てしてください。
・偏見なく、それぞれのよいところを見つけてほしい。
・いつも元気に明るく接してください。子どもたちはよく大人のことを見ています。
・一人一人よく理解していただけたらと思います。
・いつも笑顔で接してください。
・自分の子どもだったらという気持ちで接してほしいと思います。

＜幼稚園の先生を目指す学生への保護者の願い＞

・今日教えていただいた「わらべうた」を家でもやってみようと思います。もう少し大きい声でお話するとよかったですね。
・先生に気分のむらがあり、態度にも出るようです。プロとして一人の人間として気を付けてほしいと思います。
・真面目に取組んでいるのでよいと思います。こういった機会を通して子どもについてしっかり学んでください。

多くの保護者から感謝の言葉をいただいた。また、将来、先生となる学生への励ましの言葉や、もっと力をつけてほしいという願いもあり、学生たちは「たいへん勉強になった」と述べている。

平成 24 年 1 月 6 日、E 幼稚園学外実施委員会で、これまでの取組についての合同カンファレンスを持った。E 幼稚園の先生方から、園で心がけていることや園の様子についてお話しいただくとともに、託児などについて学生に温かいアドバイスをいただくことができ

た。学外実施委員会での合同カンファレンスの後、学生、保護者・先生に基礎実習・インターンシップについてアンケート調査を行った。アンケートには、「友だちや先輩の取組が勉強になった」「子どもへのかかわり方が勉強になった」「担任の先生等のかかわり方が勉強になった」「保護者のかかわり方が勉強になった」などと記述していた。

＜Ｅ幼稚園での合同カンファレンスの感想＞

・先生方がとても親切で温かく、リラックスして雰囲気の中で教えていただくことができた。
・昼食では食事の方法が一人一人の子どもに対応しているなど、子どもたちとの信頼関係を大切にして関わっていることがわかった。
・3時間どうするのだろうと思っていたら、園の先生のお話や願いが聞け、あっという間に時間が過ぎた。
・一つ一つ丁寧に答えてくださり、本当にわかりやすかった。

Ｅ幼稚園での合同カンファレンスはほとんどの学生が、「たいへん勉強になった」と答えている。また、先生からは、「清心の学生はいつも優しくかかわる姿が見られました。子どもたちが楽しみに待っていました。一生懸命に取組んでいました。これからもぜひきてください。」など温かい言葉をいただいた。

５　先進事例及び他地区ＧＰフォーラム等への参加

（１）先進事例等視察の概要

本取組にマナバフォリオを導入した。導入に際し、学生も関係教職員もマナバフォリオについて実技研修を行った。マナバフォリオにはマイコースとマイコミュニティがあり、実際にどのように活用していくと効果的なのか、事例研究セミナーに参加して研修することにした。

ア　ポートフォリオ・ＬＭＳの先端事例研究セミナーイン東京

平成 23 年 6 月 3 日東京において行われたセミナーに 1 名参加した。100 名定員であったが、情報系のセンターやマナバフォリオの管理者、ＧＰ関係者など 150 名の参加者であった。

はじめに、「マナバの運用実績と学習効果」について研修してきた。「ウェブで学ぶを超えて、よりよい学びの実践を」について、飯吉　透北陸先端科学技術大学院客員教授からお話があった。続いて、「なぜ東洋大学では企業支援システムの利用率が 3 倍に伸びたのか」について、藤原　喜仁東洋大学情報システム課主任から報告があった。さらに、立命館大学理工学部　高山　茂教授から「ポートフォリオ学修カルテの 1 年間の運用実績」について報告があった。これらのお話から、本学では学生や教職員にマナバフォリオについて利用しやすい環境を整えていくことが必要であること、東洋大学のように学生を主役にした取組を進めていくことが大切であることを学んだ。また、ポートフォリオを扱うソフト面での構築も求められていることがわかった。マナバフォリオを利用してレポート提出やアンケート調査等具体的な実践も参考になった。

その後、情報交換会があり、履修登録について実践女子大学、白百合女子大学、東洋大学などの取組の様子を聞くことができた。いずれにしても体制を整えて取組んでいかなければと強く感じた研修会であった。

イ　ポートフォリオ・ＬＭＳの先端事例研究セミナーイン京都

平成 23 年 10 月 7 日、京都開催の 2 回目のセミナーに 1 名参加した。200 名の参加者であった。基調講演は、鈴木　克明熊本大学教授システム学専攻長の「学習力アップのｅラーニングデザイン」で、学習力アップを目指したｅラーニングデザインのお話があった。ｅラーニング質保証レイヤーモデル、ＡＲＣＳモデルをもとに学生の学習力アップにどうつないでいくかについてのお話であった。続いて、「日本と北米の大学におけるＩＣＴ利用の現状と将来的課題」について、パネルディスカッションが行われた。飯吉　透北陸先端科学技術大学院客員教授、田口　真奈京都大学高等教育研究開発推進センター准教授、重田勝介東京大学教育総合研究センター助教の 3 人によるパネルである。ＩＣＴ利用につい

て世界が進みつつある中で、ＩＴＣやＦＤによる実質的な教育支援体制や学生の学習環境のレベルが遅れている日本の現状から、日本の大学はいま何をすべきかについて提言があった。セッションでは、中谷　史雄大阪教育大学科学教育センター准教授から「ポートフォリオを活用した大学教員による高校生への先進的理科教育」、神藤　貴昭立命館大学教職支援センター長から、「特色あるポートフォリオの活用」、都竹　茂樹熊本大学政策創造研究センター教授から、「マナバを活用した医学教育」についてお話があった。

本学では、平成 23 年 9 月末、マナバフォリオでの全学履修登録を終えたばかりであったが、マナバフォリオの先進的な活用をしている各大学の取組を聞いて、一層本学の取組体制を整えて積極的に取組んでいく必要性を強く感じた。

ウ　就業力育成支援事業　中国・四国地域会議

平成 23 年 7 月 25 日広島で行われた中国・四国地域会議に 3 名参加。各大学の取組状況について聞く機会を得た。広島修道大学学長、就業力育成支援事業委員の渡邉教授、菊入室長、小栗文部科学省教育振興係長の話の後、２グループに分かれて情報交換をした。Ａ分科会では、徳島大学、島根県立大学、岡山県立大学、下関市立大学、岡山理科大学、ノートルダム清心女子大学、福山大学、山口東京理科大学、鈴峯女子短期大学、Ｂ分科会では、島根大学、香川大学、愛媛大学、尾道大学、県立広島大学、くらしき作陽大学、倉敷芸術科学大学、安田女子大学、広島修道大学の順で、現状や課題について報告し合った。巣立ちプログラム（徳島大学）ピアサポーターの活用（島根県立大学）巣作りネットワーク（岡山県立大学）マイスター制（下関市立大学）生涯を通じて人生設計オトナ学（愛媛大学）自己管理能力の育成（安田女子大学）など、どの大学も参考となる独創的な取組をしており、多くのことを学ぶことができた。

地域会議の様子

その後、渡邉委員、菊入委員から総括講評があった。「大学を巡る環境の厳しさの中でマネージメントやコーディネートを通じて学生の意欲を高めることが肝要」「学生時代に自立できるような大学にしてほしい。」「各大学の取組を参考にして活動や状況を見直してほしい。」など、これまでの本学の取組を見直す上でたいへん参考になった会議であった。

エ　上越教育大学訪問研修

平成 23 年 12 月 8 日、本学と同じような取組をしている上越教育大学を訪問して研修した。上越教育大学では綿密な計画を立ててボランティア体験の履修を進めている。ボランティア履修記録簿を作成し、ボランティア認定講習会を 4 回にわたって実施して学生が確実にボランティア体験ができるよう取組んでいた。学生に連携ボランティア先（例えば少年自然の家、社会福祉法人さくら園等）の 83 の活動行事や、連携小学校 3 校での学校行事、クラブ、課外活動、交通指導、授業補助などの教育活動を提示して取組んでいる。ボランティア体験ごとに活動記録を残し、受入機関の確認印をとるように義務づけて実践力アップを目指していた。1 年次に地域の自然体験イベントなどで 15 時間、2 年次は連携学校で 15 時間、3 年次は長期派遣につくかどうか学生が選ぶようにしていた。上越教育大学では発達障害のある児童生徒のいる学級づくり、授業づくり、保護者コーディネート、地域支援活動などが推進できる力をつけていくことに取組んでいた。

本学の体験型ボランティア活動と同じ方向での取組なので、多くのことが学ぶことができた。とくに、学校だけでなく、地域のいろいろな関係機関との連携はたいへん参考になった。

オ　倉敷芸術科学大学シンポジウム

平成 23 年 12 月 20 日、倉敷芸術科学大学のキャリアデザインシンポジウムに参加した。「就業力育成の施策と大学の役割を考える」と題して、渡辺美枝子立教大学教授の講演があった。その後、広島修道大学のキャリア・ポートフォリオ、倉敷芸術科学大学が目指すキャリアデザインの事例報告、ディスカッションがあった。広島修道大学のポートフォリオは学生一人一人入学時からの学習や課外活動などの活動記録の蓄積、電子情報化するキャリアポートフォリオを活用して卒業時の就業力獲得をめざしているところは大いに参考になった。倉敷芸術科学大学の学生マイスター制度も大いに参考になった。

（2）先進事例等から見た成果と課題

取組が遅れていたマナバフォリオの活用について 2 回情報収集や研修に出向いた。マナバフォリオを学生や教職員が有効に活用できる体制づくりが何よりも必要であることを痛感した。そこで、マナバフォリオ活用のためのワーキンググループを委嘱し、検討を進めていくことになった。また、マナバフォリオでは連携学校園でのコミュニティづくり、保幼小学修支援センターだより、学生の自己評価、アンケート調査等に多方面に利用するようになった。課題としては、学生が主体的にマナバフォリオを活用していくよう、学生側に立った具体的取組をすることが求められている。また、事業全体では実施計画通り進めてきてはいるが、各大学の取組から、本学の進捗状況や実施内容について改めて見直す機会となった。とくに、検討を進めていた本学の出口への展望を描くよい機会ともなった。また、本取組の目的が大学の教育改革の取組であり、学生が社会的、職業的自立につながる就業力を身につけさせることを再確認する機会ともなった。

6　栄養教諭、家庭・福祉の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップの試行

（1）栄養教諭を目指す学生の基礎実習・インターンシップの試行

ア　栄養教諭を目指す学生の基礎実習・インターンシップの実施計画

食品栄養学科では、栄養教諭を目指す学生を対象に実施計画書にあるように、基礎実習・インターンシップの試行を行うことにした。平成 23 年 7 月、2 年、3 年、4 年の学生全員を対象に基礎実習・インターンシップの試行について説明した（図 27 参照）。基礎実習・インターンシップの試行は栄養教諭を目指す学生を対象にしたので、基礎実習は栄養教諭を希望する者 2 名、インターンシップは栄養教諭を目指す者 5 名であった。

実施項目	⑩-2　栄養教諭をめざす学生のインターンシップの試行
実施計画概要	1　教職に就く志望が明確な 4 年生を対象に、9 月に本事業の概要及び意義、ポートフォリオの活用方法等について説明する。 2　学生の履修計画に基づき、断続的または継続的に可能な日時を検討し、H 小学校でのインターンシップを試行する。 3　ポートフォリオを活用し、学生の支援や評価に生かす。 4　それぞれの学生の状況に応じて、実施担当者より個別のカンファレンスを行う。 5　H 小学校において、学生、H 小学校担当者、実施担当者による合同カンファレンスを行う。 6　実施状況に基づき、当該学年に応じた基礎実習の計画をより適正なものに修正する。
実施に関しての留意事項	○参加対象者は、卒業後教職に就く志望が明確な 4 年生とする。 ○対象者全員に説明を行うが、参加は希望者とする。
実施によって期待される効果	○栄養教育実習後に学校現場にかかわるので、食に関する指導について指導計画を立てたり、指導の具体的な展開を考えたりする力を養うことができる。 ○就業までの期間に、栄養教諭として自分の課題が自覚できる。

図 27：栄養教諭を目指す学生のインターンシップの試行（実施計画書）

イ　インターンシップの試行①「一日ボランティアと学外実施委員会」

食品栄養学科の学生は講義や実習（臨地実習を含む）などでたいへん忙しく、基礎実習・インターンシップを行うことができる時間は夏季休業中、土日、授業前などに限られている。その中での試行であった。

平成 23 年 6 月 15 日H小学校において、初めての一日インターンシップを実施することができた。小学校でのボランティア実習は初めての体験であり、学生 5 名にとっては新鮮

であった。5名の初体験を考慮して、下記の実施計画書にあるように、授業参観・観察参加形式とし、学外実施委員会は体験報告会形式で行うことにした。

食品栄養学科インターンシップ（試行）

1　実施期日　　平成23年6月15日(水)　8：30～15：20

2　実施内容

8：30～ 8：45	H小学校について
8：50～ 9：35	1時間目授業（6年生）
8：35～ 9：40	移動・準備（6年生）
9：40～10：25	2時間目授業（5年生）
10：25～10：45	業間休憩（5年生）
10：45～11：00	基礎学習の時間（5年生）
11：00～11：45	3時間目授業（5年生）
11：45～11：50	移動・準備（5年生）
11：50～12：35	4時間目授業（6年生）
12：35～13：15	昼食・休憩（2年生､5年生）
13：15～13：30	掃除の時間（2年生）
13：30～13：35	移動・準備（2年生）
13：35～14：20	5時間目授業（2年生）
14：20～14：30	移動・準備
14：30～15：20	合同カンファレンス

3　一日インターンシップに参加して（感想文を書く）　　以下略

＜食品栄養学科インターンシップ（試行）第1回学外実施委員会実施報告書＞

1　実施期日　　平成23年6月15日(水)　14：30～15：20

2　場所　　H小学校応接室

3　出席者　　・栄養教諭を目指している食品栄養学科4年生5名
　　・H小学校校長・教頭
　　・大学担当者

4　実施内容

（1）自己紹介　　H学校校長、教頭
　　学生5名
　　大学担当者1名

（2）一日観察・参加しての感想発表

・2年生、5年生、6年生で何ができるか､把握できるかがわかった。

・発達段階がよくわかり、発問の仕方がわかった。研究授業に役立った。

・先生３割、子ども７割の発言という意味がよくわかった。

（３）検討テーマ＜どんなことを学んだか＞　合同カンファレンス

２年、５年、６年を参観してわかったことについて

・２年生は個々へのかかわりを大切にしていた。５年生、６年生は自主的な取組を大切にしていた。

第１回学外実施委員会の様子

ウ　基礎実習の試行

基礎実習を試行する２名の学生はH小学校において、講義の前後や合間など空いている時間を利用して読み聞かせなどを中心に行っている。保育･教育基礎実習の記録用紙に、基礎実習の日時、活動場所、活動内容を書いて、提出している。その用紙に担当の先生から簡潔なコメントをいただき、その後、個別の指導を受けている。

月／日（曜日）	活動時間（0:ΔΔ~□:◇◇）	活動学校園場所	活動内容（箇条書きレベル）	学校園担当者（印・サイン）	大学確認（印・サイン）
5/12	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	初めて会う1年B組の子。どうコミュニケーションをとれば良いのか、とまどった。絵本も静かに聞いてくれた。	中尾	[illegible]
5/19	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	何人か教室に入ると、しゃべりかけてくれたので、ホッとした。毎週いくのを知らないのが「今日も？やったあ」と言ってくれた子もいて嬉しかった。	中尾	[illegible]
5/26	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	だんだん絵本を読んでいる途中に「わぁ～」とか「きゃっ」と感情表現をしてくれるようになってきた。	中尾	[illegible]
6/2	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	前回の反応もあり、本を選ぶのに迷ってきた。子どもたちも教室に入ると「今日は何読むの？」と楽しみにしてくれているのが伝わる。	中尾	[illegible]
6/9	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	絵本の見えにくい、両端と後ろの方の席の子たちが、あまり興味を示していなかった。どのように工夫していくべきか。	中尾	[illegible]
6/16	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	一日平均2冊くらい絵本を読んでいっているが、子どもたちの中で「この本知ってる」というのが増えてきた。	中尾	[illegible]
6/23	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	声の大小や、読み方には工夫できているし、読みながら子どもたちの方を見えるようになってきた。	中尾	[illegible]
6/30	8:25～8:35	ノートルダム清心小学校 1年B組	どうしても本が途中止めになってしまうことがクツく、前回の振り返りをするのが大変。	中尾	[illegible]

表３：H さんの基礎実習の記録

＜読み聞かせの記録＞

日付	タイトル	著者	ページ数	出版会社
2011 年 5 月 12 日（木）	ライオンのおとしもの	いとう　みき	31	大日本図書
	やさしいあくま	なかむら　みつる		幻冬舎
2011 年 5 月 19 日（木）	やさしいあくま	なかむら　みつる		幻冬舎
	くまのコールテンくん	ドン＝フリーマン	30	偕成社

2011 年 5 月 26 日（木）	くまのコールテンくん	ドン＝フリーマン	30	偕成社
	すてきな三にんぐみ	トミー＝アンゲラー		偕成社
2011 年 6 月 2 日（木）	たんじょうび	ハンス・フィッシャー	32	福音館書店
2011 年 6 月 9 日（木）	たんじょうび	ハンス・フィッシャー	32	福音館書店
	ペレのあたらしいふく	エルサ・ベスコフ	16	福音館書店
2011 年 6 月 16 日（木）	おちゃのじかんにきたとら	ジュディス・カー	32	童話館出版
	おなかのすくさんぽ	片山　健	32	福音館書店
2011 年 6 月 23 日（木）	おなかのすくさんぽ	片山　健	32	福音館書店
	いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう	バージニア・リー・バートン	46	福音館書店
2011 年 6 月 30 日（木）	いたずらきかんしゃ　ちゅうちゅう	バージニア・リー・バートン	46	福音館書店
	あな	谷川　俊太郎	32	福音館書店
	かいじゅうたちのいるところ	モーリス・センダック	40	冨山房

授業で時間のない学生にとって授業前の読み聞かせは都合がよく、子どもたちからも始業前のひとときであり、たいへん喜ばれている。

エ　インターンシップの試行②「食に関する指導」

平成 24 年 1 月 13 日の昼食時に、栄養教諭として食に関する指導を試みた。2 年生児童を対象にした「朝食の役割について」の授業である。何回か指導案を検討して、下記のような学習指導案と細案をもとに実施した。

第 2 学年　学習指導案

平成 24 年　1 月 17 日（火）　昼食時（12：35～12：45）　○○　○○

1. 題材名　朝ごはんのヒミツをみつけよう！
2. ねらい

　朝食は 1 日を元気に過ごすために重要な役割を担っていることに気付かせるとともに、朝食を毎日摂取しようとする意欲を高めさせる。

3. 食育の視点

○朝食は心身の健康を保持し、活動的な毎日を過ごすために重要であることを知る。

【食事の重要性】【心身の健康】

4. 題材設定の理由

　朝食は心身の健康に影響を及ぼし、学力や基礎体力との間にも関連があることが示されている。小学生は食習慣の完成期にあたり、生涯にわたり望ましい習慣を維持す

るために非常に重要な時期である。

そこで、朝食の役割を知らせることにより、朝食を毎日摂取しようとする意欲を高めたいと考え、本題材を設定した。

5. 本時案

学習活動	指導・支援	準備物
1.本時のめあてをつかむ。 （2 分）	○朝食を食べて来たのか確認し、なぜ朝食を食べるのか考えさせていく。 ○「朝ごはん島」を探検し、朝ごはんの秘密を見つけていくことを伝える。 「あさごはんは、なぜたいせつなのか、そのひみつをみつけよう。」	1 朝ごはん島の地図 2 めあて 3 朝子ちゃん、ごはんくん人形
2.朝食の役割を知る。 （6 分）	○朝ごはん島を探検し、朝食が大切な秘密を見つける。 1）あたまにパワーをあたえ、しっかり勉強することができる。 2）体をあたため、元気に動くことができる。 3）気持ちのよい一日の始まりになる。 ○児童の反応（挙手）により本時の評価を行う。	4,5 脳のイラスト 6 勉強ができるイラスト 7,8 サーモグラフィー 9 運動ができるイラスト
3.本時のまとめをする。 （2 分）	○あいうえお作文で朝食の役割について再度確認し、意識の定着を図る。 あ：あたまにパワー、しっかり勉強できます さ：さっと体温があがり、元気に遊べます ご：ごっくん、おなかも目がさめました は：ハッピーな、きもちのよい一日がはじまります ん：んんっと、みんなの元気のもと「あさごはん」	10 あいうえお作文（絵入りのカード）

6. 評価

・朝食がなぜ大切なのか、そのひみつをみつけることができましたか【児童の反応】

7. 実際の指導（青字：発問、緑字：使用する媒体）

指導の流れ	予想される児童の反応
◆自己紹介 みなさん、こんにちは。私はノートルダム清心女子大学で食べ物のことを勉強している T といいます。5 月に一緒に遊んだお友達もいますね。 今日は、お弁当を食べながら、あるヒミツの島を探検していきます。	

1.本時のめあてをつかむ。 冒険に出発する前に、みなさんに質問です。(Q1) 今日、朝ごはんを食べて来た人は手を挙げてください。 はい、ありがとうございます。手を下してください。ほとんどのお友達が食べて来たのですね。それではもう一つ質問です。	(A1)はーい。
(Q2)なぜ、朝ごはんを食べて来たの？ そうだよね、朝ごはんを食べないとお腹がすくね。今、みんなに少し考えてもらったけれど、実は、朝ごはんには元気な一日を過ごすための秘密が隠されているのです。今日は、朝ごはんがなぜ大切なのか、「朝ごはん島」を探検して、その秘密を一緒に見つけていきましょう。 （☆媒体 1：朝ごはん島地図、媒体 2：めあて）	(A2)お腹がすくから。 お母さんが食べろと言うから。
2.朝食の役割を知る。 朝ごはん島のガイドさんを紹介します。朝ごはんをしっかり食べて来た「朝子ちゃん」と「ごはん君」です。(☆媒体 3：朝子、ごはんの人形) それでは、知られざる「朝ごはん島」の冒険に出発！！ 【名所①べんきょう山：頭にパワーを与え、しっかり勉強ができる】 まずは、勉強山に登ってみましょう！ (Q3)みなさん、お勉強するときは体のどこを使いますか？ そうですね、頭を使います。勉強山の頂上からは、みんなの頭の中をのぞくことができます。それでは、朝ごはんをしっかり食べて来た朝子ちゃんの頭の中をのぞいてみましょう！ （☆媒体 4：元気な脳のイラスト）みなさん、朝子ちゃんの頭の中はどう？元気モリモリだね。	(A3)頭
(Q4)しっかり勉強できそうだと思う人？ そうだね、よく勉強できそうだね。じゃあ、朝ごはんを食べていない人の頭の中はどうなっているかな。(☆媒体 5：元気のない脳イラスト)	(A4)はーい。
(Q5)この頭だとしっかり勉強できそうかな？ そうだよね、なんだか元気がなくて勉強どころではなさそうだね。	(A5)できない。

実はね、夜、みんながぐっすり眠っている間も頭は働いてくれているんだよ。頭はとっても働き者なんです。だからいっぱいパワーが必要なの。朝起きたら、朝ごはんをしっかり食べて頭にパワーをあげないと、こんな風に元気のない頭で学校に行くことになります。 朝ごはんのヒミツが一つ見つけられましたね。朝ごはんは、しっかり勉強することができるように頭にパワーをくれます。（☆媒体６：勉強ができるイラスト） 【名所②朝ごはん温泉：体をあたため、元気に動くことができる】 次は朝ごはん温泉に出発！ (Q6)ごはんを食べると、体が温かくなったことがある人はいるかな？私もごはんを食べると、温泉に入ったように体が温かくなったなぁと感じることがあります。ホントかなぁと思っている人もいるかもしれませんね。おっと、ごはん君が朝ごはん温泉でこんな不思議な写真を発見しました。（☆媒体７：朝食前のサーモグラフィー） この写真は、温度の変化を色で見ることができるサーモグラフィーという機械を使って、朝ごはんを食べる前の体温をみたものです。サーモグラフィーは、冷たい所は青っぽく、温かい所は赤っぽくうつります。朝ごはんを食べる前は、全体的に青や緑色が多くて体が温まっていませんね。 では、朝ごはんを食べたら体温はどのように変わるのかな。朝ごはんを食べると、なんとこのように、体が温まって赤色や黄色の部分が増えました。（☆媒体８：朝食後のサーモグラフィー）すごいですよね。朝ごはんを食べて、朝ごはん温泉につかると、体を温めて元気に動くことができます。思いっきり遊べるね。朝ごはんのヒミツその二、体を温めて元気に動くことができる。（☆媒体９：運動ができるイラスト） 朝ごはんをしっかり食べると、頭や体が目覚めて気持ちの良い一日を始めることができるんですね。朝子ちゃんやごはん君のように毎日朝ごはんを食べると元気に過ごせますね。 (Q7)明日からも朝ごはんを毎日食べようと思う人？	(A6)はーい。わからない。 (A7)はーい。

はい、ありがとう、手を下しましょう。 3.本時のまとめをする。 　さぁ、朝ごはん島の探検ももうすぐゴールです。 (Q8)みなさん、朝ごはんがなぜ大切なのか、そのヒミツを見つけることができましたか？ 　すごいですね。朝ごはんのヒミツを見つけることができたので、朝ごはん島に隠されていたお宝のカードを手に入れることができました。何が書いてあるのかな。（☆媒体 10：絵入りのカード 5 枚） ・あさごはんの「あ」は、「あたまにパワー、しっかりべんきょうできます」 ・あさごはんの「さ」は、「さっと体をあたためて元気にあそべます」 ・あさごはんの「ご」は、「ごっくん、おなかも目がさめました」 ・あさごはんの「は」は、「ハッピーな、気もちのよい一日がはじまります」 ・あさごはんの「ん」は、「んんっと、みんなの元気のもと“朝ごはん”」 　みなさんも今日から朝ごはん島のガイドさんです。おうちの人やお友達に朝ごはんについて教えてあげてください。 　とっても大切な朝ごはん、明日からもしっかり食べてくださいね。ありがとうございました。	(A8)はーい。

授業風景①朝ごはん島探検

授業風景②朝ごはんの役割

朝ごはんの指導について、児童の評価を挙手で求めた。

・評価の観点：朝食がなぜ大切なのか、そのひみつをみつけることができましたか

全員が挙手をした。短時間ではあったが、わかりやすい授業だったので 2 年生の児童も熱心に参加していた。

9　授業の反省　「H 小学校での食に関する指導を終えて」

1　題材設定について

朝食に関する指導を行うに当たり、主題の置き方を H 小学校と R 小学校では少し変更した。主題を決める際、①指導時間、②学年等の相違、③栄養教諭の指導を受けているか否かの三項目を考慮した。

H 小学校の指導時間は昼食時の 10 分間であるため、指導内容をより絞り込む必要がある。朝食について初めて指導を受ける児童が多いと予想されるので、朝食摂取の意識づけの基盤となる「朝食の大切さ」に焦点をあてた。遠方から通っている児童は朝食を食べる時間が R 小学校に通う児童よりも早いと推察される。年齢が上がるに伴い朝食を欠食する割合が高まる。朝食摂取を習慣化させるには、低年齢の時に朝食への理解を深めておく必要があると考えた。題材名は「朝ごはんのヒミツをみつけよう！」とし、2 年生の児童が楽しく学習することができるよう、朝ごはん島という島を探検しながら朝食の役割を学んでいくようにした。

栄養教諭が在籍している R 小学校では 45 分間の学活の時間に指導を行った。朝食について基礎知識があることから、朝食の役割については展開の最初に軽く触れる程度とし、主題を「早寝・早起き・朝ごはん」という自らの生活をマネジメントしていく力を養うことに置いた。体育（保健領域）の授業でも「早寝・早起き・朝ごはん」について学習するため、教科との連携を図ることができ、朝食摂取の習慣化を目指すうえで有効であると考えた。題材名は「朝ごはんを毎日食べよう！」とした。

H 小学校と R 小学校の指導内容を比べると、管理栄養士の専門性を生かした指導ができたのは H 小学校であった。公立小学校の指導では、学活の時間を頂いての指導でありながら、展開が保健の授業のようになってしまい、学活の特性を生かし切れなかった。H 小学校では R 小学校での反省点を生かすことができた。

R 小学校では児童とのやり取りを通して指導を展開していく難しさがあった。しかし、H 小学校での指導は昼食時であったため、予期せぬような児童の反応はなく、指導案に沿って行うことができた。

2　H 小学校での指導の問題点および改善点について

児童の反応を確認しながら、もう少しゆっくりと落ち着いた説明をするべきであった。説明内容に関しても、同じことを繰り返してくどくなったり、細案にはなかった説明を加えたりと分かりにくかったところがあったので、落ち着いて指導ができる技術を身につける必要があると感じた。

2 年生に理解されやすいように資料を工夫したり、探検のかたちで授業を進めたりしたのは効果的であったと思われる。児童全員が朝食を食べて登校して来ていたので、「明日は朝食を食べて来ますか？」という発問は、「明日も朝食を食べて来ますか」とすべきところ

であった。発する一言一句にまで細心の注意を払う必要がある。緊張している中で、このような実践を行うのはなかなか難しいと思った。落ち着いて指導を行うためには、事前に何回も練習を重ね、本番に臨まなければならない。子どもと接する機会を増やし、子どもの心に深く届く食育の実践を目指したい。

課題は山積しているが一つずつ取り除いていき、ステップアップが果たせるように努力していきたい。

【大学担当者から】

1　題材設定について

平成 23 年 6 月岡山市内 R 小学校において、栄養教育実習の模擬授業でおこなった朝食に関する指導をふまえたうえで、H 小学校の児童を対象とした昼食時における食指導のテーマ設定を考えた点を高く評価します。昼食時の食事形態の違いにかかわらず、発育期にある児童の朝食摂取の大切さを子どもたちに楽しく学んでもらうという目標は、達成できたと思います。児童一人ひとりの心に深く刻まれたことでしょう。食育は、継続的におこなうことが重要です。H 小学校長先生は、指導時間終了後教室を去るときに「食育をしてもらったのは、君たちだけだからね」と児童へ話してくださいました。是非、今後も児童に定期的な食育を実践してほしいと願っています。

2　H小学校での指導の問題点および改善点について

給食経営管理論の授業で、管理活動はいずれの活動にも連動し、業務を推進する上で重要性が強調されたこと、また、管理を行う上で、計画・実践行動・現状把握・評価すること、さらに次の活動に展開することから管理のサイクルが活用されたことなどを学びました。一つのサイクルを終えたら、反省点を加えて再計画のプロセスに移し、次の PDCA サイクルに連動させ、ループ状に展開し、計画にフィールドバックすることにより、さらに高い目標をめざし、ステップアップして改善することでしたね。今回のレポートでは、10 分間の指導で出来なかった点やどのように改善すべきかをまとめており、着実に次へのステップに向かっていることに感心しました。上手に話すことも大切ですが、話し手の真摯な態度、入念な事前準備をして指導に臨めば、子どもたちが支えてくれます。これから経験を積むことで、より完成度の高い指導ができるようになります。若いときは、失敗をして一人前になるのですから・・・。今回、与えられた機会に感謝し、失敗を恐れず夢の実現に向けて頑張りましょう。

オ　学外実施委員会の試行

栄養教諭としての授業の検討会とこれまでの基礎実習についての検討会を兼ねて、下記のような第 2 回学外実施委員会で合同カンファレンスを行った。

＜H 小学校学外実施委員会実施報告書（合同カンファレンス）＞

1　実施期日　　平成 24 年 2 月 13 日(月)　9：30～10：30

2　場所　　H小学校応接室

3　出席者　　・栄養教諭を目指している食品栄養学科３名

・H小学校校長、大学担当者２名

4　実施内容

（1）2 年児童対象「朝食の役割について」の授業について

○授業の意図、授業の反省について

・授業者からの反省

・大学担当者からの話

○栄養教諭としての指導について

・細案とわかりやすい資料を準備して臨んだので児童の反応は良かった。

・2 年生の発達段階にあった「めあて」であった。

・学習活動が宝さがしといった低学年に興味のある活動だったので効果的だった。

・「朝ごはんはなぜ大切か」で、脳と体温との関係がよくわかる挿絵であったのでよかった。

・まとめの「あさごはん」の 5 枚のカードでなぜ必要かおさえることができていた。

○子どもの反応、授業評価について

・発問、板書、資料等について、よく練られて臨んでいた。

・昼食時という条件の中でもよくわかる、板書、発問、資料であった。

・児童全員が朝ごはんの大切さを理解していた。

・R 小学校での授業体験をよく生かしている。

○H 小学校長のコメント

・とてもわかりやすい授業でした。子どもたちも熱心に参加できていました。

（2）基礎実習の取組について（学生からの報告）

○読み聞かせ体験

・1 年生に毎週読み聞かせに来ている。絵本を中心にしている。一生懸命に聞いてくれるよう練習して臨んでいる。擬音等の時にはとくに反応が大きい。

・読み聞かせの前後の時間も大切にしている。

・子どもたちとは仲良くなっていて、大学であっても声をかけてくれる。

・一日の始まりとしての読み聞かせは大切だと思った。

○基礎実習のあり方について

・授業で忙しい食品栄養学科の学生にとって、授業前の読み聞かせは行きやすく、子どもたちにとっても気持ちによいひとときとなっている。

○H 小学校校長のコメント

・子どもたちにとって、読書はとても大切な時間です。読み聞かせによって本に興味・関心をもってくれることを望んでいます。ボランティアでこのように来ていただいていることに感謝しています。引続きよろしくお願いいたします。

第 2 回学外実施委員会合同カンファレンス

カ　試行の成果と課題

基礎実習については、H 小学校児童対象に読み聞かせを継続して取組んだ。また、インターンシップでは模擬授業にもチャレンジした。

インターンシップの事後アンケートでは、栄養教諭に就きたいとの回答ではあったが、全員自分にその力があるのだろうかという不安も述べられていた。とくにやる気のない児童への接し方等、子どもへの対応の仕方に困ったという回答もあった。インターンシップの中で、「授業補助」「環境構成・教材準備補助」「清掃・給食・弁当補助」等の体験をしてきており、弁当の様子、子どもの可能性、保護者との関係など学生は多くのことを学んんでいる。さらに引き続きボランティアをして、児童理解、発達段階、教え方、接し方、雰囲気などを学びたいと答えていた。

基礎実習･インターンシップの試行では、活動の記録を残し、取組について合同カンファレンスの機会を持った。自分の体験を振り返ることによって、学生自身が教職を目指している自分の課題をより明確に意識できるようになった。また、大学担当者からの個別のアドバイスも試みた。

学生が基礎実習・インターンシップでの体験をどう評価しているのか、教職としての資質、児童理解、協働力、保護者理解の面からの到達度評価も試行した。食育にかかわる面からの児童理解や児童とのコミュニケーションには自信を持ってきていた。また、先生への協力等も次第にできるようになってきていると自己評価している。保護者とは接触する機会がなかったが、ぜひ食育面から保護者と話し合う等の機会を望んでいた。基礎実習・インターンシップを通して栄養教諭としての資質が少しずつ身についてきていると自己評価していた。

基礎実習・インターンシップをしてみて、小学校での体験は学生にとって有益なものとなっていることがわかった。とくに子どもとのコミュニケーション力は体験により着実に

身についてきている。保護者支援力では保護者とのかかわりができなかったが、学校行事等への参加による意図的な取組の必要性を感じている。

これまでの試行を実施してみて、学生の授業や実習が多く、なかなか基礎実習・インターンシップに行く時間的なゆとりがないことがわかっている。2年生から計画的に取組んでいかないとできない状況であることもわかった。教職を目指す学生にとってはたいへんではあるが、基礎実習・インターンシップの試行は極めてよい体験となった。今後は、試行したことをもとに食品栄養学科として前向きに取組んでいきたいと考えている。

（2）家庭・福祉の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップの試行

人間生活学科では、基礎実習の試行を家庭･福祉の教職を目指す 2.3 年生を対象に実施計画書（図 28 参照）をもとに内容や実施時期を検討しつつ行った。同様にインターンシップの試行は教育実習を終えた 4 年生を対象に実施した。

教職課程履修者全員に対する基礎実習・インターンシップの試行に関する説明を、平成 23 年 4 月（3 年生 5 名）及び 9 月（2 年生 11 名・4 年生 9 名）に行った。プログラムへは自主参加としたため、基礎実習には 3 年 5 名・2 年 6 名、インターンシップには 4 年 2 名が参加した。

2011 年「教職のための体験型就業力育成」（人間生活学科）実施計画書

実施項目	⑩-3　家庭・福祉の教職をめざす学生の基礎実習の試行
実施計画概要（詳細に）	１．３年生には年度当初、２年生には 7 月に、本事業の概要及び意義、ポートフォリオの活用方法等について説明し、事業への参加意欲を図る。 ２．学生の履修計画に基づき、断続的または継続的に可能な日時を検討し、連携校等での基礎実習を試行する。 ３．ポートフォリオを活用し、学生の支援や評価に生かす。 ４．それぞれの学生の状況に応じて、実施担当者より個別のカンファレンスを行う。 ５．本学において、学生、実施担当者、連携校等の担当者による合同カンファレンスを行う。 ６．実施状況に基づき、当該学年に応じた基礎実習の計画をより適正なものに修正する。
実施に関しての留意事項	○教科指導の専門性が強く求められることから、教職及び教科に関する科目の履修を前提とした指導を行う。 ○対象者全員に説明を行い積極的な参加を促すが、参加は希望者とする。

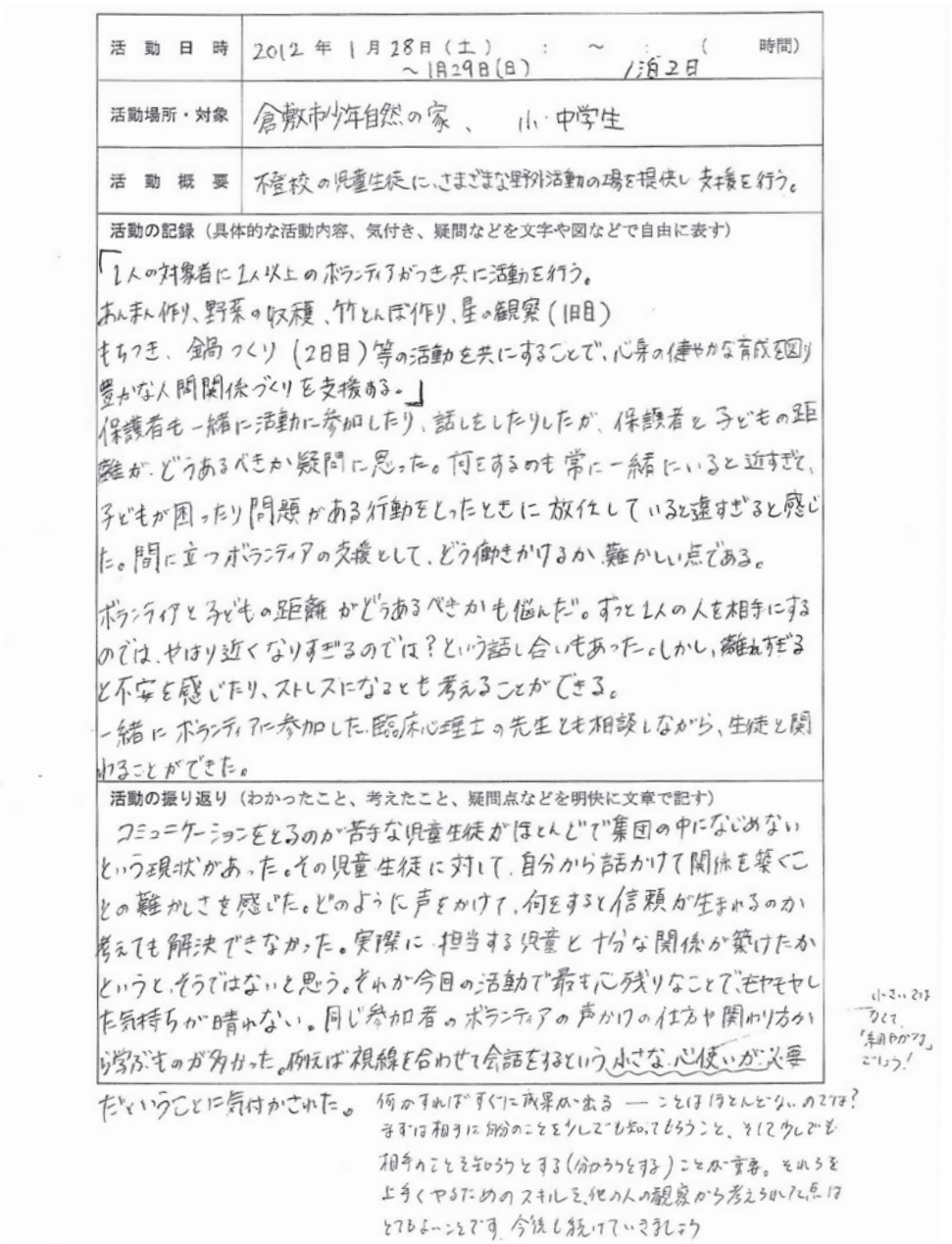
図 28：人間生活学科実施計画書（基礎実習の試行）

ア　家庭･福祉の教職を目指す学生の基礎実習の試行

大学のカリキュラム上、授業日に学外活動を実施することは困難であることから、休日や長期休業期間に開催されるボランティア活動等で学生が自主的に参加を計画しているものも活用して基礎実習の目的達成をはかることとした。

学生が参加したボランティア活動の多くは教育委員会等が中心となって開催しているもので活動内容は多岐にわたる。例を挙げれば、読み聞かせ、小学校クラブ活動、小学校栽培委員会活動、不登校児童生徒と親の野外活、夏休み学習教室、家庭科ミシン指導補助な

どである。いずれも教育現場の課題を反映したものである。活動の中では、一般の児童生徒、特別支援を必要とする子どもとその保護者、児童生徒の指導者、他大学の参加学生などと関わり、大学内ではできない多様な人との関わりや直接体験ができるようになっている。各々の活動期間は短期間のものが多いことから、一連の活動が終わる毎に活動を振り返って成果と課題を基礎実習の記録として提出させた。個々の記録内容に応じて、大学担当者から励ましや取り組むべき課題等を朱書きして（図 29 参照）速やかに返却し、教職に



活動日時	2012 年 1 月 28 日（土） : ～ : （ 時間） ～1月29日(日) 1泊2日
活動場所・対象	倉敷市少年自然の家、 小・中学生
活動概要	不登校の児童生徒に、さまざまな野外活動の場を提供し支援を行う。

活動の記録（具体的な活動内容、気付き、疑問などを文字や図などで自由に表す）

「1人の対象者に1人以上のボランティアがつき共に活動を行う。
おんぶ作り、野菜の収穫、竹とんぼ作り、星の観察（1日目）
もちつき、鍋つくり（2日目）等の活動を共にすることで、心身の健やかな育成を図り豊かな人間関係づくりを支援する。」
保護者も一緒に活動に参加したり、話しをしたりしたが、保護者と子どもの距離がどうあるべきか疑問に思った。何をするのも常に一緒にいると近すぎて、子どもが困ったり問題がある行動をしたときに放任していると遠すぎると感じた。間に立つボランティアの支援として、どう働きかけるか難かしい点である。
ボランティアと子どもの距離がどうあるべきかも悩んだ。ずっと1人の人を相手にするのでは、やはり近くなりすぎるのでは？という話し合いもあった。しかし、離れすぎると不安を感じたり、ストレスになるとも考えることができる。
一緒にボランティアに参加した臨床心理士の先生とも相談しながら、生徒と関わることができた。

活動の振り返り（わかったこと、考えたこと、疑問点などを明快に文章で記す）

コミュニケーションをとるのが苦手な児童生徒がほとんどで集団の中になじめないという現状があった。その児童生徒に対して、自分から話かけて関係を築くことの難かしさを感じた。どのように声をかけて、何をすると信頼が生まれるのか考えても解決できなかった。実際に担当する児童と十分な関係が築けたかというと、そうではないと思う。それが今日の活動で最も心残りなことで、モヤモヤした気持ちが晴れない。同じ参加者のボランティアの声かけの仕方や関わり方から学ぶものが多かった。例えば視線を合わせて会話をするという小さな心使いが必要だということに気付かされた。

小さいこと ひとつ、「毎日がつみ」ごとしよう！

何かすればすぐに成果が出る ― ことは ほとんどない のですね？
まずは相手に自分のことを少しでも知ってもらうこと、そして少しでも相手のことを知ろうとする（分かろうとする）ことが重要。それらを上手くやるためのスキルを、他の人の観察から考えられた点はとてもよいことです。今後も続けていきましょう

図 29：N さんの基礎実習の記録と大学担当者のコメント

対する各人の課題に気付くとともに教職の魅力を実感できるよう努めた。

また、普通科出身の学生がほとんどであることから、専門教科のある家庭・福祉の教員を

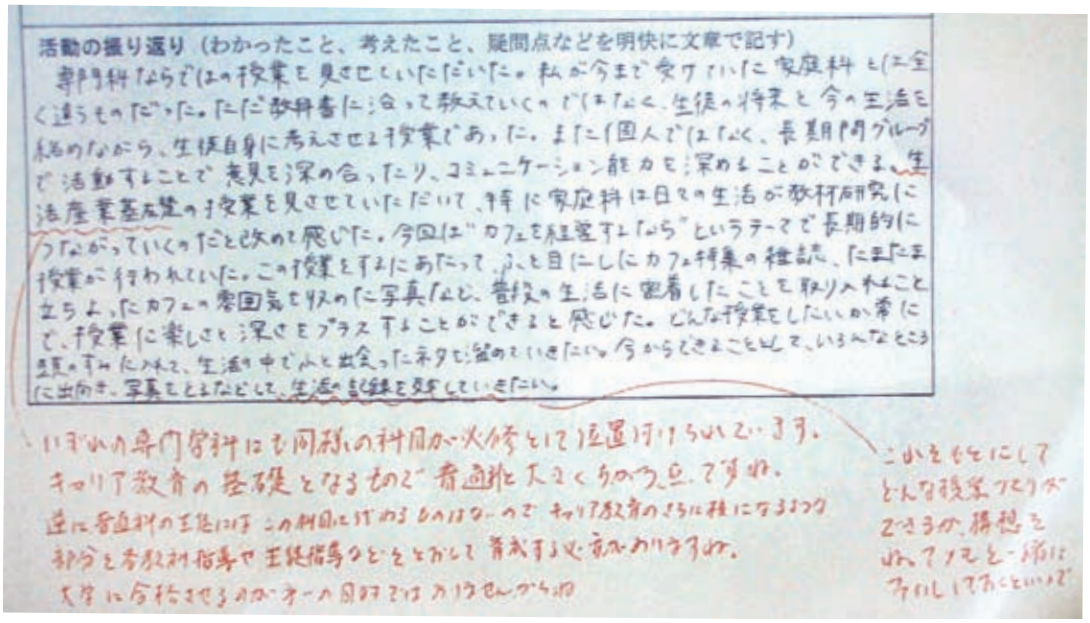
目指すには専門学科の現状を知り関心を高めておくことが極めて重要である。このことから３年生を対象に、平成 23 年 8 月に家庭と商業の専門学科を併設する岡山県立岡山南高等学校において、教務課長から専門学科の教育課程や指導の重点事項等について説明を受けた後、生徒の活動状況を観察する機会を設けた。9 月以降の同校の活動への継続的な参加は困難なことから、学校･保護者･地域のつながりを実感することが可能な学校行事である卒業制作展やオープンスクールに参加するよう２・３年生に促した。参加後は、ボランティア活動への参加と同様に基礎実習の記録の提出と返却により指導した。

イ　家庭･福祉の教職を目指す学生のインターンシップの試行

教職への就業を決定した者のうちインターンシップへの参加を希望する２名を対象に実施することとした。受け入れ先である岡山県立岡山南高等学校と活動内容等を協議し、インターンシップ実施期間は平成 23 年 10 月～平成 24 年 1 月、1 回の活動時間は 2～3 時間、一人につき 10 回程度の活動を計画した。2 名は一緒に活動する日もあれば単独のこともある。基礎実習と同様に、初日に教務課長からの説明等を受けて活動を始めた。同校が家庭と商業の専門学科を設置していることから、商業学科にも関わる機会を可能な限り設けることとなった。インターンシップの活動内容は、家庭学科の授業見学（専門教科、調理･被服実習授業、技術検定指導、ホームプロジェクト）、商業学科の授業見学（普通教科、専門教科）、実習授業準備補助、卒業制作展への取り組み（会場作り、リハーサル、物品販売準備）、部活動見学などである。活動に参加後は、基礎実習と同様にインターンシップの記録にまとめ、教職に就くという立場から成果や課題を明記するように指導した。大学担当者は、現場の課題を実感している学生がその課題と積極的に向き合う姿勢が持てるように助言を朱書きし（図 30 参照）、就業意欲の向上を目指した。

ウ、　自己評価の試行

人間生活学科の基礎実習の試行では、一つの活動を継続的に長期間行うことは困難で、内容の異なる複数の単発的な活動に取り組むことになることは明白であった。そこで、各々の活動の事前事後で自己評価を実施し、活動に取り組むことによる自己の変化や課題に気付かせ、その向上や改善の意欲を持たせたいと考えた。自己評価表（図 31 参照）は、教職の専門性、生徒（児童）の理解、協働力、保護者や地域との連携に関する 24 項目で構成し、「～できるか」「～したいか」「～しようと考えているか」という自己の現状や意欲を問うものにした。事後の評価では項目によって、「～しようと考えているか」の問いを「そのことができたか」に置き換えて成果の有無を問うようにした。また、活動の前後での自分の変化をとらえやすくなるように、評価項目の左側に事前、右側に事後のチェック欄を設けた。



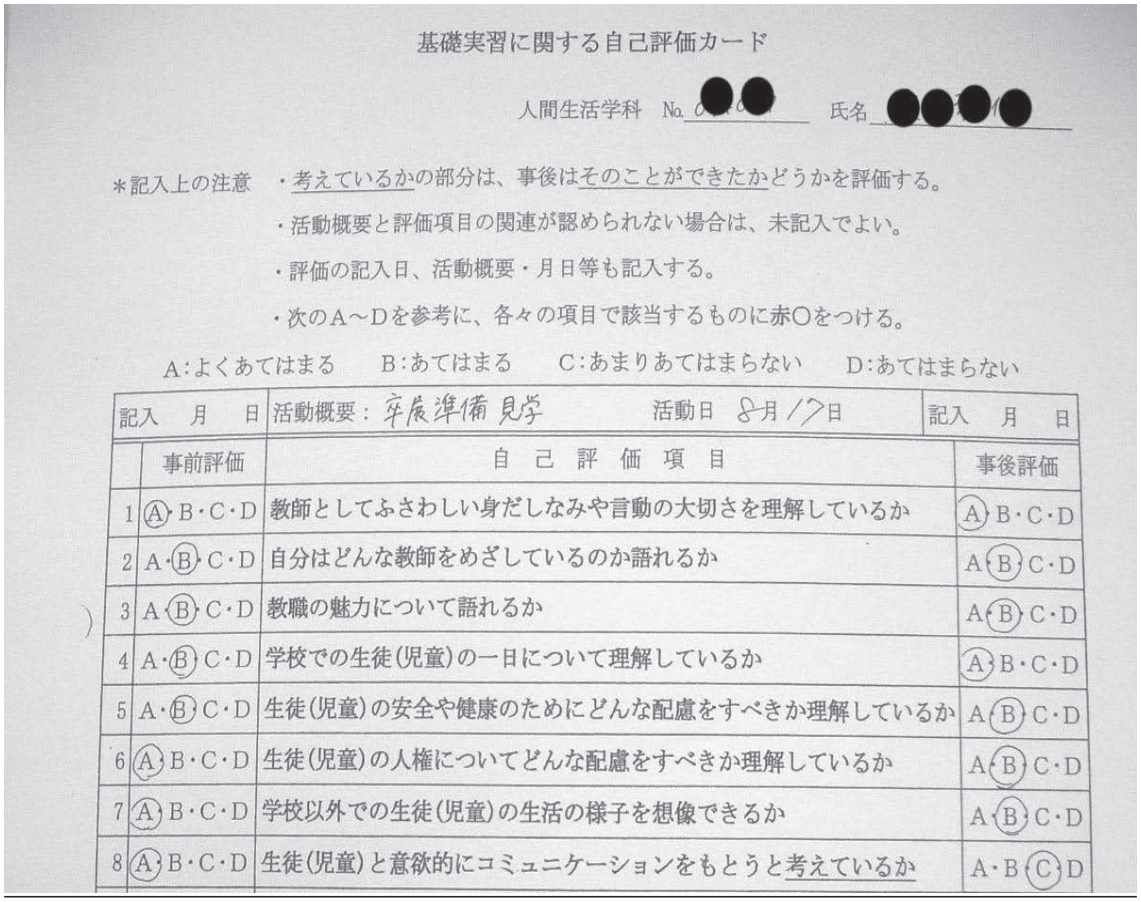
活動の振り返り（わかったこと、考えたこと、疑問点などを明快に文章で記す）

専門科ならではの授業を見させていただいた。私が今まで受けていた家庭科とは全く違うものだった。ただ教科書に沿って教えていくのではなく、生徒の将来と今の生活を結びながら、生徒自身に考えさせる授業であった。また個人ではなく、長期間グループで活動することで意見を深め合ったり、コミュニケーション能力を深めることができる。生活産業基礎の授業を見させていただいて、特に家庭科は日々の生活が教材研究につながっていくのだと改めて感じた。今回は"カフェを経営するならば"というテーマで長期的に授業が行われていた。この授業をするにあたって、ふと目にしたカフェ特集の雑誌、たまたま立ち寄ったカフェの雰囲気を収めた写真など、普段の生活に密着したことを取り入れることで、授業に楽しさと深さをプラスすることができると感じた。どんな授業をしたいか常に頭の隅に入れて、生活の中でふと出会った材料を溜めていきたい。今からできることとして、いろんなところに出向き、写真をとるなどして、生活の記録を残していきたい。

いまどれの専門学科にも同様の科目が必修として位置付けられています。キャリア教育の基礎となるもので普通科と大きく違う点。で学ぶ。逆に普通科の生徒にはこの科目に代わるものはないので キャリア教育のさらに核になるような部分を教科指導や生徒指導などをとおして育成する必要があります。大学に合格させるのがゴールの目的ではありませんから

これを土台にしてどんな授業プランができるか、構想をねってみると、締はアイレしてみたいです

図 30：F さんのインターンシップの記録と大学担当者のコメント



基礎実習に関する自己評価カード

人間生活学科　No. [redacted]　氏名 [redacted]

＊記入上の注意　・考えているかの部分は、事後はそのことができたかどうかを評価する。
・活動概要と評価項目の関連が認められない場合は、未記入でよい。
・評価の記入日、活動概要・月日等も記入する。
・次のA～Dを参考に、各々の項目で該当するものに赤○をつける。

A:よくあてはまる　B:あてはまる　C:あまりあてはまらない　D:あてはまらない

記入　月　日	活動概要：卒展準備 見学　活動日 8月17日	記入　月　日

	事前評価	自己評価項目	事後評価
1	(A)・B・C・D	教師としてふさわしい身だしなみや言動の大切さを理解しているか	(A)・B・C・D
2	A・(B)・C・D	自分はどんな教師をめざしているのか語れるか	A・(B)・C・D
3	A・(B)・C・D	教職の魅力について語れるか	A・(B)・C・D
4	A・(B)・C・D	学校での生徒(児童)の一日について理解しているか	(A)・B・C・D
5	A・(B)・C・D	生徒(児童)の安全や健康のためにどんな配慮をすべきか理解しているか	A・(B)・C・D
6	(A)・B・C・D	生徒(児童)の人権についてどんな配慮をすべきか理解しているか	A・(B)・C・D
7	(A)・B・C・D	学校以外での生徒(児童)の生活の様子を想像できるか	A・(B)・C・D
8	(A)・B・C・D	生徒(児童)と意欲的にコミュニケーションをもとうと考えているか	A・B・(C)・D

図 31：K さんの自己評価カード

エ　試行の成果と今後の課題

基礎実習については、２・３年生の多くの学生が複数回参加しているボランティア活動に関するものを中心に述べる。活動後の自己評価ではほとんどすべての項目で向上が見られた。これは各々の活動毎に事前の自己評価を実施したことにより、学生が自分の現状を認識した上で課題意識を持って活動に取り組んだものと思われる。活動前と比べて変化のないものや低下しているものも若干あるが、これは同一の評価項目であっても活動後は「そのことができたか」に置き換えて評価していることによると思われる。特に成果と思われるのは、生徒（児童）の理解についてである。継続的に同一対象と関わるのではなく、活動毎に様々な対象と関わったことから、関わる生徒や児童の実態を踏まえてよりきめ細かい自己評価をする姿勢が見られた。例えば、一般の生徒と関わる活動では生徒理解ができると評価した学生でも、障害のある児童などと関わった場合の自己評価は厳しくなっているだけでなく、特別支援教育などに関する学習意欲を示す記述も多々見られた。

インターンシップの事後アンケートでは、教職に「ぜひ就きたい」と意思表示しながらも、「自分に勤まるか」という不安も述べられていた。これは、専門学科の指導や生徒の活動を間近に観察したことで、教科の専門性をより高める必要性を実感したことによると思われる。しかし、今後の自分の課題として「専門知識をもっとつける」「いろいろなことに積極的に取り組む」「自分の教育観のさらなる追究」と記しており、教職を自分の仕事としてより現実的にとらえた上で教職就業力向上に挑戦する意欲も示している。

基礎実習･インターンシップの試行では、活動の記録をポートフォリオして自分の足跡を振り返るようにしたことから、学生自身が教職を目指している自分の課題をより鮮明に意識できるようになった。大学担当者にとっては、教育実習以外の多様な活動による学生の内面的変化を確認した上で、個人に応じた助言をするという貴重な機会を得られた。これらはプログラムの大きな成果であったと考える。今後の課題としては、より主体的に学ぶ姿勢を育成するために、学年を越えて学生同士が経験や情報を共有しながら経常的に学びあう機会の確保に向けて環境整備を充実していきたいと考えている。

7　卒業生支援の試行

保育職・教職にかかわる卒業生支援では、二つのことを試行した。一つは、保育職・教職で活躍している本学卒業生に、基礎実習・インターンシップの取組状況を報告し、後輩である学生の支援をしてもらうことである。もう一つは、卒業生自身が大学に気軽に帰ることができる場や研修できる機会を設けるなど、卒業生への支援について試行することである。

（1）卒業生の集い

平成 23 年 8 月 27 日「保育職・教職にかかわる卒業生の集い」を行い、実施担当者から本取組の概要を説明した。「母校がボランティアにまでに力を入れて、学生の就業力を育成していることに感激した」「できることがあれば支援したい」等、就業力育成支援プログラムについて理解を得ることができた。卒業生の集いについては、「現場でのいろいろな話ができてよかった」「皆さんのお話を聞いて元気が出ました」「初心に戻れる機会となりました」などのご意見をいただいた。その後、卒業生教職の集い・交流会を、保育園・幼稚園分科会と小学校分科会に分かれて行った。保育職・教職で活躍している本学卒業生に、学生による体験報告等を行った。「教職の集い・交流会」での卒業生の感想は次のようであった。

＜教職の集い・交流会要項（小学校）＞

資料：「教職の集い・交流会」での卒業生の感想

〇学生の取組についての感想

・学生の発表を聞いて真面目に取組んでいることに感動した。
・ボランティアでありながら担任の先生の教え、言葉かけ、行動など注意深く新鮮な目で観察し、さらに考察している姿に即戦力になりそうで頼もしく思った。
・学生の本気さが伝わってきた。
・ボランティアについて振返ることはたいへん大切です。とてもよい取組でした。
・私の時はなかった大学の取組、ぜひとも続けてほしい。
・教師志望の思いが伝わった発表でした。教職に就く前に学んでいることに感心しました。
・とてもうらやましい取組です。がんばってください。

〇卒業生のみなさんのために大学ができることについて

・教科ごとの勉強会を開いてほしい。
・お茶でも飲みながらの悩み相談会（情報交換の場）があればと思う。
・卒業生の交流をもっとたくさん開いてほしい。
・ＯＧ参加型講義があればうれしい。

卒業生教職の集い・交流会では、小学校 31 名、幼稚園・保育園 11 名が参加、学生の基礎実習・インターンシップの体験報告に耳を傾けてくださった。情報交換では、「学生の真

摯な取組に感動した」「現場での即戦力となりそうで頼もしく感じました」「ポートフォリオの振返はとてもよいことです」「2 年生から基礎実習で現場の体験ができるのはとてもよいことだ」など、参加者からは本取組についての感想をいただいた。

また、この機会に大学が卒業生にできることはないかと、お尋ねしたところ、「現場で役立つ研修会や講座」「現場での悩みを話し合う相談会」「時々意見を交換できる場」「今日のような交流会」等、大学が現場に還元できることをしてほしいとの意見が出ていた。
会後のアンケート調査からも同じことが書かれていたので、検討していくことにした。

（2）卒業生の合同カンファレンスへの参加

卒業して 5 年以内の保育職・教職に就いている卒業生に、基礎実習・インターンシップでの合同カンファレンスに 20 名参加してもらった。

平成 23 年 12 月 3 日（土）、10 時から小学校部会（520ND ）、幼稚園・保育園部会（640ND）に分かれて実施した。この合同カンファレンスは学生が中心になって計画した。

学生代表が集まって、合同カンファレンスの事前打合会を行った。そのときに作成した計画表を紹介する。（小学校部会の場合）

＜卒業生参加の合同カンファレンス進行案＞10：00～10：40

T　それでは、これから「卒業生参加の合同カンファレンス」の会を行います。

T　まず、先輩である卒業生の皆さんを紹介いたします。恐れ入りますが、前の方にお願いいたします。

T　それでは、こちらから、①現在勤務の学校名、②名前、③担任学年、専科の教科名などをお願いいたします。

T　ありがとうございました。お席の方にお願いいたします。

T　それでは、基礎実習、教育実習を体験して思っていること、感じていること等について、3 人の発表を聞いていただきます。

T　まず、U さんの体験発表をお願いいたします。

T　2 年生のＡくんとのかかわり体験についてでした。お話を整理してみますと、4 点でした。

①Ａくんと、どんなことでうまくいかなくなったのか
②自分のどこに問題があったのか
③どうすると元のようにかかわることができるようになったのか
④この事例で学んだことは何か

T　先輩へお尋ねします。「個（一人の子ども）と集団（クラスみんな）の両立で気を付けていることは何でしょうか。（2，3 人に聞く）

T　ありがとうございました。

T　次に、W さんの体験発表をお願いいたします。

T　学級担任の先生は指導するときには必ず意図をもってしているという発見をした体験についてでした。

T　Wさん、何年生の事例でしたか。

発表を整理してみますと、5点から考えておくことが大切だと思いました。

①クラスにはクラスの目標が必ず必要なのでしょうか（この学級では一日一善）

②目標を達成するために担任はどんなことをしたのでしょうか（例：帰りの会のよいことコーナー、声かけ、指示など）

③「よいことコーナー」で紹介する機会をいただいた結果、どんなことが学んだのでしょうか

④担任は、なぜ、一日一善を学級の目標にしたのか

⑤よいことコーナーでは問題点はなかったのか

T　それでは、担任をしている先輩にお聞きします。学級経営方針というか、クラスの目標というか、大事にしていることを一言でお話しください。（8、9人）

T　最後に、Yさんからの体験報告です。

T　6年生での発表についての体験報告です。発表を整理して見ますと、3点です。

①学年が上がると発表は減るのでしょうか。

②担任は、どんな工夫をして、発表しやすくしていたでしょうか。

③発表することがどうして大切なのでしょうか。

T　それでは、担任をしている先輩にお聞きします。話し合える子どもを育てるためにどんな取組をしておられますか。（発言していない先輩全員）

T　ありがとうございました。それでは、ここで全体会を終わりたいと思います。3人の発表者とお答えくださいました先輩にお礼の気持ちを込めて拍手をお願いいたします。

T　ここからは、先輩と一緒にグループに分かれて話し合いをしたいと思います。グループを決めています。掲示しますので、自分のグループを確認お願いします。

＊640ＮＤで、グループごとに分かれて、話し合いの場を作る

できあがったところで司会者が卒業生を案内する。

＜グループでの司会者進行表案＞　10：45～11：45

T　それでは、さっそくグループでの話し合いに入ります。

T　ここからは学生の皆さんから先輩に聞きたいことや、さきほどの発表に関連しての話し合い（Aくんのような子どもとのかかわりかた、学級目標、発表や話し合いのさせ方）でもいいですし、みんなで検討してほしいことでもいいです。では、学生の皆さんには自己紹介（自分の名前、学年）をお願いします。また、ここで聞きたいなと思う事例がありましたら一つ出してください。

T　では、こちらからどうぞ。（一巡したところで）

T　（多かった話題から取り上げるが、でなかったら、発表事例で話し合う）

では、まず、子どもたちへのかかわり方について話し合ってみたいと思います。先輩には後でお聞きしますが、どこでご発言いただいても結構ですのでよろしくお願いいたします。

T　Aくんのような子どもに出会ったとき、あなたならどうしますか。
　この事例で学んだことは何ですか。
T　では、先輩にまとめていただきます。
T　学級目標は必要だと思いますか
T　もしあなたが担任したら、どんな目標を掲げますか
T　では、先輩にまとめていただきます。
T　発表や話し合いはどうして大切だと思いますか
T　低学年ならどんなくふうをしますか。高学年ならどんなくふうをしますか
T　では、先輩にまとめていただきます。
ここで時間が来ました。先輩から私たちに一言メッセージをお願いします。
T　先輩、私たちのために貴重な時間を割いてくださいまして、ありがとうございました。
　（みんなでありがとうございました。）
＊司会者は、先輩を懇談会の部屋に案内する。
アンケート調査　　11：45〜12：00
T　それでは、学生の皆さんはアンケート調査があります。必ず提出してからお帰りください。
その後の卒業生との懇談会は次のような話合いになった。
　　卒業生との懇談会　　12：10〜14：00
（昼食を食べながら）　司会進行（大学担当者）
T　合同カンファレンスありがとうございました。
T　参加してみて、いかがでしたか。
　＊アンケート調査票配布。帰るまでに記入していただく。
T　現場ではいまどんな様子ですか
T　皆さんはどんなことに困っていますか　など
（食事が済んで）
T　大学が皆さんを支援できることはありますか（相談会、教材研究の会など）
T　どんな勉強会を希望していますか　（特別支援、国語、算数など）
T　いつなら、参加できますか（土曜日、日曜日、夏休みなど）
T　さっそく試みて見たいと思っていますが、1月や2月だといつ頃が参加できそうですか
（2月上旬など）
T　何をしますか（教科、特別支援、総合、道徳、体育実技など）
T　皆さんの中で運営委員などのお手伝いは可能ですか（受付、司会など）
T　例えば、お茶とかお菓子などがでるような会にしますか（会費は？）
T　テーマを決めて、誰かが提案するとか、話し合ってほしいことを事前に出し合うとかはどうでしょうか。
T　話し合ったことを整理。

例：2 月 25 日（土）10：00～12：00　640ND、2－1 セミナーなど

決めておくと便利。後日、卒業生に広報、連絡する。

詳細な計画を立てて臨んだので卒業生参加の合同カンファレンスは保幼部会も小学校部会も予定通りに実施することができた。小学校部会では卒業生の参加人数に合わせてグループに分かれて実施した。グループごとに、学生の代表者による体験報告や問題提起を行い、みんなで検討する中に卒業生がアドバイザーの形で参加するという合同カンファレンスであった。幼保部会では、6 名の卒業生であったので、全体会で行った。卒業生全員が何度も学生の質問に答えていた。

卒業生参加の合同カンファレンス（幼保部会）　卒業生を囲んで（小学校部会）

参加した学生からは、「身近な先輩教師からのアドバイスだったので、とってもわかりやすかった。」「先輩とは年が離れていないので、話しやすかった。」「がんばっている先輩に自信とやる気をいただきました」「少人数のグループでしたのでしっかり話すことができ、聞くこともできました」など好評だった。

参加した卒業生にも、今回の企画について尋ねると、「後輩もなかなかがんばっているなと思った」「後輩の一生懸命の様子にがんばらなくてはと強く思った」「アドバイスというよりしていることをそのままを話したが、話しながら後輩からやる気をもらった」「アドバイザーという立場になったのは初めてなのでとてもよい経験をした」など、卒業生自身もたいへん勉強になったことがわかった（図 32 参照）。

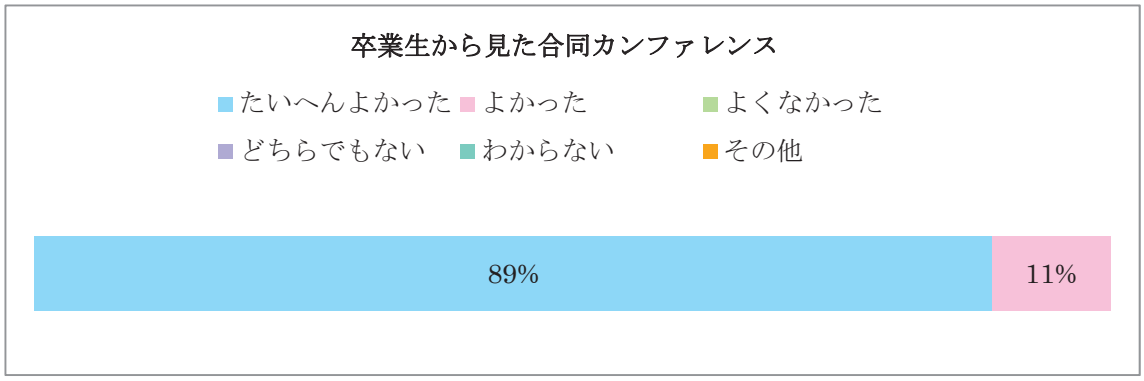


図 32：合同カンファレンスに参加した卒業生の評価

卒業生から、今回の合同カンファレンスについて、率直なご意見をお願いした。

＜合同カンファレンスについて（卒業生の感想）＞

・現場での悩みを学生と話し合うことができて明日からがんばろうという意欲をもらいました。
・学生の体験談や質問から、いろいろな視点で考えることができ、たいへん有意義な時間だった。
・学生の皆さんがたいへんよい気付きをしていたことと、自分なりに考えていたことが私自身とても勉強になりました。
・学生の皆さんの学ぼうとする意欲が伝わってきました。
・真剣に問題意識をもって取組んでいることにすごいなと思いました。今日のような合同カンファレンスに参加できて良かったと思いました。
・私たちの方が勉強になった話合いでした。何となく元気が出ました。
・こんな合同カンファレンスなら力が付くだろうなと思いました。

（３）卒業生の勉強会・相談会

平成 23 年 12 月 3 日午後から、卒業生と大学担当者との懇親会を行った。テーマは、8 月の卒業生の集いで出ていた要望である、「大学での勉強会や相談会の企画」である。懇親会には、20 人の卒業生が参加、幼稚園・保育園グループと小学校グループに分かれて懇親会をした。

小学校部会から、各教科についての講座や研修会を参加可能な土曜日あたりに行ってほしい。また、そのときに担任としての悩みとか研究授業の相談とか、何でも聞くことができる相談の場があればという意見が出た。幼稚園や保育園からも保育について実技講習等研修できる場がほしい。また、気軽に相談できる機会があると大学に来やすい等の意見が出た。

さっそく卒業生勉強会に向けて実施する計画を立てることにした。１回目は大学と卒業生が中心になって行い、本学の学生や附属幼稚園、附属小学校の先生方にも呼びかけることにした。第１回卒業生の勉強会・相談会を次のような日程で開催した。

＜卒業生の勉強会・相談会＞

1　日時　平成 24 年 2 月 25 日（土）10：00～15：00

午前の部　勉強会　　午後の部　相談会

2　場所　保幼部会　　640ＮＤ

小学校部会　2－1 セミナー

3　内容

〇保幼部会　参加者 26 名（卒業生 8 名、学生 14 名、大学担当者 4 名）

・勉強会・相談会：子ども・子育て新システムについて（大学担当者より）

卒業生の保育の実践、悩み、考えを出し合って、合同カンファレンで検討する

○小学校部会　参加者 25 名（卒業生 9 名、学生 12 名、大学担当者 4 名）

・勉強会：国語、算数の新指導要領の授業の仕方について（大学担当者より）

・相談会：特別支援教育について（大学担当者より）

子どもとのかかわりについて話し合う

4　その他

・参加者にはメールで連絡した

・午前の部、午後の部どちらかの参加でも可能にした

・学生や附属幼稚園・小学校の先生の希望者も参加できることにした

・今後、卒業生（現場での 5 年以内経験者対象）や希望者全員に研修会の内容を知らせる

・今後の研修会の運営について決めた（次回 24 年 4 月の予定：学級づくり等）

卒業生勉強会（保幼部会）

卒業生勉強会（小学校部会）

卒業生による学生への支援、卒業生への大学の支援の二つの試行を行った。卒業生による学生への支援は現職である卒業生にとっても勉強の機会となった。今後、学生の就業力育成に先輩の卒業生がかかわっていくという大きな道筋ができた。また、卒業生への大学の支援は、大学と卒業生とのパイプができただけでなく、卒業生が現場での教育について大学に相談できるという機会を持つことができるようになった。

今後、卒業生とよく相談して、地道な取組をしていきたいと考えている。

8　アンケート等調査の結果

アンケート等については次の（1）～（4）での調査を実施し、検討した。

（1）学生による到達度評価・アンケート調査

・平成 23 年 5 月に事前チェックカード（自己評価）、平成 24 年 1 月に事後振返カード（自己評価）を実施して、到達度評価を行った。

・学生の就業意識等について、平成 23 年 5 月事前アンケート調査と平成 24 年 1 月事後アンケート調査を実施した。

・ポートフォリオ、合同カンファレンスの効果についてアンケート調査を実施した。

・総合的人間力についての到達度評価を実施した。

・GP 支援員の個別カンファレンス、大学の事前事後指導、学校園の学外実施委員会等の効果についてアンケート調査を実施した。

（2）学校園の評価

・基礎実習・インターンシップ実施について学校園長にアンケート調査を実施した。

・平成 23 年 12 月から平成 24 年 1 月、学生の基礎実習・インターンシップの成果についてアンケート調査を実施した。

・平成 24 年 3 月、学校園長等から基礎実習・インターンシップの成果について意見を聞いた。

（3）大学の自己点検・自己評価

・基礎実習・インターンシップでの学生の到達度評価、アンケート調査結果、ポートフォリオ、合同カンファレンス、事前事後指導の取組等、①～⑮の各事業での取組について検討した。

・補足書に示した数値目標値、新規・既存の実学的専門教育の実施状況について検討した。

（4）一般参加者による評価

・キックオフミーティング、総括のためのセミナー、保育カンファレンスにおいて参加者にアンケート調査を実施した。

9　本学公式サイトにGP専用ページを開設

本学では就業力育成にかかわる大学の情報（人材養成の目的、授業科目・シラバス、入学者等にかかわる情報）を大学ホームページ、パンフレットなどに詳しく公表している。

本取組については公式サイトで公開するため平成22年度から準備を進めてきた。本学ホームページに本取組専用ページを作成し、保育職・教職のための体験型就業力育成の取組の概要をわかりやすく紹介した。また、キックオフミーティング、総括のためのセミナー等を開いて、本取組についての実践報告をしている。これらの様子についても専用ページやパンフレット等で公表している。

また、本取組の進捗状況がわかるように、教職就業力育成代表者委員会議事録、保幼小学修支援センター議事録等を全学向けに公開している。学生向けには、本取組の具体的内容「保育職・教職を目指すあなたに」「基礎実習・インターンシップの手引」「保幼小学修支援センターだより」（図33参照）などをマナバフォリオ上にのせて浸透を図っている。

保育職・教職をめざすあなたに

教職修業力育成支援ＧＰ事務局

いま、本学では、保育職・教職を目指すあなたのために、体験型就業力育成ＧＰの事業に取組んでいます。

（１）　保育職・教職に必要な体験型就業力は、子ども理解力、協働力、保護者支援力と考えています。

公立や私立の保育園、幼稚園、小学校でのボランティアを通して、保育職・教職に必要な実践的な能力を身につけていこうという取組です。

大学の学びの上に教育現場での実体験を取入れ、体験しないとなかなかわからない、身につかない、次の３つの力に重点を置いて取組んでいきます。

① 子ども理解力　　＊写真（子どもと遊ぶ）
- 子どもの実態を理解する力
- 子どもとのコミュニケーション力
- 子どものトラブルに対応できる力

② 協働力　　＊写真（学生が話し合う）
- 友だちや先生とのコミュニケーション力
- 保育職・教職の仕事に就いて理解する力

③ 保護者支援力　　*写真（託児）
- 保護者等の気持ちを理解する力
- 保護者等とコミュニケーションする力

図 33：保幼小学修支援センターだより

10　学修支援システムの試行的稼働と全学的実施

計画にしたがって、下記のような取組をしてきた。平成22年10月から23年3月までに、試行的稼働と全学的実施に取組んできた。

・平成22年10月　学習支援システムを検討するためのワーキンググループを設置
・平成22年11月　関係業者に提案依頼
・平成22年12月から、業者によるプレゼン実施、仕様書案策定、入札公告、入札、契約書締結
・平成23年3月　納入開始、監査・検収、請求書受理・支払
・平成23年5月　学生や教職員のIDパスワードを設定・配布。マナバフォリオ試験的運用開始、
ポートフォリオ・個別カンファレンス開始、掲示板による連絡開始
マイコースでの事前の自己評価、アンケート調査実施
・平成23年7月　保幼小学修支援センターだより、マイコミュニティ利用開始
・平成23年9月　全学履修登録実施
・平成23年10月　マナバフォリオに関するワーキンググループの設置、検討開始

本学ではweb履修登録に、マナバフォリオを導入している。23年10月学生の登録を実施した。基礎実習・インターンシップでは、マイコースでは基礎実習・インターンシップに分け、保育園、幼稚園、小学校別に登録している。ポートフォリオを記録に残したり、アンケートや到達度評価など実施したり、連絡版では大学からの連絡等を伝えたりしている。

また、コミュニティでは連携学校園ごとのコミュニティをつくり、今後学生同士、連携して取組んでいくことができるよう、その基礎作りをした。保幼小学修支援センターだよりや基礎実習・インターンシップQアンドA集などを載せて、取組の支援をした。

11　保幼小学修支援センター・実施本部事務局の取組

教職就業力育成プログラム実施本部事務局として、平成 22 年 11 月 22 日から平成 23 年 3 月 31 日までの期間、コーディネーター、事務補佐員を雇用、事務局としての仕事が開始された。平成 22 年度 3 月まで実施本部事務局は、学内会議の準備、キックオフミーティングをはじめ、就業力育成支援事業にかかわるすべての事務的な処理を行った。各事業推進の中心である教職就業力支援代表者委員会学内会議は、9 月 1 回、10 月 3 回、11 月 2 回、12 月 1 回、1 月 2 回、2 月 1 回、3 月 1 回の計 12 回開催され、諸問題について解決してきた。

保幼小学修支援センターは保育職・教職担当者で構成、平成 22 年 11 月 29 日に第 1 回会議を行い、本事業の推進にあたった。とくに、新規科目の保育・教育基礎実習、インターンシップの試行に力を入れて取組んだ。具体的な取組を担った保幼小学修支援センターは 11 月 1 回、12 月 2 回、1 月 3 回、2 月 3 回、3 月 2 回の計 11 回会議を行って試行を推進した。

平成 23 年度 4 月から、教職就業力育成プログラム実施本部と保幼小学修支援センター事務局として、新たにコーディネーター、事務補佐員を雇用、各事業の推進と本事業のすべての事務的処理を担当することになった。とくに、事務局として次のことに取組んだ。

①各事業の進捗状況が把握でき、各事業の新たな取組ができるよう、教職就業力育成代表者委員会学内会議を毎月定期的に開催した。平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月までに 15 回実施した。また、緊急な場合は関係者による会議を行い、円滑に推進できるように取組んできた。

②保幼小学修支援センターが各事業の具体的な実施・推進できるよう、毎週会議を定期的に実施した。平成 23 年 4 月から平成 24 年 3 月までに 32 回の会議を行って、具体的な取組を実施してきた。

③栄養教諭、家庭・福祉の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップの試行が推進できるよう、担当者と連携をとりながら推進した。

⑤19 連携学校園をはじめ、関係機関との窓口として、学校園での基礎実習・インターンシップが円滑に推進できるよう取組んだ。

⑥GP 支援員、大学担当者とは、絶えず報告・連絡・相談しながら連携して、学生へのカンファレンス、事前事後指導、連携学校園での学外実施委員会、わらべうた講習会、合同カンファレンス等に取組んできた。

第３章　　本取組の具体的な評価

１　子ども理解力・協働力・保護者支援力の達成度評価

（１）達成目標と確認指標

基礎実習での学生の自己評価は事前の自己評価を「事前チェックカード」で、事後の自己評価を「振返カード」で実施している。これらの学生の自己評価は、専門職の資質、子ども理解力、協働力、保護者支援力の観点から評価する。作成にあたっては保護者や現場の先生方からのアンケート調査やご意見等を参考にして、子ども理解力、協働力、保護者支援力の達成目標並びに達成目標の確認指標を設定した（図 34 参照）。

□子ども理解力

＜達成目標＞

①子どもの発達や心身の状況に応じて、子どもの様子や抱える課題等を理解することができる。

②子どもとのコミュニケーションを図っていくことができる。

③子ども同士のトラブルについて学校園の先生の指導のもとでかかわっていくことができる。

＜確認指標＞

（１）子どもの実態を理解する力

ア、子どもの遊びや保育・授業の様子について理解できる

○子どもの遊びや保育・授業の様子についていくらか知っている

●子どもの遊びや保育・授業の様子について理解できている

イ、学校園の一日の生活について理解できる

○学校園の一日の生活についていくらか知っている

●学校園の一日の生活について理解できている

ウ、子どもの人権や安全･健康についてどんな配慮が必要か理解できる

○子どもの人権や安全･健康について配慮が必要なことは知っている

●子どもの人権や安全･健康についてどんな配慮をしているか理解できている

エ、子どもの言動について理解できる

○子どもの言動についていくらか知っている

●子どもの言動について具体的に説明できる

（２）子どもとのコミュニケーション力

ア、子どもとのコミュニケーションをとるために意欲をもってかかわることができる

○子どもとのコミュニケーションをとるために意欲をもってかかわろうと考えている

●子どもとのコミュニケーションをとるために意欲をもってかかわっていくことができる

イ、子どもにあいさつしたり、声かけしたりすることができる

○子どもにあいさつしたり、声かけしたりしようと思っている

●子どもにあいさつしたり、声かけしたりすることができている
ウ、子どもと話をしたり話を聞いたりすることができる
○子どもと話をしたり話を聞いたりしようと思っている
●子どもと話をしたり話を聞いたりすることができている
エ、子どもと一緒に遊ぶことができる
○子どもと一緒に遊ぼうと思っている
●子どもと一緒に遊ぶことができている
オ、子どもをしかったり、ほめたりすることができる
○子どもをしかったり、ほめたりしようと思っている
●子どもをしかったり、ほめたりすることができる
（3）子どものトラブルに対応できる力
ア、子どものトラブルについて理解できる
○子どものトラブルについていくらか知っている
●子どものトラブルについて理解できている
イ、子どものトラブルについて学校園の先生に報告・連絡・相談することができる
○子どものトラブルについて学校園の先生に報告・連絡・相談することの大切さはわかっている
●子どものトラブルについて学校園の先生に報告・連絡・相談することができる
ウ、子どものトラブルについて学校園の先生の指導のもとでかかわることができる
○子どものトラブルについて学校園の先生に報告・連絡･相談しようと思っている
●子どものトラブルについて学校園の先生の指導のもとでかかわることができる
□協働力
＜達成目標＞
①学校園の先生等の仕事について理解することができる。
②学校園の先生等とのコミュニケーションを図っていくことができる。
＜確認指標＞
（1）学校園の先生等について理解する力
ア、学校園の先生等の様子が理解できる
○学校園の先生等の様子をいくらか知っている
●学校園の先生等の様子について具体的に説明できる
（2）学校園の先生等とのコミュニケーション力
ア、学生同士で情報交換をしたり、相談したりできる
○学生同士で情報交換をしたり、相談したりできる
●学生同士で体験について情報交換をしたり、相談したりできる
イ、学校園の先生にあいさつしたり、声かけしたりできる
○学校園の先生にあいさつしたり、声かけしたりしようと思っている

●学校園の先生にあいさつしたり、声かけしたりできる
ウ、学校園の先生に聞いたり、話をしたりすることができる
○学校園の先生に聞いたり、話をしたりしようと思っている
●学校園の先生に聞いたり、話をしたりすることができる
エ、学校園の先生の言われたことを実行することができる
○学校園の先生の言われたことは実行しようと思っている
●学校園の先生の言われたことを実行することができる
オ、学校園の先生と一緒に仕事をすることができる
○学校園の先生と一緒に仕事をしようと思っている
●学校園の先生と一緒に仕事をすることができる
□保護者支援力
＜達成目標＞
①保護者等の気持ちや活動の様子などが理解できる。
②保護者等とのコミュニケーションを図っていくことができる。
（1）保護者等を理解する力
＜確認指標＞
ア、保護者等と学校園との連携について理解できている
○保護者等と学校園との連携の大切さはわかっている
●保護者等と学校園との連携について理解できている
イ、保護者等の気持ちが理解できる
○保護者等に関心を持っている
●保護者等の気持ちが理解できる
ウ、保護者等の活動が理解できている
○保護者等の活動はいくらか知っている
●保護者等の活動について理解できている
（2）保護者等とのコミュニケーション力
ア、保護者等にあいさつすることができる
○機会があれば保護者等にあいさつしようと思っている
●機会があれば保護者等にあいさつすることができる
イ、保護者等と話をすることができる
○機会があれば保護者等と話をしようと思っている
●機会があれば保護者等と話をすることができる
ウ、保護者等の活動に参加できる
○機会があれば保護者等の活動に参加しようと思っている
●機会があれば保護者等の活動に参加できる

図 34：子ども理解力、協働力、保護者支援力の達成目標並びに達成目標の確認指標

（２）到達度評価の観点と事前チェックカード・振返カード

次に、達成目標・達成目標の確認指標をもとに、基礎実習・インターンシップでの到達度評価の観点を作成した（図 35 参照）。

基礎実習到達度評価の観点（事後の段階）

＜評価基準＞　Ａ：十分できる　Ｂ：できる　Ｃ：あまりできない　Ｄ：できない

＜評価指標＞　教育実習前○2，3 年　　教育実習後●4 年

Ａ　教職としての資質

①教師としてのふさわしい身だしなみや言動の大切さは理解できているか

○大切さを知っている　　●大切さについて説明できる

②自分はどんな先生をめざしているのか、自分の言葉で語ることができるか

○どんな先生がよいか話せる　　●自分の目指している先生が説明できる

③教職の魅力について語ることができるか

○魅力は感じている　　●魅力について説明できる

④学校園の子どもの一日について理解できているか

○子どもの一日について知っている　　●子どもの一日について説明できる

⑤子どもの安全や健康について学校園がどんなことに気をつけているか理解できているか

○配慮していることは知っている　　●配慮していることが説明できる

⑥子どもの人権についてどのような配慮をしているか理解できているか

○子どもの人権について知っている　　●子どもの人権について説明できる

Ｂ子ども理解力

（１）子どもの実態をつかむ力

①子どもの保育・学習の様子について理解できているか

○保育・学習の様子は知っている　　●保育・学習の様子は説明できる

②子どもの遊びや生活の様子に理解できているか

○遊びや生活の様子について知っている　●遊びや生活の様子について説明できる

③子どもの言動について理解できているか

○子どもの言動について知っている　　●子どもの言動について説明できる

（２）子どもとのコミュニケーション力

①子どもとのコミュニケーションに意欲をもってかかわることができているか

○かかわれると思う　　●かかわることができる

②子どもにあいさつしたり、声かけしたりできているか

○できると思う　　●できる

③子どもと話をしたり、話を聞いたりできているか

○できると思う　　●できる

④子どもと楽しく遊ぶことができているか

○できると思う　　●できる

（３）子どもに対応できる力
①子どもの問題行動にはどのようなものがあるか理解できているか
　○問題行動について知っている　　●問題行動について説明できる
Ｃ協働力
（１）学校園の先生等の仕事についての理解力
①学校園の先生等の仕事について理解できているか
　○仕事について知っている　　●仕事について説明できる
（２）学校園の先生等とのコミュニケーション力
①学生同士で情報交換をしたり相談したりできているか
　○大学生活や講義等でできる　　●実習等においてもできる
②学校園の先生にあいさつしたり声かけしたりできているか
　○あいさつができる　　●あいさつや声かけができる
③学校園の先生にたずねたり話したりすることができているか
　○しようと思っている　　●できる
④学校園の先生の仕事を手伝うことができているか
　○しようと思っている　　●できる
（３）協力し合う力
①学生同士で力を合わせて取り組んでいくことができているか
　○大学生活や講義等でできる　　●実習等においてもできる
②学校園の行事等に参加できているか
　○しようと思っている　　●できる
③学校園の先生に言われた仕事を快くすることができているか
　○しようと思っている　　●できる
Ｄ　保護者支援力
（１）保護者等を理解する力
①保護者と学校園との連携が大切なことを理解できているか
　○知っている　　●説明できる
②地域の方々と学校園との連携について理解できているか
　○知っている　　●説明できる
③保護者や地域の方々に関心をもっているか
　○関心をもっていると思う　　●関心をもっている
（２）保護者等とのコミュニケーション力
①機会があれば保護者等にあいさつできるか
　○しようと思う　　●できる
②機会があれば、保護者や地域の方々に接していくことができるか
　○できると思う　　●できる

③機会があれば、保護者や地域の方々の活動に参加できるか
○できると思う　　●できる

図 35：基礎実習到達度評価の観点（事後の段階）2・3 年次

次に、基礎実習・インターンシップでの到達度評価の観点をもとに基礎学習・インターンシップの事前チェックカードと事後振返カードを作成した（図 36 参照）。

基礎実習振返カード　2・3 年次

A：十分できる　B：できる　C：あまりできない　D：できない　E:わからない

・教師としてのふさわしい身だしなみや言動の大切さは理解していますか（　）
・自分はどんな先生をめざしているのか、自分の言葉で語ることができますか（　）
・教職の魅力について語ることができますか（　）
・学校園の子どもの一日について理解していますか（　）
・子どもの安全や健康について学校園がどんなことに気をつけているか理解していますか（　）
・子どもの人権についてどのような配慮をしているか理解していますか（　）
・子どもの保育・学習の様子について観察することができていますか（　）
・子どもの遊びや生活の様子について観察することができていますか（　）
・子どもの言動について理解できていますか（　）
・子どもとのコミュニケーションをとるために意欲をもってかかわることができますか（　）
・子どもにあいさつしたり、声かけしたりすることができますか（　）
・子どもと話をしたり、話を聞いたりすることができますか（　）
・子どもと楽しく遊ぶことができますか（　）
・子どもの問題行動にはどのようなものがあるか理解できていますか（　）
・実習生同士で実習等の取り組みについて話し合うことができますか
・実習生同士の情報交換や検討の機会などに参加できますか（　）
・実習生同士で力を合わせて実習等取組んでいくことができますか（　）
・学校園の先生の仕事について理解できていますか（　）
・学校園の先生に尋ねたり話したりできますか（　）
・学校園の先生の仕事を手伝うことができますか（　）
・学校園の行事等に参加できますか（　）
・学校園の先生に言われた仕事を快くすることができますか（　）
・保護者と学校園との連携が大切なことを理解できていますか（　）
・地域の方々と学校園との連携について理解できていますか（　）
・保護者や地域の方々に関心をもっていますか（　）
・機会があれば保護者や地域の方々に接していきたいと考えていますか（　）
・機会があれば保護者や地域の方々の活動に参加しようと考えていますか（　）

図 36：基礎実習振返カード（2・3 年次用）

そして、事前チェックカードは平成 23 年 5 月に、事後振返カードは平成 24 年 1 月に実

施した。これらの学生による自己評価をもとに、保育職・教職体験型就業力である「子ども理解力」、「協働力」「保護者支援力」はそれぞれの学生に実践的能力として向上してきているかどうかを判断することにした。

（３）学生の到達度評価の集計結果

ア　基礎実習での学生の到達度評価の状況

基礎実習は授業が多く、なかなか参加できない 2，3 年生が中心である。それでも空いている時間を工夫して多くの学生が積極的に参加した。2 年生の事前チェックカードと振返カード、3 年生の事前チェックカードと振返カードを保育園・幼稚園希望者と小学校希望者ごとに集計した結果は次の通りである（図 37―1～8 参照）。

○2 年生（保幼希望者）の場合

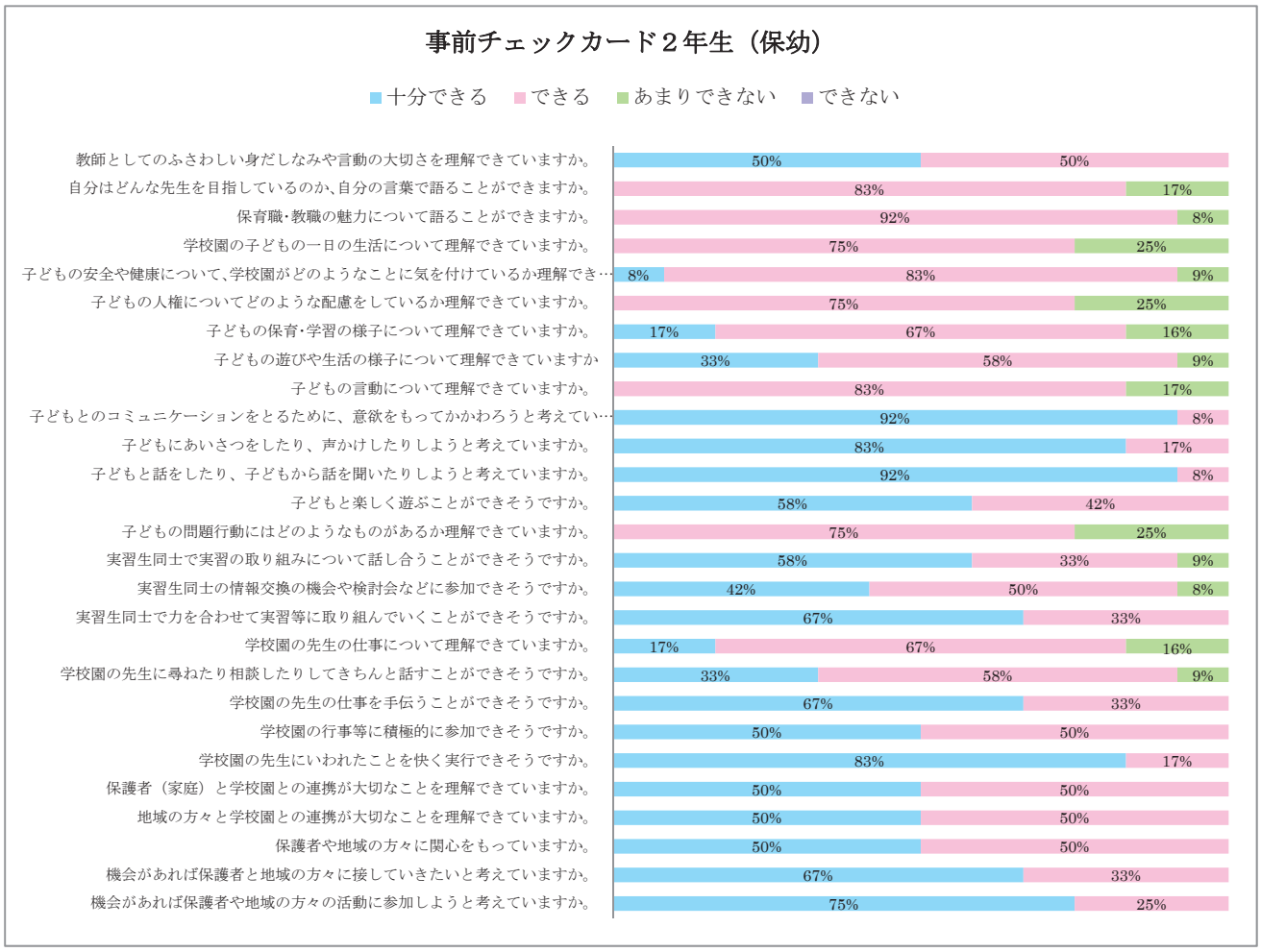


図 37－１：2 年生（保幼希望者）の事前チェックカード

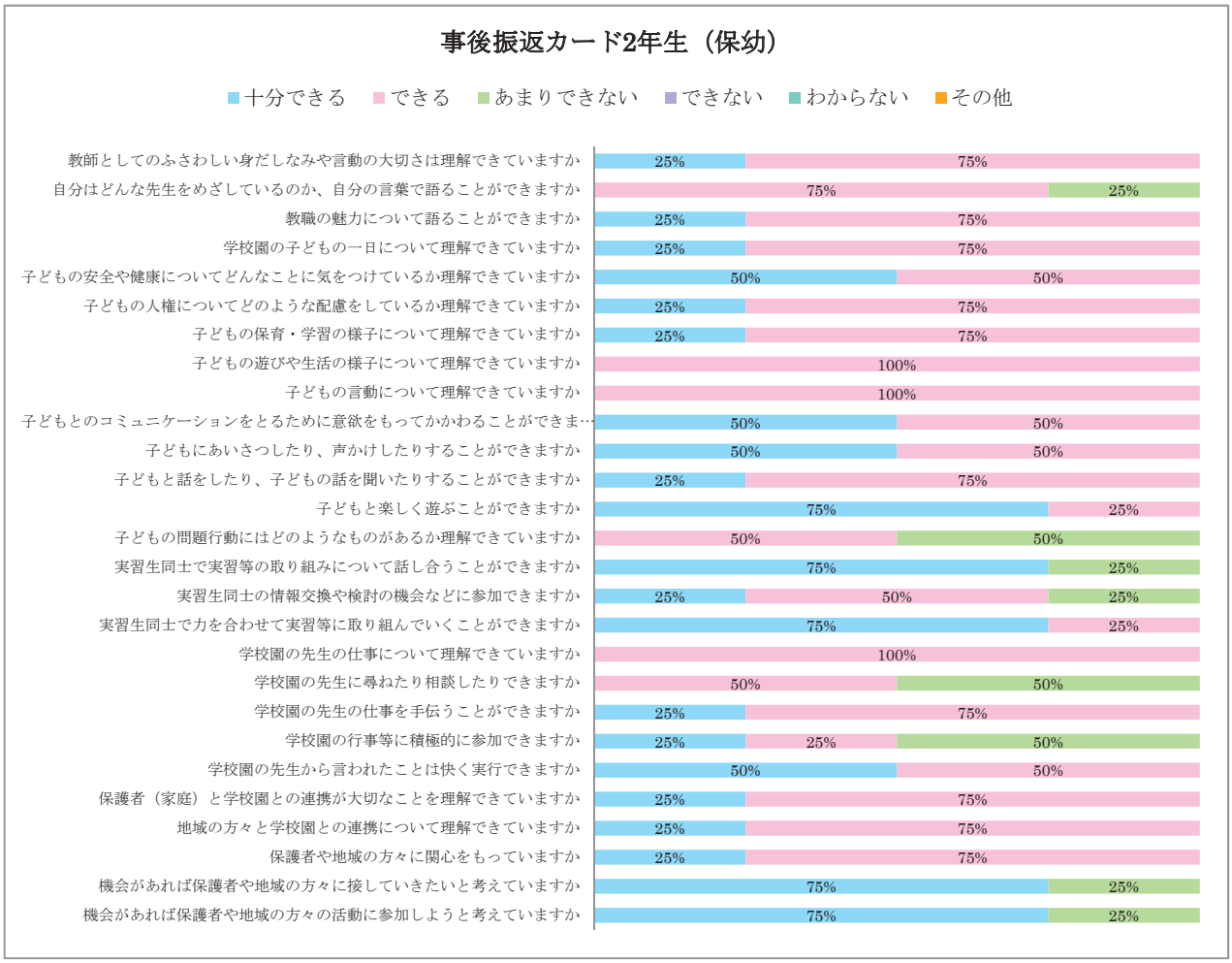


図 37－2：2 年生（保幼希望者）の振返カード

○2 年生（小学校希望者）の場合

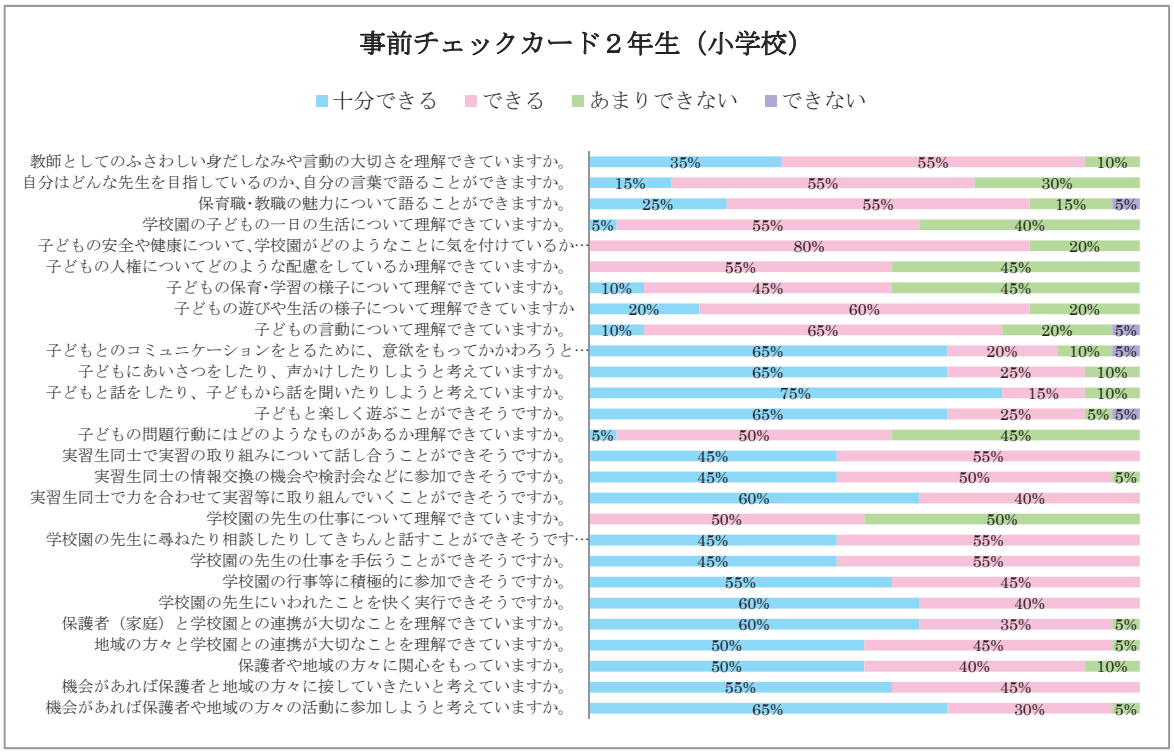


図 37－3：2 年生（小学校希望者）の事前チェックカード

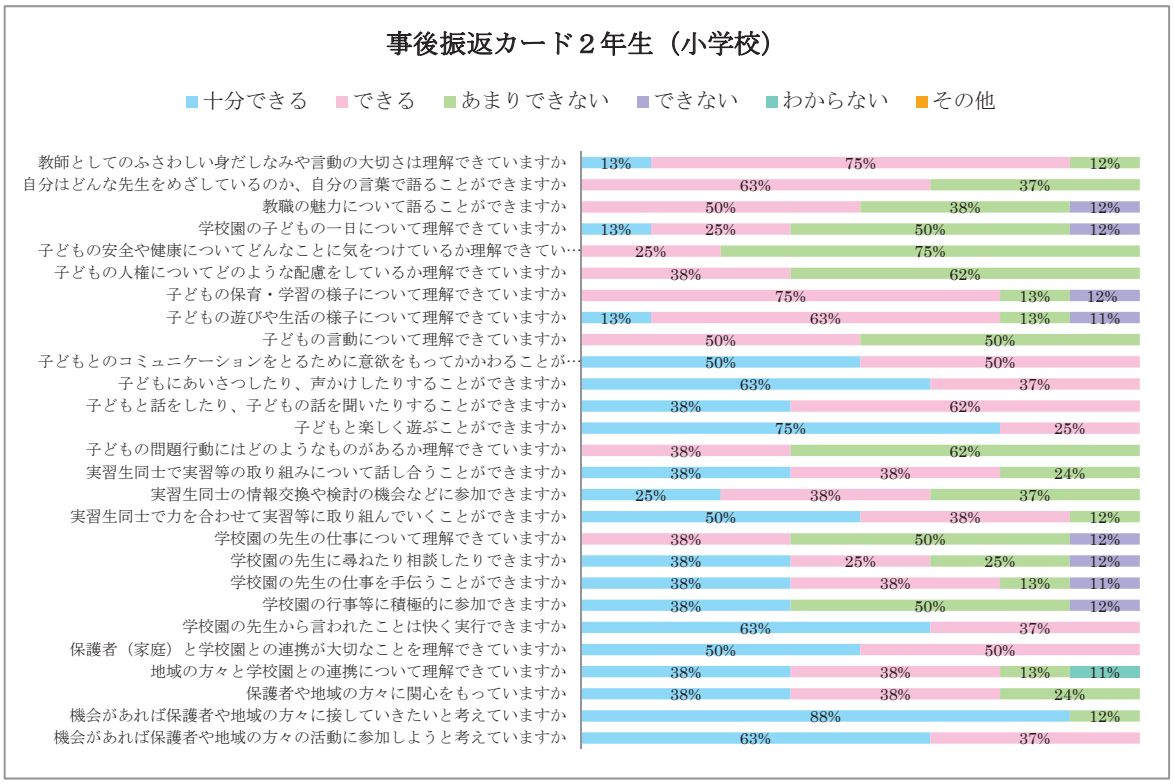


図 37－4：2 年生（小学校希望者）の振返カード

○3 年生（保幼希望者）の場合

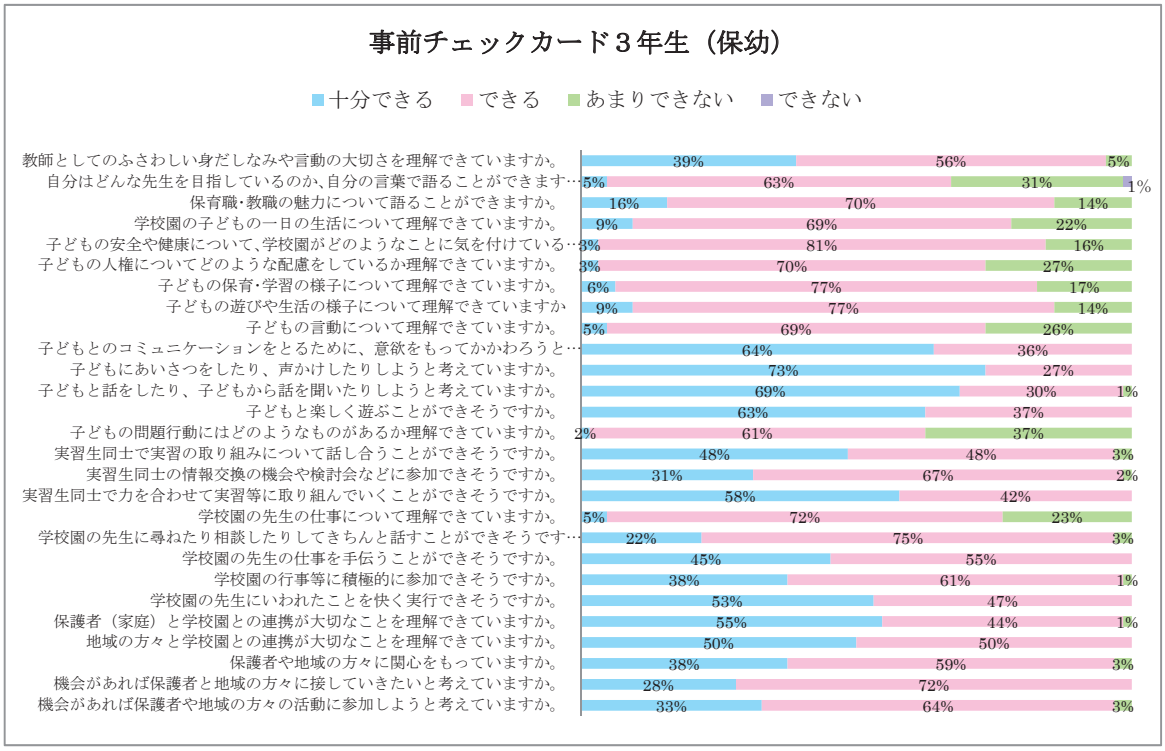


図 37－5：3 年生（保幼希望者）の事前チェックカード

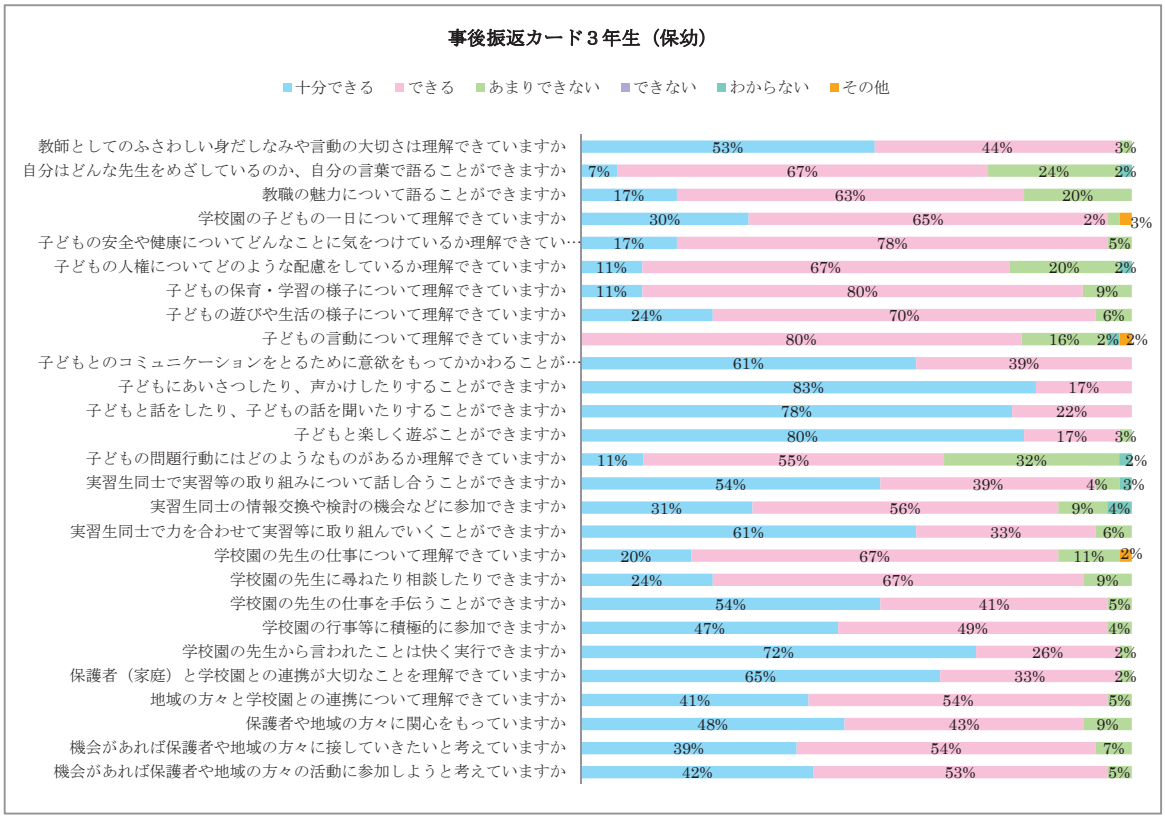


図 37－6：3 年生（保幼希望者）の振返カード

○3 年生（小学校希望者）の場合

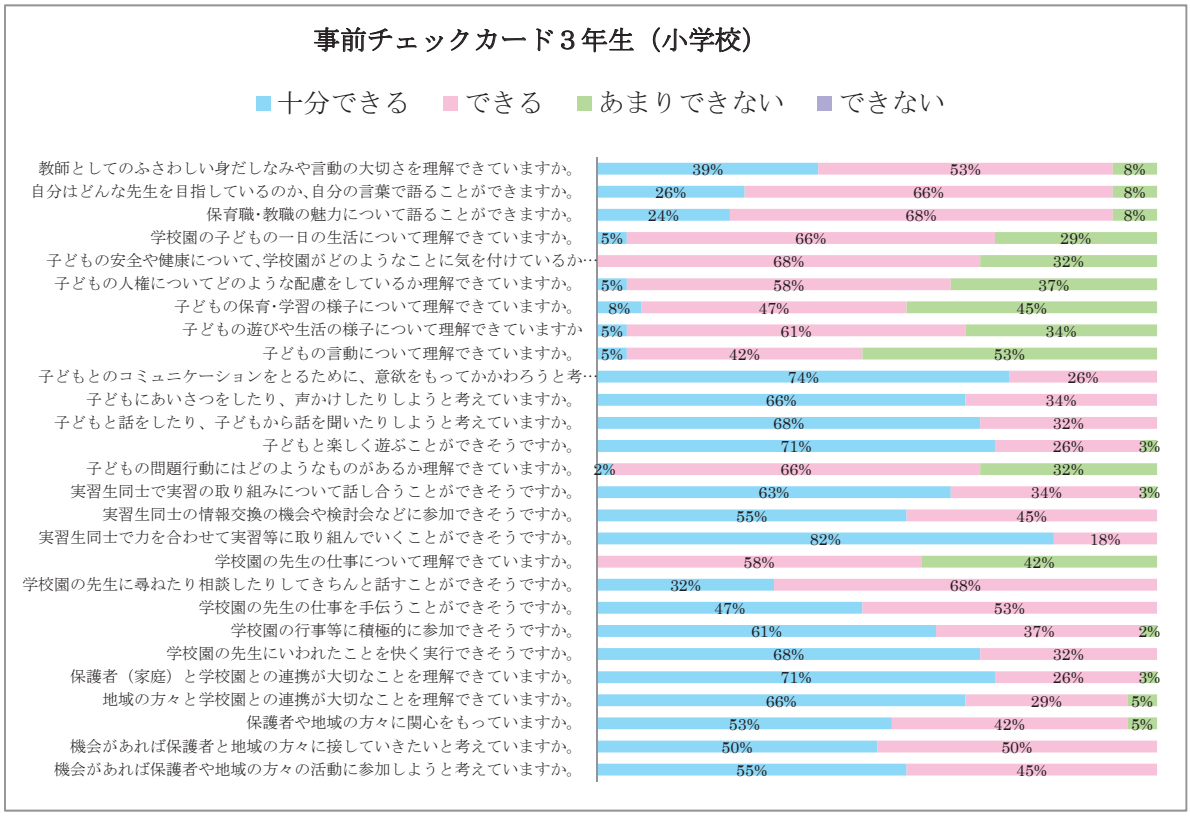


図 37－7：3 年生（小学校希望者）の事前チェックカード

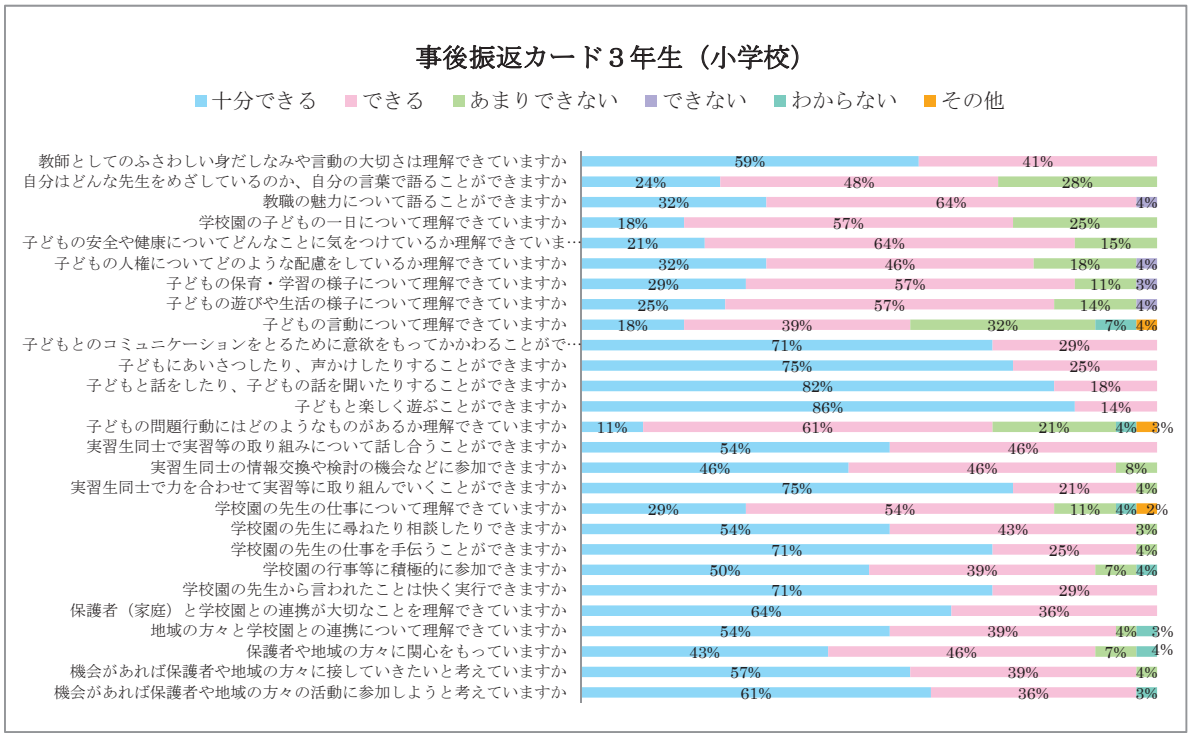


図 37－8：3 年生（小学校希望者）の振返カード

基礎実習において実体験した学生は、「子ども理解力」、「協働力」にかかわる実践的能力について少しずつ着実に身についてきていることがわかった。学校園の生活の中ではなかなかかかわる機会がない保護者等については、短時間の取組が多い基礎実習の中では実体験すること自体が難しいこともわかった。保護者とのかかわりの大切さはつかんできている。

イ　インターンシップでの学生の到達度評価の状況

4 年生の事前チェックカードと振返カードを保育園・幼稚園希望者と小学校希望者ごとに集計した結果は次の通りである（図 37―9～12 参照）。

○４年生（保幼希望者）の場合

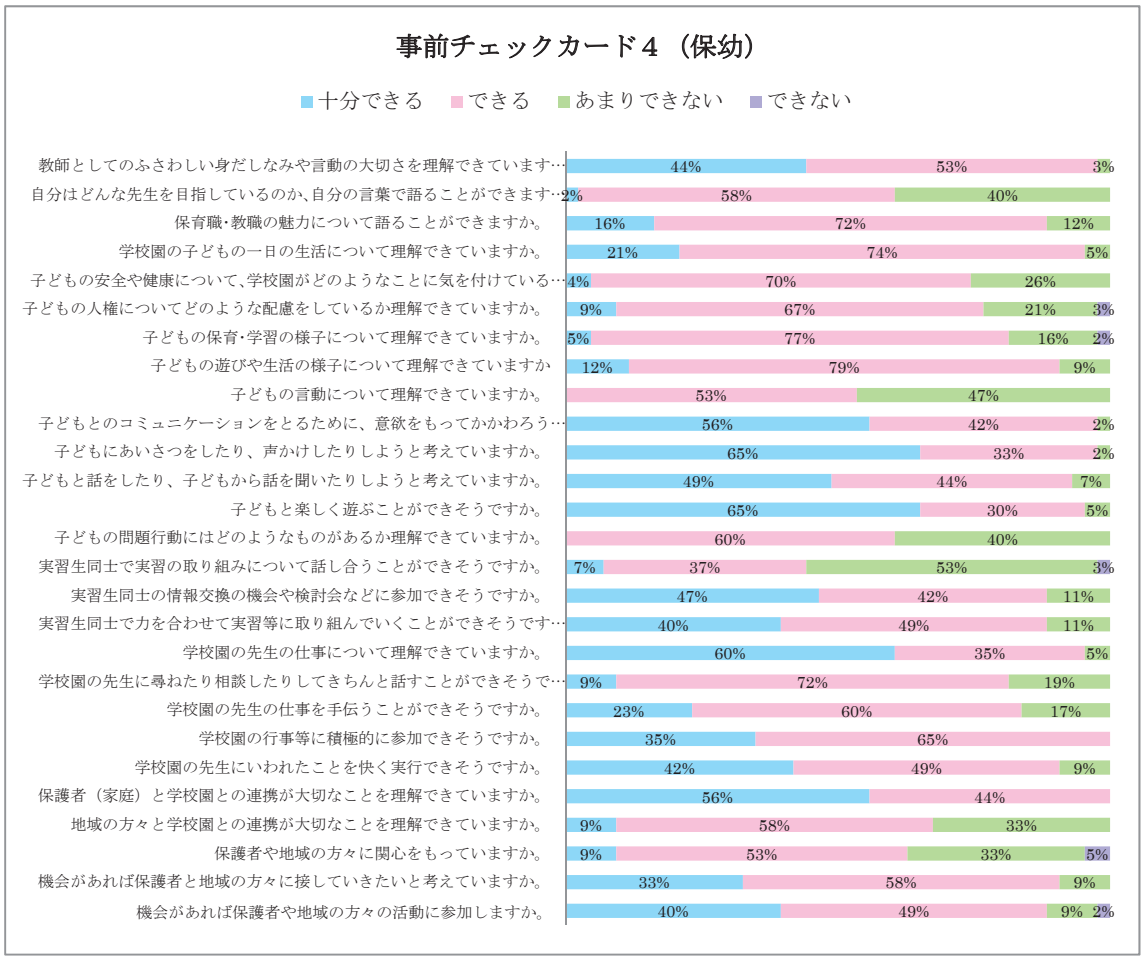


図 37－9：4 年生（保幼希望者）の事前チェックカード

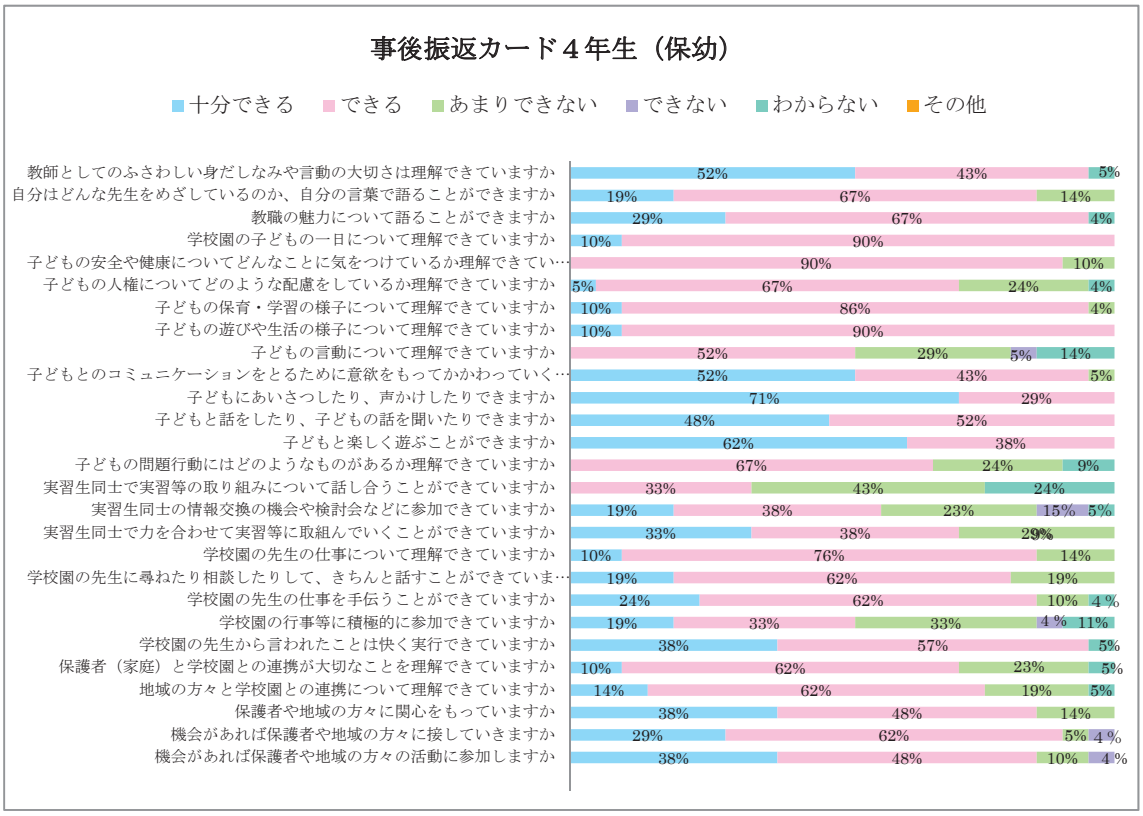


図 37－10：4 年生（保幼希望者）の振返カード

○４年生（小学校希望者）の場合

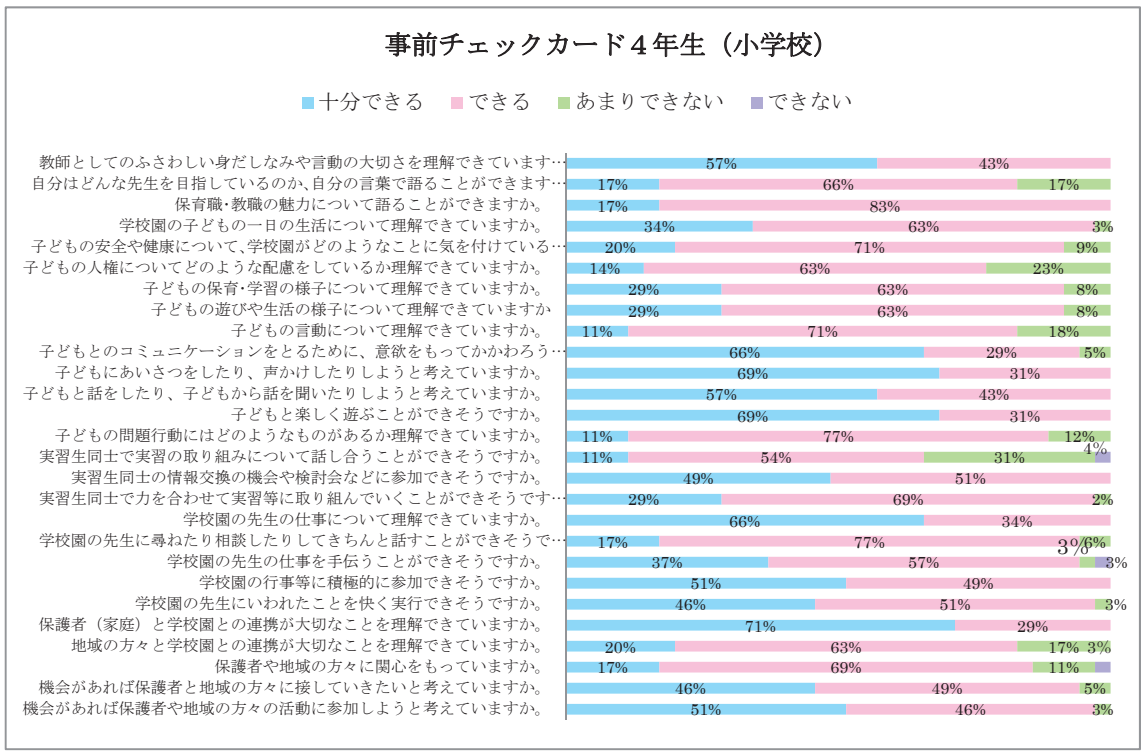


図３７―11：４年生（小学校希望者）の事前チェックカード

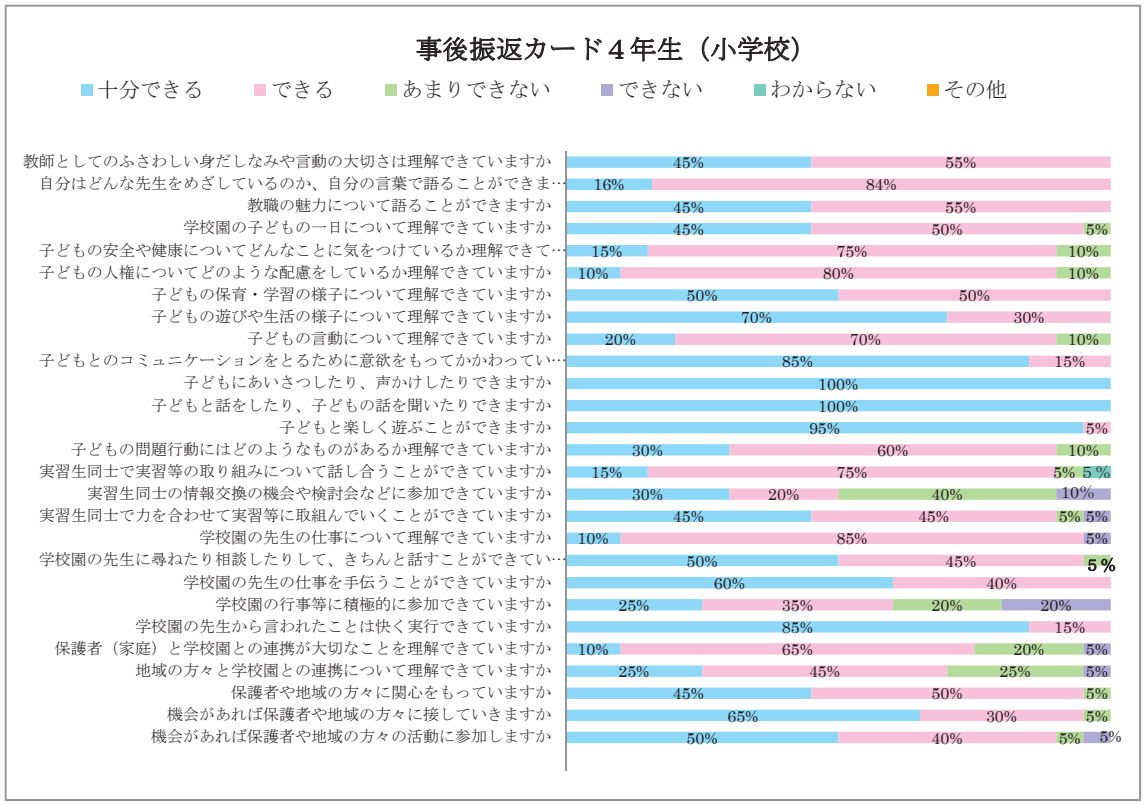


図 37－12：４年生（小学校希望者）の振返カード

学生の自己評価結果をみると、子ども理解力、協働力についてはかなり実体験できており、少しずつ自信も持ってきている。保護者等とのかかわりはインターンシップでも意図的にかかわらない限り実体験することは難しいので、行事、保護者会活動等に参加できるように連携学校園のご協力をいただいた。「保護者支援力」育成に有効な取組となった。先生や学生同士のかかわりについても実体験が増えていくにしたがって次第に身についてきている。

学生による事前チェックカードと事後振返カードから、インターンシップにおいても子ども理解力、協働力はそれぞれの学生に実践的能力として向上してきていることがわかった。保護者支援力については保護者等に直接かかわった学生は効果を上げているが、かかわりができなかった学生には今後の課題として残った。インターンシップにおいてもできるだけ学校行事や学校園と関係のある地域の行事、保護者会の行事に参加できるよう取組んでいきたい。

（4）保育職・教職のアンケート調査の集計結果

平成23年5月の事前アンケート調査と平成24年1月の事後アンケート調査をしている事項は、就業力の基盤となる保育職･教職をめざす気持ちや不安、実体験への意欲等の調査である。各学校園で実体験をする前とした後では就業への意欲や自信等がどのように変化したかをさぐる、次のような調査を行った。

保育職･教職をめざす気持ちや不安、実体験への意欲等の調査

基礎実習事後アンケート　　２・３年次

1　基礎実習をした校種｛保育園、幼稚園、小学校、特別支援学校、特別支援学級､その他（　　）｝を教えてください。（複数選択可）

2　将来、保育職･教職を目指す気持ちの度合いを教えてください。

ア、是非なりたい　　イ、できればなりたい　　ウ、迷っている

エ、あまりなりたくない　　オ、ならない　　カ、わからない

3　ウ・エ・オ・カを選んだ方、

迷ったり、なりたくなかったりする理由を教えてください。（　　）

4　保育職･教職をめざすにあたって、不安を感じることがありますか。

ア、たくさんある　　イ、ややある　　ウ、どちらともいえない

エ、あまりない　　オ、ない　　カ、わからない

どんな不安ですか。（　　）

5　基礎実習ではどんなボランティアをしましたか。（　　）

ア、保育・授業補助　　イ、環境構成・教材準備補助　　ウ、個別指導

エ、清掃・給食・弁当補助　　オ、事務処理補助　　カ、行事補助

キ、その他（　　）

6　ボランティアをしてみたい理由を教えてください。

（　　）

7　ボランティアをして、得るものがありましたか。

ア、たくさんあった　　イ、ややあった　　ウ、どちらともいえない

エ、あまりなかった　　オ、なかった　　カ、わからない

どんなことが得られましたか。（　　）

8　ボランテアをして困ったことがありましたか。

ア、たくさんあった　　イ、ややあった　　ウ、どちらともいえない

エ、あまりなかった　　オ、なかった　　カ、わからない

どんなことに困りましたか。（　　）

9　もっと体験しておきたかったと思うことがありますか。

ア、たくさんあった　　イ、ややあった　　ウ、どちらともいえない

エ、あまりなかった　　オ、なかった　　カ、わからない

どんな体験がしたかったですか。（　　）

学生の保育職・教職を目指す気持ちの度合調査をまとめてみると、次のような傾向を示した。

○保育職・教職を目指す気持ちの度合（保幼希望者 2 年生～4 年生）

保幼希望者の保育職・教職を目指す気持ちの度合を、平成 23 年 5 月（事前）と平成 24 年 1 月（事後）でアンケート調査を実施した。集計結果は図 38－1～2 である。

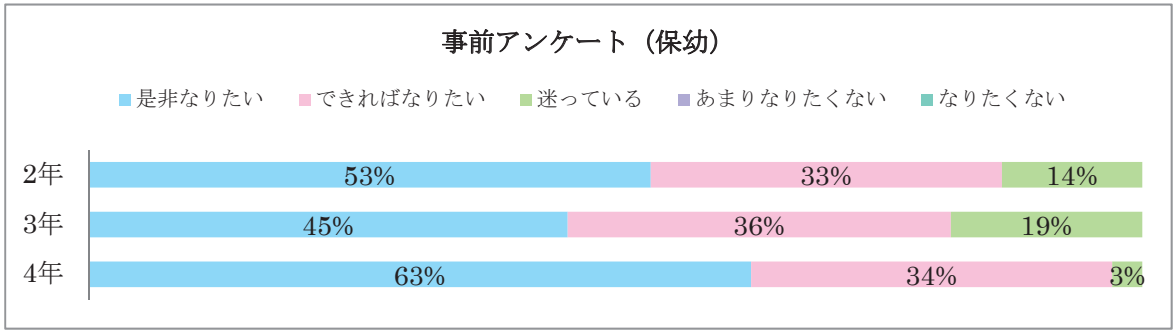


図 38-1：保育職・教職を目指す気持ちの度合

（事前アンケート 5 月実施：保幼希望者 2 年生から 4 年生）

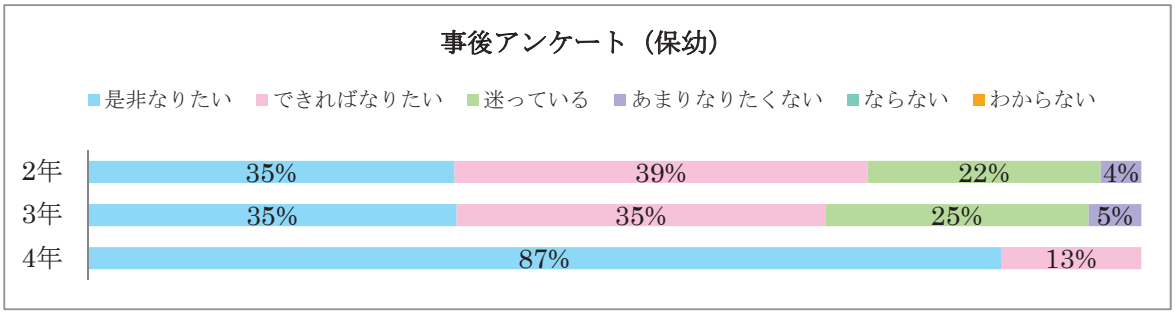


図 38－2：保育職・教職を目指す気持ちの度合

（事後アンケート 1 月実施：保幼希望者 2 年生から 4 年生）

保幼希望者の大きな傾向として、2 年生・3 年生は 5 月の事前調査で実施したときよりも事後調査のほうが「ぜひなりたい」「できればなりたい」という気持ちが低下してきて、「迷っている」という学生が増えてきていることである。

＜保幼希望者の迷っているわけ＞

- 基礎実習に行ってみて、「やはり自分の一番やりたい仕事はこれだ」と改めて確信したが、保育という仕事は自分に向いているのか迷っている。
- 自分自身が保育者に向いているか不安を感じる。
- 保育者に魅力を感じています。保育者以外で子どもにかかわる仕事についた方が子どもたちにとっても私にとってもよいのではと悩むところが 1 年前のように断言できないでいます。
- 自分が本当に保育者にふさわしいのか疑問に思うようになった。
- 基礎実習に行き、自分に何が向いているのかわからなくなった。
- 自分の本当になりたい職がわからなくなることがあります。
- 他にも自分に合う職業があるのではないかと思うので。
- 自分の性格に向いているのかどうか心配だから。
- 保育者になれる自信がないから。
- 保育者に魅力を感じつつも一般就職も視野に入れている。

基礎実習で子どもたちにかかわったり、先生の仕事の様子を見たり、実際に試みて見たりして、現場からの目線で自分の力を考える機会が増えていることが原因の一つと考えられる。

これらの結果から、自分の就きたい職種を考えたり、自分の実践的能力を見据えたりして悩みながら自分の進むべき道を決めていることがわかった。その意味では基礎実習やインターンシップの果たしている役割は大きかったと判断している。

〇保育職・教職を目指す気持ちの度合（小学校希望者 2 年生～4 年生）

小学校希望者の保育職・教職を目指す気持ちの度合を、平成 23 年 5 月（事前）と平成 24 年 1 月（事後）でアンケート調査を実施した。集計結果は図 38－3～4 である。

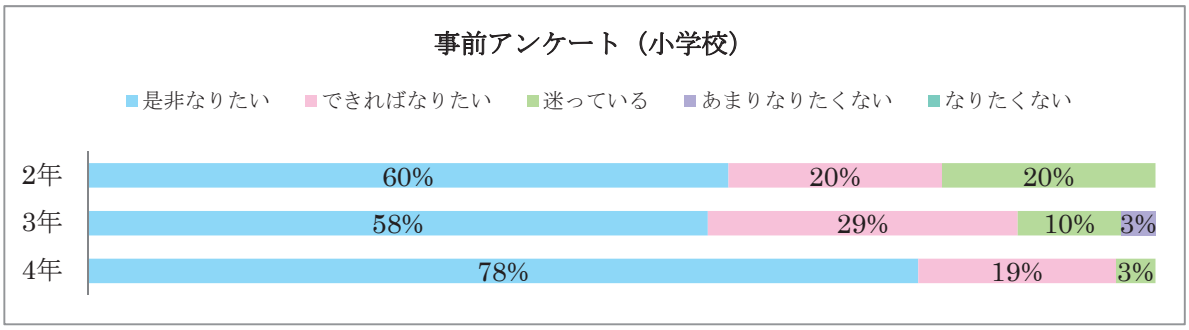


図 38－3：保育職・教職を目指す気持ちの度合
（事後アンケート 1 月実施：小学校希望者 2 年生から 4 年生）

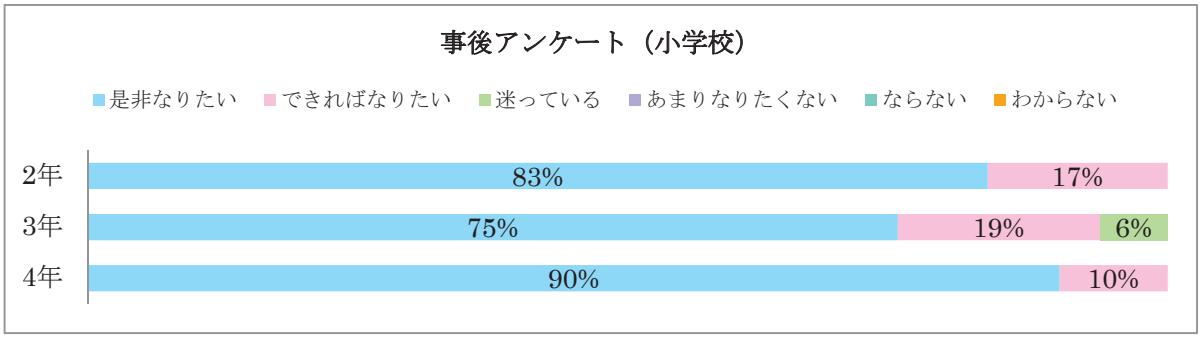


図 38－4：保育職・教職を目指す気持ちの度合
（事後アンケート 1 月実施：小学校希望者 2 年生から 4 年生）

保幼希望者と異なるところは「迷っている」と答えた学生が少ないことである。また、基礎実習後の事後調査では、ほとんどの学生が小学校教諭を目指していることがわかった。「迷っている」と答えた学生は少なかった。

これらの結果から、自分の就きたい職種を小学校教諭希望と決めると、小学校教諭を目指して取組んでいっていることがわかった。取組んでいく中で、自分の実践的能力を見据え、自分は向いているかどうか悩みながらも小学校教諭としての進むべき道に向かって努力しているともわかった。その意味では小学校希望者にとっても基礎実習やインターンシップの果たしている役割は大きいと判断している。

（5）ポートフォリオの取組結果

ほとんどの学生がポートフォリオは基礎実習・インターンシップに役立っていると答えている。

また、基礎実習・インターンシップに参加している学生のポートフォリオの取組（努力の様子）から､次のことがわかった。多くの学生のポートフォリオには、

・観察したこと、実際に体験したこと
・担任の先生の取組んでいる様子（子どもへのかかわり、担任の仕事、学校園の仕事等）
・自分が実際にチャレンジしたこと（保育･授業等）
・子どもたちの様子（遊び、生活、友だち関係、保育･授業､トラブル等）

などが書かれていた。また、

・自分がチャレンジしたことについて振返って検討している
・観察や参加したことについて、問題・課題意識をもっている
・担任の先生から学ぼうとしている
・担任の先生から言われたことをメモし、チャレンジしている
・めあて（課題）をもって取組んでいる
など、実体験したことを自分なりに振返っている記述も見られた。

学生からは、「体験しただけでは自分の力にならないから」、「自分の取組を振返って、次の取組に生かしたいから」、「先生になったとき役立つと思うから」、「合同カンファレンスがあるので、みんなと話し合うときに役立つから」、「GP 支援員の先生による個別のアドバイスや対面指導の機会があるから」などの返事が返ってきた。個別のアドバイスや合同カンファレンス等が学生の取組に有効に働いていることもわかった。

２　総合的人間力の達成度評価

（１）総合的人間力

総合的人間力の育成については児童学科でこれまでも到達度評価として調査してきている。今回は人間生活学部で実施した。保育職・教職のための体験型就業力は、実体験を通して子ども理解力、協働力、保護者支援力の３つの力の育成に取組んできたが、その基盤となる総合的人間力等は、保育職・教職として本学の授業や実習等を通して身についていくよう取組んできている。本学の母体である修道女会の創立者マザー・ジュリーは貧しい子どもたちに教育を与えることに尽くした。この修道会を母体とする本学は、開学当初から世界に開かれた視野を持ち、マザー・ジュリーの教育の国際的ネットワークを作って取組んでいる。リベラル･アーツカレッジである本学は４年間で真の国際人の育成をめざしている。さらに、本学のキリスト教精神に基づき、伝統的に愛と奉仕の精神が大切にされ、学生たちによって、海外ボランティアや地域ボランティア等が実践されている。創立以来、地域に支えられながら地域に根ざした大学として大きな役割を果たしてきた。総合的人間力を身につけた有為な人材を輩出し、ボランティア活動や教育研究活動などさまざまな地域貢献に引続き取組んでいる。本学の教育は、キリスト教的人間理解を全体的基礎として、その上に広い視野と豊かな教養を身につける全学共通科目と基礎科目と専攻科目からなる学科科目を学んでいくようにしている。（60 周年記念誌Ｐ30 より）

本学でのさまざまな講義、演習などの授業は、自分が判断するために､真・善・美という確かな視座をもって､決断に到達するための方法を学ぶ、リベラル･エデュケーションを大切にしている。総合的人間力は、

・主体性をもった行動ができる
・幅広い視野をもつ
・的確な判断ができる
・円滑な人間関係が築かれている
・筋道を立てて考えられる
・相手の立場に立って考えられる

など広い視野と豊かな教養を身につけた人間として必要な力と考えている。

（2）総合的人間力の到達度評価の集計結果

ア　人間生活学部の総合的人間力の評価

本取組では、この到達度評価を生かして総合的人間力の育成状況を判断している。平成24年1月実施の調査結果は、次のようであった。

＜＊図の見方：低いほど達成度が高いことを示している＞

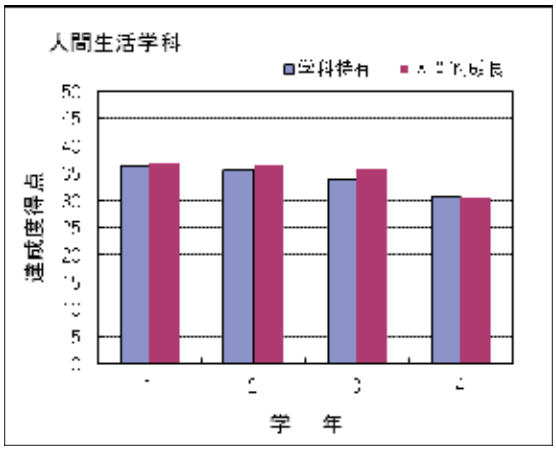


図 39－1：人間生活学科の総合的人間力

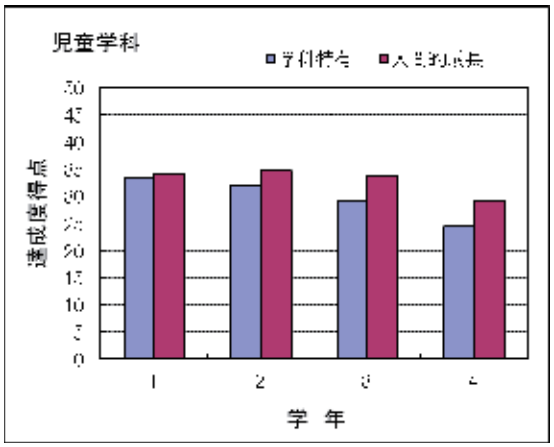


図 39－2：児童学科の総合的人間力

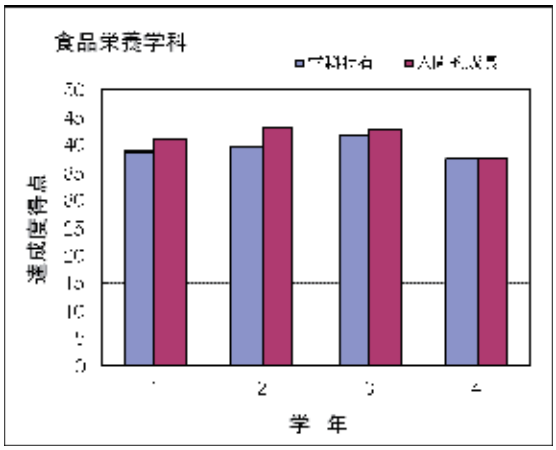


図 39－3：食品栄養学科の総合的人間力

総合的人間力の到達度評価（図 39―1～3）から、本学人間生活学部（人間生活学科、食品栄養学科、児童学科）の学生は総合的人間力を身につけて卒業していると判断している。

イ　基礎実習・インターンシップの実施効果

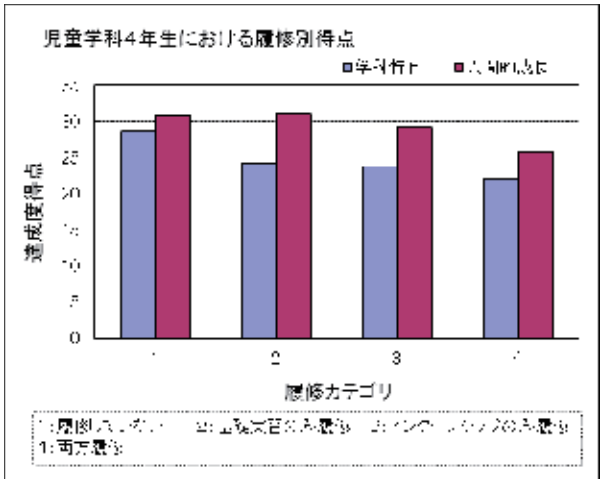


図 39－4：総合的人間力の到達度評価

また、総合的人間力育成に際して、基礎実習・インターンシップでの実施による効果もでていると判断している（39－4 参照）。

以上、事前チェックカード・振返カード（自己評価）集計の結果、保育職・教職のアンケート調査の結果、ポートフォリオの内容、総合的人間力の到達度評価等から、子ども理解力、協働力、保護者支援力の実践的能力の向上、就業意識等の高まり、総合的人間力の育成等については当初の目的はほぼ達成できているものと判断している。

3　自己点検・自己評価

（1）各事業の自己点検・自己評価の結果

各事業の達成目標に照らしながら、教職就業力育成代表者委員会で毎月各事業の進捗状況を検証してきた。平成24年1月にこれまでの各事業（平成22年度10事業、平成23年度15事業）について、実施報告書等をもとに自己点検・自己評価を実施した。

＜教職就業力育成プログラム実施についての自己点検・自己評価＞

達成目標、確認指標、評価の観点、評価の方法について考え、それに基づいて、担当者による、自己点検・自己評価を実施した。

確認指標に基づく評価の観点から自己点検・自己評価を実施し、設定した目標（達成目標）が達成できているかどうかを検証した。評価の方法は＊印で示す。自己点検・自己評価の尺度はA～Eで行う。なお、C、D、Eについてはそのわけを書くようにした。

Aそう思う	Bややそう思う	Cあまり思わない
Dそう思わない	Eわからない	

◎達成目標1　保育職・教職を目指す学生の資質の向上を図り、実体験に基づく就業力（総合的人間力、子ども理解力、協働力、保護者支援力）を向上させるために、各事業（平成22年度10事業、平成23年度15事業）を実施計画通り実行することができる

○達成目標の確認指標

(1) 岡山市、倉敷市内の学校園、附属小学校・幼稚園と連携して、体験型の授業（基礎実習・インターンシップ）が実施できている。

(2) 実体験したことをポートフォリオに残し、カンファレンスを行って、学生自らが保育職・教職への適性・資質を省察し、現場目線から見つめ直す機会になっている。

(3) 教職就業力育成代表者委員会、教職就業力育成プログラム実施本部、保幼小学修支援センター等サポートシステムが有効に機能している。

□評価の観点と評価方法（＊●は評価資料）

◇確認指標の（1）（2）：連携教育システムは有効に機能しているか

①体験型の授業（基礎実習、インターンシップ）を開講し、実施できているか

＜22年度事業⑤⑥23年度事業③④＞　　＊実施報告書　●学生の評価

②岡山市内・倉敷市内の学校園、附属小学校・幼稚園と連携して実施できているか

＜22年度事業⑤⑥23年度事業①②③④＞

＊学校園での基礎実習・インターンシップ実施報告書、連携学校園実施計画表、

●学生の評価

③学校園において学外実施委員会（合同カンファレンス）を実施して、ボランティアの質の向上を図っているか

＜22 年度事業⑤⑥⑦23 年度事業②⑤⑥⑫＞

＊学校園長の評価、学校園教員による評価、実施報告書、●学生の評価、

④ボランティアでの学びをポートフォリオに記録して、基礎実習・インターンシップに役立てているか

＜22 年度事業⑤⑥⑦23 年度事業②⑤⑥＞

＊学生のポートフォリオ、GP 支援員の評価　●学生の評価、

⑤大学の事前事後指導は、学生が自分の実践を振返るための重要な機会となっているか

＜22 年度事業⑤⑥⑦23 年度事業③④⑤⑥⑫＞

＊実施報告書、大学担当者の評価　●学生の評価

⑥保護者会や学校園行事の補助等、ボランティア活動の場や内容を拡大できているか

＜23 年度事業③④⑤⑥⑧＞　＊実施報告書、保護者による評価、●学生の評価、

⑦学生の企画による体験型発表会を実施することができているか

＜23 年度事業③④⑤⑥＞　＊実施報告書、大学担当者の評価、●学生の評価

⑧保育職・教職の卒業生支援及びカンファレンスの支援を試行しているか

＜23 年度事業③④⑤⑥⑪＞　＊実施報告書、●卒業生の評価

⑨栄養教諭、家庭・福祉の教職を目指す学生の基礎実習、インターンシップ並びにカンファレンスを試行しているか

＜23 年度事業⑩＞　＊実施報告書、●学生の記録

⑩本プログラムの内容、進捗状況、成果報告などを本学公式サイトで学内外に随時公開しているか

＜22 年度事業⑧＞　＊実施報告書、●公式サイト

⑪学生の活動状況をチェックし、次年度の活動に生かすために学生のアンケート調査を実施しているか

＜22 年度⑩23 年度事業⑫⑬⑭⑮＞

＊連携学校園アンケート調査、●学生のアンケート調査

⑫平成 22 年・23 年度事業の「総括のためのセミナー」を開催し、学内外へプログラム実施の意志と説明責任を果たしているか

＜23 年度事業⑮＞　＊実施報告書、参加者による評価

◇確認指標の（3）：サポートシステムは有効に機能しているか

①教職就業力育成代表者委員会は、本取組の方向の策定、実施状況の検証、本取組の情報公開、成果の自己点検・自己評価、フォーラム等の企画等を行っているか

＜22 年度事業①②23 年度事業①⑮＞　＊自己点検・自己評価、実施報告書

②教職就業力育成プログラム実施本部は、連携教育システムの運営やコーディネートをしたり、学生の履修・実習や就業に関する個別相談等を行なったりしているか

＜22 年度事業①②23 年度事業①⑮＞　＊自己点検・自己評価、実施報告書

③保幼小学修支援センターはプログラム実施のための事務局機能を果たしているか

＜22 年度①②23 年度事業①②＞　＊自己点検・自己評価、議事録、実施報告書

④ＧＰ支援員は、ポートフォリオやカンファレンスにおいて適切な指導・助言等を行っているか

＜22 年度⑦⑨23 年度事業②⑤⑥＞　＊実施報告書、●学生の評価

⑤学務部と協働して学生をサポートできているか

＜22 年度①②23 年度事業①②＞　＊自己点検・自己評価、実施報告書

⑥教育委員会、コンソーシアム岡山等と連携して行っているか

＜22 年度事業①②23 年度事業①⑮＞　＊自己点検・自己評価

⑦学習支援システムの試行的稼働と第 2 期から全学的な実施を行い、成果を全学に拡大させているか

＜22 年度事業③⑨23 年度⑦＞　＊自己点検・自己評価、実施報告書

⑧マナバフォリオを活用してサポートするシステムを整えているか

＜22 年度事業⑨23 年度③④⑤⑥⑦＞
＊実施報告書

◎達成目標 2　<u>各事業を推進して、体験型就業力（総合的人間力、子ども理解力、協働力、保護者支援力）を向上させることができる</u>

○達成目標の確認指標

（1）連携学校園における基礎実習・インターンシップで保育職・教職に特化した就業力（子ども理解力、協働力､保護者支援力）を向上させている。

（2）人間生活学科､食品栄養学科の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップを試行して、実践的能力を向上させている。

□評価の観点と評価方法

◇確認指標の（1）：連携学校園における基礎実習・インターンシップで保育職・教職に

特化した就業力（総合的人間力、子ども理解力、協働力、保護者支援力）を向上させているか。

①連携学校園における基礎実習・インターンシップの実施で保育職・教職に特化した就業力（総合的人間力、子ども理解力、協働力、保護者支援力）を向上させているか

＜22年度事業⑤⑥⑦23年度②③④⑤⑥＞

＊ポートフォリオの内容、合同カンファレンス実施報告書、連携学校園のアンケート調査、●学生の達成度評価

②学生自らが保育職・教職への適性・資質を省みる機会になっているか

＜22年度事業⑤⑥⑦23年度③④⑤⑥⑫＞

＊ポートフォリオの内容検証、合同カンファレンス実施報告書

●学生のアンケート調査

③本取組が学生自らの現場目線から見つめ直す機会となっているか

＜23年度事業③④⑤⑥＞　＊ポートフォリオの内容、合同カンファレンス実施報告書、●学生のアンケート調査

◇確認指標の（2）：人間生活学科、食品栄養学科の教職を目指す学生の基礎実習・インターンシップを試行して、実践的能力を向上させることができているか。

①人間生活学科、食品栄養学科の教職を目指す学生が大学での学びの成果を体験する場を得て、実践的能力を高めているか

＜23年度事業⑩＞　＊実施報告書、●学生の評価

◎達成目標３　本取組について自己点検・自己評価を行い、教職就業力育成プログラムを目的にそって実施することができる（PDCAサイクルが機能している）

○達成目標の確認指標

（１）本取組について、学生の達成度評価や意識の高まり等のアンケート調査などで自己点検・自己評価を実施して、基礎実習・インターンシップ等各事業の推進にいかしている。

□評価の観点と評価方法

◇確認指標の（1）：自己点検・評価を実施して、基礎実習・インターンシップ等各事業の推進にいかしているか

①教職就業力（総合的人間力・子ども理解力、協働力、保護者支援力）について達成度評価を実施しているか

＜22年度事業⑩23年度⑫⑬⑭⑮＞　＊●学生の達成度評価、●学生のアンケート調査

②学生の保育職・教職への意識の高まりを調査しているか

＜22 年度事業⑩23 年度⑫⑬⑭⑮＞　＊●学生のアンケート調査

③合同カンファレンスにおいて、学びの高まりを把握しているか

＜22 年度事業⑦⑩23 年度⑤⑥⑫⑬＞

＊ポートフォリオ内容、合同カンファレンス実施報告書、●学生のアンケート調査

④ポートフォリオの記述から、学びの高まりを把握しているか

＜22 年度事業⑦23 年度⑤⑥⑫＞

＊ポートフォリオ内容、●学生のアンケート調査

⑤連携学校園での学びの高まりを把握しているか

＜申請書 P11 ＞　＊連携学校園の実施報告書、連携学校園のアンケート調査

⑥キャリアサポートセンターと連携して、保育職・教職就業力育成に取組んでいるか

＜申請書 P7＞　＊キャリアサポートセンター資料

⑦学生の意識の変化や満足度、連携学校園の評価や要望等のアンケート調査を実施しているか

＜22 年度事業⑩23 年度⑫⑬⑭⑮＞

＊連携学校園のアンケート調査、●学生のアンケート評価

⑧総括のためのセミナーを開催して、本プログラムにおける内外からの評価を行い、継続的な改善活動の推進を図っているか

＜23 年度⑮＞　＊セミナー資料、参加者のアンケート調査､実施報告書

⑨高大連携､大学間連携について取組んでいるか

＜申請書 P12＞　＊実施報告書

⑩セミナー等において、参加者による本取組の成果や意義について調査しているか

＜申請書Ｐ11＞　＊参加者のアンケート調査

⑪全国規模のシンポジウム、フォーラム、セミナー等との比較による、本取組の内容の成果や意義について探っているか

＜22 年度事業④23 年度⑨＞

＊訪問研修先資料、実施報告書

達成目標 4　<u>教職就業力育成プログラムは策定通りの実効性をもっている</u>

○達成目標 4 の確認指標

（1）就業して役立つ実学的専門教育推進に取組んでいる。

（2）就業力の達成目標（定量的指標の達成目標値）をクリアしている。

□評価の観点と評価方法

◇確認指標の（1）（2）：教職就業力育成プログラムが策定通りの実効性をもっているか

①実学的専門教育の取組はできているか ・選択科目：保育･教育基礎実習（新規科目） ・選択科目：保育･教育インターンシップ（新規科目） ・選択科目：人材育成論（新規科目・社会教育主事選択必修科目） ・選択科目：キリスト教学ⅩⅥ（新規科目） ・必修科目：総合演習Ⅱ（既存科目） ・必修科目：保育実習ⅠⅡⅢ（既存科目） ・必修科目：初等教育実習 ab（既存科目）

＜22 年度補足書Ｐ1、23 年度補足書Ｐ1～3 ＞

＊実施報告書

②就業力の達成目標（定量的指標の達成目標値）をクリアしているか

大学の各担当者による自己点検・自己評価を行った結果、次のような評価となった。

1「本取組の方針が実施計画通りに実行されているか」では、平成 22 年度 10 事業、平成 23 年度 15 事業について、確認指標（1）（2）の「連携教育システムは有効に機能しているか」、確認指標（3）の「サポートシステムは有効に機能しているか」の 2 点から自己点検・自己評価した。連携教育システムについては 12 評価項目、サポートシステムについては８評価項目を自己点検・自己評価した。

2「その成果は当初の目的に適ったものであるか」では、体験型就業力の向上について、4 評価項目を自己点検・自己評価をした。

3「PDCA サイクルが機能しているか」では、11 評価項目について自己点検・自己評価をした。

4「教職就業力プログラムが策定通りの実効性をもっているか」では 2 評価項目、実学的専門教育の取組、職業的自立を目標とした科目開設、達成目標値について検討した。また、「各大学の強みを生かした大学間連携」、「高校生の職業観・勤労観の形成に役立つ高等学校などとの連携」についても検討した。達成目標値についてはこれまでの取組からほぼ達成できるものと期待している。

以上の自己点検・自己評価から、達成目標１の確認指標の（1）（2）の連携教育システムについては、⑥⑦⑧は取組んではいるがさらに積極的に取組んでいくことが求められる。後の評価項目についてはほぼ達成できているものと判断した。

達成目標１の確認指標（3）サポートシステムについては、⑥についてはさらに積極的に取組んでいくことが求められる。後の評価項目についてはほぼ達成できているものと判断した。

達成目標２の確認指標（１）（2）はほぼ達成できているものと判断した。

達成目標 3 の確認指標（1）の⑨についてはさらに積極的に取組んでいくことが求められる。後の評価項目はほぼ達成できているものと判断した。

達成目標 4 の確認指標（1）（2）についてはさらに積極的に取組んでいくことが求められると判断した。

（2）実学的専門教育の実施状況

実学的専門教育については、平成 23 年度新規科目は人材育成論、保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップ、キリスト教学ⅩⅥである。また、既存科目では総合演習Ⅱ、保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、初等教育実習 ab である。

ア　人材育成論（新規）

キャリア形成講座として人材育成論を開講。受講者 205 名、（1 年生 113 名、2 年生 26 名、3 年生 59 名、4 年生 7 名）である。企業と行政と大学三者が連携の生涯学習やＥＳＤ（持続発展教育）の活動を知ることを通してどんな社会人を目指せばよいのか探ってきた。また、ライフスキル学習を通して女性の社会進出に必要な資質能力開発や力量形成について自ら探求していくようにした。

イ　保育・教育基礎実習、保育･教育インターンシップ（新規）

保育・教育基礎実習は平成 23 年度から児童学科 2，3 年生を対象に実施している。基礎実習履修者は 149 名である。2，3 年生は講義が多く、保育実習、教育実習等もあり、時間的にゆとりのないため、短い時間でも実体験ができる大学近隣や交通機関の便利な学校園での基礎実習が多くなった。保育･教育インターンシップは平成 23 年度から児童学科 4 年生を対象に実施した。履修者は 84 名である。教員採用試験前や卒業論文作成の期間はなかなかできなかった。比較的時間的なゆとりがある 4 年生は 1 日とか半日等の長時間、学校園でインターンシップをすることができた。

食品栄養学科、人間生活学科では、平成 23 年度は教職を目指す学生を対象に試行した。

ウ　キリスト教学ⅩⅥ（新規）

キリスト教精神に基づくリベラル・エデュケーションによって培った総合的人間力を土台にした体験型就業力の育成を目指している。ボランティア活動に関する事前事後指導、カンファレンス、ポートフォリオを通して活動目的の達成を支援する科目である。本年度は本科目について周知徹底できなかったため受講者が少なかった。履修生は一生懸命に取組んだが、本年度の取組をもとに内容を検討し直して学生が取組みやすいように改善するとともに、本科目履修に向けて周知徹底していきたい。

エ　総合演習Ⅱ（既存）

総合演習Ⅱは児童学科 1 年生全員参加の科目である。平成 23 年度から、2 年生から始まる基礎実習への誘いとして 3 年生による体験発表会を行ったり、ポートフォリオや合同カンファレンスについて説明したりして、2 年生からの保育・教育基礎実習への円滑な移行を図った。また、新たに保育園の観察型実習に取組み、2 年生から小学校、幼稚園、保育園のコースを選択する際の参考になるよう取組んだ。

オ　保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、初等教育実習 ab（既存）

既存の保育実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、初等教育実習 ab において、平成 23 年度から保育実習後に、事前事後指導において新たに合同カンファレンス等を行い、基礎実習に継続して取組む意欲を高めていくことができた。

以上の自己点検・自己評価から、取組の改善の余地はあるが、ほぼ達成できているものと判断している。

（3）職業的自立を目標とした科目開設

これら実学的専門教育の既存科目については平成 23 年度から実施した保育・教育基礎実習・保育・教育インターンシップとの連携を図るため新たな取り組みを行った。また、新規科目である人材育成論では自分の就業力形成について自ら探求していくことができた。キリスト教学ⅩⅥは体験型就業力の育成を目指して取組んだ学生は自信を持つことができた。受講者の少ないのが課題となった。今後引続き、新たな取組に向けて取組んでいきたいと考えているところである。

（4）達成目標値

平成 23 年度補足書の達成目標では、達成目標値を次のように設定した。

ア、最終学年在籍者のうち、就職希望者の割合の増加　88.0%

イ、最終学年在籍者のうち、就職希望者のうちの就職者（内定者）割合の向上　99.0%

ウ、当該年度卒業生のうち、就職者（内定者）割合の向上　89.0%

エ、最終学年在籍者のうち、就職も進学も希望しない者の割合の減少　5.0%

オ、保・幼・小の資格・免許取得者に対する保育職・教職（保・幼・小正規採用）に就いた割合の向上　30，0%

平成 21 年度の実績は、ア、84.8%　イ、98.6%　ウ、87.7%　エ、7.4%　オ、26.5%

平成 22 年度の実績は、ア、86.6%　イ、98.6%　ウ、89.4%　エ、6.6%　オ、31.1%

であった。（平成 22 年度の就職率では全国第 9 位、関西以西の大学では第 1 位（プレジデント社調査）であった。）平成 23 年度は平成 22 年度よりさらに達成目標値にせまることができるものと期待している。

以上の実績から、達成目標値は達成できる状況に近づいてきており、ほぼ達成できるものと期待している。

（5）大学間連携

コンソーシアム岡山、岡山オルガノンでは県内 16 大学が連携して事業に取組んでいる。コンソーシアム岡山は 2006 年（平成 18 年）4 月に設立。具体的な活動としては連携する大学間で修得した単位を所属大学の正規単位として認定する単位互換制度を実施、吉備創成カレッジ、キャリア形成講座、金融知力講座などを開設した。コンソーシアム岡山の参加校のうち 4 年制 15 大学で連携して、学士力、社会人基礎力、地域発信力等の地域融合型の人材育成を行うため、岡山オルガノンを設立、2009 年から 3 年間行うこととなっている。

本取組では、キックオフミーティング、総括のためのセミナーでコンソーシアム岡山、岡

山オルガノンと連携して実施した。学生はこれらが実施している講座や東日本大震災復興支援ボランティア等に参加している。また、大学としてもＦＤ・ＳＤ研修会を開いたり、コンソーシアム岡山の講座やオルガノン研修会・報告会等に参加したりして交流を深めている。

（６）高大連携

本学では姉妹校である清心高等学校と連携して、高大連携講座「現代社会と『女性』」を開設している。清心女子高等学校文理コース第２学年の総合的な学習の時間の選択講座の一つとして行っている授業であり，今年度で開講から 5 年目を迎える。平成２３年度の受講者は 15 名であるが，多数の希望者から選抜が行われた人気講座の一つである。講座目標は，さまざまな社会問題の中で自分の判断で自らの生き方を選び取っていくために必要な，①社会を知ること，②コミュニケーションを通して他者の考えを知ること，③自分の考えを持ち深めること，④自分の考えを他者に伝えること，の四点を育成することである。講座名に示されているとおり，「社会を知ること」の内容として，「社会システムや社会常識と捉えているものの中に潜む，女性に対する抑圧的な考え方や不合理性に気付く。」「子どもをとりまく諸問題とその原因について知る。」の二点が掲げられており，女子教育としての性格を色濃く示す講座となっているのが特徴的である。一回 90 分間の授業が年間 25 回，毎週火曜日午後に行われ，会場は主に大学教員が行う場合は大学の講義教室，高等学校教員が行う場合は高等学校の教室がそれぞれ使用される。講座の内容及び構成としては，初回のオリエンテーションを除く 24 回のうち, 10 回が女性や子どもに関するテーマ内容の理解に関する授業, 4 回がディベートやプレゼンテーションといった表現方法の理解に関する授業，残る 10 回が内容理解を踏まえた発表など両者の複合型の授業となっている。高等学校側は国語科と地歴公民科の教員が各 1 名担当しており，自らが授業を行うほかシラバス作成や大学教員との連絡調整など講座運営全般を行っている。一方，大学側はテーマ内容に関する授業を行う教員が 6 名，国語表現分野に関する授業を行う教員が 1 名であるが，前者は自身の専門分野に関する講義をそれぞれ一回のみ行うのに対し，後者は数回の講義を行っている。教材は毎回，担当教員によるオリジナルテキストが使用されており，評価は，受講態度，レポート等の提出物，発表などに基づき大学担当者との緊密な連携の上で高等学校側の担当者が行うこととなっている。平成 22 年度には連携協力に関する協定の締結も行い，双方の役割や計画のしかたに関する共通理解を図った。このように大学と高校が事前に綿密な打ち合わせの上で，計画的かつ組織的に運営を行う，まさに「連携」の上に成り立つ講座といえる。

この連携によって互いの教員が同じ土俵で次年度の計画について協議し，講座の開始から終了まで電話やメールによる連絡を取り合うようになり，互いの状況や役割について理解を深めることが出来た。また、高校生に本学の教育理念であるリベラルアーツをふまえた大学女子教育の一端にふれてもらうことができた。講座内容には「現代社会とジェンダー」「ジェンダーとメディア」「歴史の中の女性」など教養ある女性としていかに生きるか

について考えさせるものが多く，この講座の受講を契機として本学の教育に魅力を感じて入学を志望する高校生も存在した。実際に受講することによって，女性が社会で働くことの意義を考え，女性としてのよりよいキャリア発達をめざす生徒も多くなったと考えられる。高大連携講座を担当する教員は，高校生を対象に授業を行うことにより発達段階を明確に意識できるようになり，大学生に対するよりきめ細やかな教育を心掛けるようになった。高大連携事業の充実によって，本学の人材育成に関する理念が学内外に浸透し，取り組みの効果をも実感することができた。高等学校との連携が学内のキャリア指導観の醸成に寄与し，今後学生の職業観形成やキャリア発達につながるものと期待されるところである。

以上の取組から、本学学生の就業力育成に向けて、高大連携､大学間連携に今後積極的に取組んでいく必要があると考えている。

第 4 章　外部評価

1　外部評価報告書

（1）教職就業力評価委員会委員

本取組では、取組の外部評価を行なうために、平成 22 年度から 4 名の方々に教職就業力評価委員会委員を依頼した。

平成 22 年度教職就業力評価委員会委員

千葉　喬三　　前岡山大学学長
原　　憲一　　山陽放送常務取締役、岡山経済同友会教育問題委員長
平松　卓雄　　岡山県県民生活部長
徳山　順子　　岡山県教育庁参与

平成 23 年度教職就業力評価委員会委員

難波　正義　　新見公立大学・新見公立短期大学学長
原　　憲一　　山陽放送代表取締役社長、岡山経済同友会教育問題委員長
浅野　嘉彦　　岡山県県民生活部長
徳山　順子　　岡山市立京山中学校長

平成 22 年度は、平成 23 年 12 月 18 日（土）キックオフミーティングの後に、教職就業力評価委員会、教職就業力育成代表者委員会、教職就業力育成プログラム実施本部との合同会議を行なった。平成 22 年度の取組が始まったばかりであったので、合同会議では、平成 22 年度 1 月から 3 月までの具体的な取組について試行していくことと、試行の結果を受けて、平成 23 年度から本格的な取組を行なうことについて、各委員からご意見をいただいた。ご出席の各委員から、提案された方向で取組んでいくことについて賛同いただいた。

平成 23 年 4 月から、千葉評価委員は就実学園理事長にご就任、平松評価委員は岡山県県民生活部長をご退任のため、後任として、難波正義新見公立大学・新見公立短期大学学長、浅野嘉彦岡山県県民生活部長に評価委員を依頼した。原評価委員は山陽放送代表取締役社長にご就任、徳山評価委員は岡山市立京山中学校校長にご就任されたが、引続き教職就業力評価委員会委員として外部評価をしていただくこととなった。

（2）外部評価項目

外部評価項目は、以下の 6 評価項目である。

（1）総合的な評価について
（2）個別の取組に対する評価について
（3）組織的取組に関する評価について
（4）優れている点等について
（5）改善すべき事項について
（6）今後の展望等について

（３）外部評価報告書

ノートルダム清心女子大学　就業力育成支援に関する外部評価結果について

外部評価委員長　　難波　正義

次のとおり評価結果を報告いたします。

（１）総合的な評価について

保育職・教職のための体験型就業力育成支援においては、着実な取組がなされており、学生や連携学校園での実施報告等から効果を上げていることが明らかにされている。とくに、各学校園学外実施委員会での合同カンファレンスや大学における適切な事前事後指導が連携学校園での基礎実習やインターンシップでの体験を振返り、新たな課題をもって取組んでいく上で効果を上げていることがわかる。2 年間の取組ではあるが、体験を通した保育職・教職のための就業力が確実に身についてきており、保育職・教職にかかわる他の大学の参考となるものと期待している。

（２）個別の取組に対する評価について

平成 22 年度 10 事業、平成 23 年度 15 授業での取組についてそれぞれ詳細な実施報告がなされており、どの事業も順調な取組がなされている。また、学生の声や評価を取入れて進められてきており、連携学校園と大学との連携も密接に行われている。

（３）組織的取組に関する評価について

教職就業力育成プログラムが目的にそって実施されているかどうか定期的、継続的に検討されてきており、ＰＤＣＡサイクルは機能していると判断できる。また、教職就業力育成プログラム本部を中心に一つ一つの事業に確実に取組んでおり、サポートシステムも有効に機能している。

（４）優れている点等について

保育職・教職のための体験型就業力育成支援において、学生にもっとも効果があったのはポートフォリオと合同カンファレンス等である。学生はただ現場で体験するだけでなく、「体験したことをポートフォリオにまとめる」、「体験したことや体験での課題等について合同カンファレンスで検討し合う」、「体験したことについてＧＰ支援員から個別のアドバイスをもらう」などによって、実践的な力として身につけてきている。これらの適切な取組によって、これまでにない効果を上げていることは大いに評価できる。

（5）改善すべき事項について

これまで大学が中心になって実施してきた結果、一定の成果を上げることができたが、今後継続して取組んでいくためには、学生が主体となって取組んでいく体制に変えていくことが必要ではないかと考える。また、これから必要と思われる保護者支援や卒業生支援等については、さらに充実させていく取組が求められる。

（6）今後の展望等について

人間生活学部としての取組から、教職にかかわるすべての学科に拡大していくことが求められる。また、今後更なる成果を上げていく上で学科ごとの入学から卒業後までの体験型就業力育成プランが作成されることも大切ではないかと思われる。

ノートルダム清心女子大学　就業力育成支援に関する外部評価結果について

外部評価委員　　原　憲一

次のとおり評価結果を報告いたします。

（1）総合的な評価について

この取り組みでは大学の座学に加え、岡山市や倉敷市での現場体験や、それをフォローするカンファレンスや事前事後指導が有効に機能し学生が確実に力をつけている。それを裏付ける資料も整備されており高く評価できる。地域の経済界を代表する立場から言えば、多くの人材を地域の産業界に送り込んできた貴学の学生全体にプログラムを波及させて更なるレベルアップにつなげていただければと願っている。

（2）個別の取組に対する評価について

計画されている個別事業については、提出された報告書をみる限り、着実に成果を上げているように思える。とりわけ現場の先生方や保護者の考えを具体的に把握した上での人材育成に取り組んでいることに対しては、今後も継続していただきたい。一方で大学の先生方が現場に赴いて、どの程度意見交換されているのか判断できない部分もあります。しかし、この 2 年間の取り組みについては報告がきちんとされており、全体として連携校との関係もうまくいっていることが確認できた。

（3）組織的取組に関する評価について

前の附属小学校長をコーディネーターとして採用、現場と大学の双方の体験を生かした事業展開が効果をもたらしていると感じました。また、プログラム実施のための会議に学長や学部長など大学のトップが参加され、一方で学科長や事務部門責任者も参加し大学全体での組織的な取り組みであると感じられました。

（4）優れている点等について

貴学の建学の理念でもある一人一人の学生を大切にする教育方針について、この事業でも強く感じられた。特にポートフォリオやカンファレンスの場面で感じられた。

（5）改善すべき事項について

学生からのリアクションは積極的なのでしょうか。現代の学生に共通しているのは、まじめなのだが主体性に欠けている点です。岡山経済同友会が昨年募集した学生ボランティアに対し貴学の学生の皆さんも応募されました。参加された学生の皆さんは、それぞれ貴重な体験だったと感想を述べていました。この事業に関係する学生さんがボラン

ティアに応募されたかどうか分かりませんが、今後も復興に向けた現地の状況を多くの学生さんに知っていただきたいと考えています。

（６）今後の展望等について

この 2 年間の事業展開で一応の成果を上げてこられたが、事業仕分けで補助金が受けられないが大学独自で事業を継続していただきたい。座学だけでなく、学外で学ぶ実学的側面を重要視していただき、産業界が求める働く女性を送り出していただきたいと考えています。ワークシェアリングの流れの中で女性の能力は今後の産業界でさらに重要視されるものと考えております。今後の貴学の有意義な活動に期待したいと思います。最後に申し上げたいのは、有意義な大学での取り組みについては、世間にもっとアピールしていただきたいと思います。ＨＰだけでなく新聞・ラジオ・テレビなどマスコミ機能を生かしたＰＲを展開していただきたいと願っております。

ノートルダム清心女子大学　就業力育成支援に関する外部評価結果について

外部評価委員　　浅野　嘉彦

次のとおり評価結果を報告いたします。

（１）総合的な評価について

保育職・教職を目指す学生の「総合的人間力」、「子ども理解力」、「保護者支援力」、「協働力」といった実践的能力を向上させることにより、学生の資質向上を図り、就業力を高めていくことを目的とした、貴大学の「保育職・教職のための体験型就業力育成プログラム」は、現在の教育現場の課題やニーズにも対応した、時宜を得た取組であると考えている。

昨年度後半からのスタートとなり、実質１年半という短期間であったにもかかわらず、大学全体で体制を整え、学校園とも連携を密にしながら情熱を持って指導に当たっておられ、学生の方もそれに応えて真摯に取り組み、着実に実践力を修得している様子がうかがえた。こうした取組は岡山県全体の教育力の向上にも寄与する意義深いものと評価しており、引き続き取り組んでさらなる成果を上げていただくとともに、大学コンソーシアム岡山等を通じ、県内他大学にも取り組み成果を広めていただくよう期待する。

（２）個別の取組に対する評価について

平成 22 年度 10 事業、23 年度には 15 事業に取り組んでいるが、実施報告書からは個別の取組について、それぞれ着実に進められている様子がうかがえた。

特に、学生が、教育現場での体験内容や感想を克明にポートフォリオに記録することにより、ＧＰ支援員からの効果的な指導・助言を引き出すことにつながっており、こうした地道な取組を通じて、学生の実践力が着実に向上しているものと考える。

（３）組織的取組に関する評価について

貴大学が、学長を本部長とした、「教職就業力育成プログラム実施本部」を立上げ、大学全体で責任を持って推進する姿勢を明確にされるとともに、保幼小学修支援センターを中心として、随時、会議を開催して連絡調整を密にするよう取り組まれたことにより、連携する学校園にも貴大学の熱意が伝わり、結果として、学生が実習に専念でき、着実に実践力を修得できるような環境づくりにつながったものと考える。

（４）優れている点等について

実施報告書からは、連携する学校園の教職員や、既に教職に就いている貴大学の卒業生など、多方面から、この取組に対する理解と協力が得られている様子がうかがえた。

特に、合同カンファレンスの事例検討の場などが提供される教職員や卒業生等のアドバイスや苦心談は、学生にとって、視野の広がりや不安の軽減などにつながる一方、学生から発せられる率直な感想や意見は、教職員や卒業生の新たな気付きや学びにつながっており、相互に良い影響をもたらされる、内容の濃いプログラムとなっていると考える。

（５）改善すべき事項について

現在は、大学が中心になった取組となっているが、報告書でも触れられているとおり、将来的には、学生が主体的になって企画・運営していく取組みとなるよう期待する。

（６）今後の展望等について

本取組が、国の事業仕分けの影響により、今年度限りで補助金が打ち切られたことは誠に残念である。

今後は、国が設けるであろう新たな制度なども活用して、さらに学生の就業力を育成する取組を深めていただくことにより、岡山県全体の教育力向上にも一層寄与していただけるものと、大いに期待している。

ノートルダム清心女子大学　就業力育成支援に関する外部評価結果について

外部評価委員　　徳山　順子

次のとおり評価結果を報告いたします。

（１）総合的な評価について

本取組は、保育職・教職を目指す学生を対象に、学生の資質向上を図り、就業力を高めることを目的にしており、2年間を通してＰＤＣＡサイクルがスパイラルに回っていくことで、着実に学生が力をつけている様子がうかがえる。学校園との連携による実体験と、効果的な振り返りを通して、「総合的人間力」、「子ども理解力」、「保護者支援力」、「協働力」が育ってきており、何よりも学生の就業意欲が高まってきていることは大きい。学生や学校園の報告書から、2年間の成果と教育効果が十分感じとれる。

（２）個別の取組に対する評価について

2年間で25事業に取り組み、それぞれの事業において詳細な報告がなされており、どの事業も着実に成果を上げている。取組の中心は、連携学校園での基礎実習、インターンシップでの体験を通して、学生のポートフォリオや合同カンファレンスに力を入れており、実践後、アンケート調査をすることで学生や学校園の評価を改善に反映している。常に、実践後の声や振り返りを中心に進めていることが成果や課題を具体的に把握することにつながり、学生が改善への糸口をつかみやすくなっている。

（３）組織的取組に関する評価について

連携学校園との連携、学生との事前事後の指導等について、就業力育成代表者委員会の定期的な開催や、保幼小学修支援センター会議、ＧＰ支援員との合同会議等の継続的な開催を通し、検証・改善を進めながら取り組んでいる。こうした組織的な取組となる工夫が十分なされており、組織的に活動している様子が随所にみられた。こうした取組からも教育関係者とのネットワークづくりが進み、学び合う関係ができつつあり、互いにプラスになっていると考える。

（４）優れている点等について

一番優れている点は、学校園が一体となって、学生の基礎実習・インターンシップに取り組み、いろいろな教育現場を経験・助言をいただく中で、学生が育ってきているということである。教育実習の期間だけでは得られない学びを学生が得ており、それぞれ

の事案で振り返りをしてアドバイスを受けるなど、次への取組の改善策を自ら考える視点が示されていることがよい。また、学生のポートフォリオ作成も自己の振り返りには効果的であり、大いに評価できる。

（5）改善すべき事項について

2年間の定着により、着実に成果を上げてきている。特に、課題を挙げるとすれば、学生のシンポジウムを開くなど、自分のための主体的な活動として意識できるよう、学生主体の取組を入れたり、保護者・地域との協働力を培うために地域活動やボランティアに参画したりするなど、学校園に限らず活動の幅を広げていくことも学生の総合的人間力や社会性を高めるものと考える。今、学校・家庭・地域との連携・協働は子どもの健全な育成には不可欠なものであり、ぜひとも意図的・計画的・系統的に育てていただきたい。

（6）今後の展望等について

今回は、人間生活学部での取組であるが、保育職・教職に関係のある学科すべてに拡大していくことで、保育職・教職を目指す学生にとって大きな成果が得られるものと考える。また、学年次をおって、段階を踏んだ取組を系統的に精査していくことも教育効果を高める上で大切ではないかと思う。今後の継続・改善した取組みに大いに期待している。

２　連携学校園のアンケート調査結果

連携学校園での達成目標は、「学生の保育職・教職就業力（子ども理解力、協働力、保護者支援力の実践的能力）の向上を図る」である。そのための確認指標は、

ア、連携学校園はさまざまな保育・教育場面でのボランティアを受け入れ、学生に様々な保育･教育の体験をさせている。

イ、連携学校園は合同カンファレンスの機会を設け、学校園でのボランティアを振返り、ボランティアの質の向上を図っている。

ウ、連携学校園は大学と連携をとって、基礎実習・インターンシップを実施している。

連携学校園では、それぞれ学外実施委員会を実施して、基礎実習・インターンシップについて､参加学生､連携学校園の先生、大学担当者で検討し合う機会をとっている。学外実施委員会では、学生の取組について検討する合同カンファレンスを中心に行った。これらの成果や課題については連携学校園学外実施委員会ごとの実施報告書にまとめている。

また、連携学校園の先生方、参加した学生、大学担当者からのアンケート調査からも、基礎実習・インターンシップについての成果や課題を明らかにすることができた。

Ａ幼稚園基礎実習・インターンシップ
学外実施委員会実施報告書

１　日　時　　平成23年８月２５日（木）　１３：００～１６：００
２　場　所　　Ａ幼稚園
３　出席者　　○4年生４名
　　○Ａ幼稚園園長・４歳児担任２名・５歳児担任）
　　○大学担当者２名
４　実施内容とその効果
（１）実施内容
　①　自己紹介
　②　基礎実習・インターンシップで体験したこと
　　・　登園指導の補助
　　・　先生の指導の観察
　　・　定期的に訪れ、幼児とかかわりながら、幼児の遊びの姿を観察
　　・　行事前の準備補助・環境整備、保育室の清掃
　③　合同カンファレンス
　　・　年少児で、皆が部屋に入って活動を始めようとすると外に飛び出す子どもが多いがどのように援助したらいいのか。
　　＊支援の必要な子どもが多いため大変である。高いところから飛び降りたり、外に飛び出したりして危険なこともあり目が離せない。担任は、その子どもだけに関わることは出来ないので支援員の方の力をお借りしているが十分ではな

い。子どもの「やりたい」「行きたい」という気持ちを尊重しつつ、職員間の連携をとりながら指導している。

＊分からなかったり困ったりしたことがあったら、遠慮しないで担任に聞いてほしい。担任も気づかないことがあるので、みんなで連携をとりながら子どもたちへ適切な援助をしていきたい。学生の皆さんの力に期待している。

・　言葉で自分の気持ちを伝えることができない子どもへの援助はどうしたらいいか

＊「困ったら先生のお顔を見てね」と言っておくと、何か言いたい時は担任の目を見るようになった。

＊場面緘黙の子どもの場合、言葉では言えないが、周囲をよく観察している。その子のよさを見つけて、話すことを強要するのではなく言葉では言えない思いを受け止めることを大切にしている。

＊支援が必要な子どもは、幼児指導教室で週１回指導を受けている。専門機関との連携も大切にしている。

・　４歳児のほうが指導しやすいと感じている。５歳児になると自分で出来ることが多いのでどこまで手助けをしたらいいのか難しい。

＊５歳児の場合、子どもが自分でできることはさせ、見守ることが大切である。また、一人一人出来ることが違うので、そのことを考慮して必要に応じて援助するよう心掛けている。

（２）実施の効果

・　特別な支援を必要とする子どもが多く、インターンシップの学生たちが必要とされ大きな役割を果たしていることが感じられた。今回のカンファレンスでは、特別に支援を必要とする子どもへのかかわりについて、先生方から詳しい実情をお聞きすることができた。また、先生方としっかり意見交換ができたため、学生たちも大きな学びを得てこれからのインターンシップへの意欲や期待を高めることができていた。

５　その他

・　園長先生から、「普段はなかなか子どものことについて話し合いをすることができないため申し訳なく思っている。可能であれば、保育後、手仕事や作業を手伝っていただきながら、子どものことについて話し合いがもちたいと考えている。無理でなければ、保育後にも時間を延長してもらえるとありがたい。」と提案をいただいた。

学生たちは期待に応え、９月の計画を見直し、変更を加えた。２学期の更なる学びに期待したい。

連携学校園における基礎実習・インターンシップの成果や課題について、連携学校園はどう評価しているかについてもアンケート調査を行って確かめている。基礎実習・インターンシップについての連携学校園長の皆様の評価はたいへん温かいものであった。将来保育職・教職を希望している学生に対して、実に懇切丁寧な指導をいただいた。

基礎実習・インターシップについて

平成２３年８月２２日　　（T 幼稚園長）

1　基礎実習・インターンシップを受け入れて、よかったことについて

・将来、教職を目指す学生に来ていただいているので各自がめあてをもって保育補助にあたっている。

・回数、日数をかさねるごとに動きもよくなり、担任は助かっている。

・担任が環境を再構成しようとした際もさっと動き、「お手伝いします」と言って声が出るようになってきた。

・教員も常に観察されているような気持ちになって平素の保育を展開しているものの、声かけや指導のあり方など意識して取組めるので勉強になるとの意見もあった。

2　基礎実習・インターンシップを受け入れて、困ったことや気になったことについて

・とくにありません。時間を守って規則正しく手伝ってくれています。

3　学生について

・正規の教育実習の学生さんとインターンシップの学生さんが同一の学生もいるので、９月からは子どもたちへの読み聞かせや手遊びなどをしていただこうと思っております。

・また、子どもの前で話をする、前に立つことをしていただきます。

・教育実習やインターンシップで多くのことを学んでいただけるようにしたいと思っています。

また、基礎実習・インターンシップでの学生の取組の全体的な傾向については各学外実施委員会にご出席の学校園長や担任の先生方のご指導やアドバイス等の内容で理解できてはいたが、「学生にどんな力がついてきているか」、「どんな力が足りないか」などについて、学校園の関係の先生方にアンケート調査を実施した。直接ご指導いただいた担任の先生方（42 名）からの、学生の基礎実習・インターンシップでの取組の評価は次の通りである（図 40 参照）。

＜基礎実習・インターンシップでの学生の取組についての評価＞

（　）の中に、Ａ～Ｅの記号を入れてください。Ｄの場合はわけをお書きください。今後の取組にいかしていきたいと思っております。

Ａ：よくできていた　　Ｂ：できていた　　Ｃ：少しできていたＤ：できていなかった　Ｅ：わからない

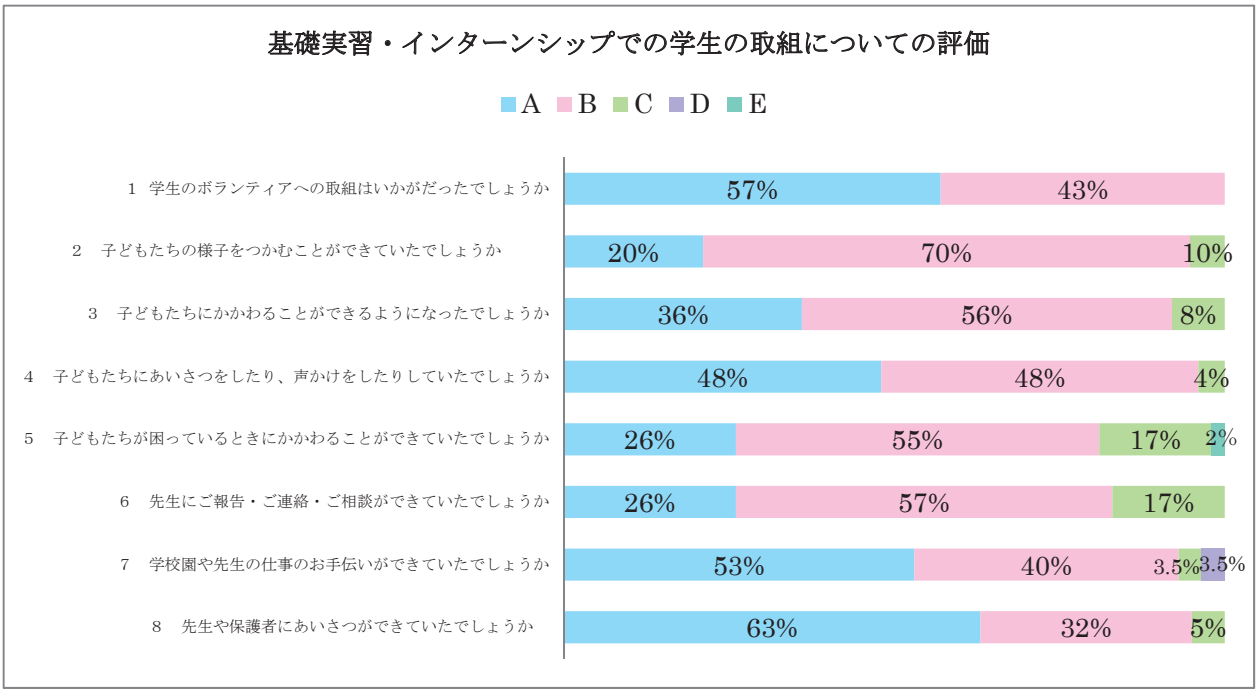


図 40：基礎実習・インターンシップでの学生の取組につい（連携学校園の評価）

子どもたちのご指導でお忙しい毎日送っておられる先生方から温かいご指導とご支援をいただいた。学生の評価についてもしっかりと見ていただいた。十分見ることができなかったところは「わからない」とコメントしていただいているが、その場合でも次のようなコメントをしていただいている。

＜学生のボランティアについて学校園の先生方のコメント＞

・学生の真摯な取組にたいへん助かっている。
・率先して動いてくれるので助かっている。
・子どもたちの様子をよく見てかかわっている。
・一生懸命な姿に教職員も刺激を受けている。
・子どもに一生懸命にかかわっている姿が印象的だった。
・依頼したことを真面目に取組んでくれた。
・気持ちのよいあいさつができている。
・ていねいにやさしくかかわれていた。
・限られた時間内で一生懸命してくれている。
・積極的に学ぼうとしている意欲が感じられた。
・環境準備、材料準備の手伝いなどたいへん助かった。
・いつも元気で明るい笑顔のボランティアに感謝。
・危険を予測して動いてくださったことに感謝している。
・進んで仕事を手伝ってくれた。
・子どもへの声かけがよくできていた。

・疑問や質問など勇気を出して聞く姿勢が見られた。
・職員一同、学生ボランティアには感謝している。
・子どもたちも楽しみにしている。
・子どもたちの様子をよく見てくださっている。
・もう少し長時間きていただくといいのですが
・時間があれば、ゆっくりと話合いができるのですが
・その日のボランティアについて相談の時間をとることができなかったことが残念である
・これからも引続き来てほしい。
・保育だけでなく、降園後、休業中、新学期開始前などの体験も役立つ。
ぜひ体験してほしい。

連携学校園が本学の学生のために特段のご理解を示してくださっており、その結果、どの学校園でも、「学生は子どもに明るく、誠実に接しており、真面目な取組をしている」との評価をいただいた。また、学校園の先生からは「保育・授業の補助として助かっている」、「ぜひとも引続き、学校園に来てほしい」との声もいただいている。いずれにしても、基礎実習・インターンシップは学生にとっては実践的能力を身につけるよい機会となっており、ひとえに連携学校園の校園長の先生方、担任の先生方のご支援とご協力の賜物と感謝しているところである。学生の補助により、先生方が少しでも余裕が生まれてきていることや、何よりも子どもたちが少しでも喜んでいることなどは本学にとってうれしいことである。

連携学校園での学外実施委員会の合同カンファレンスについての参加した学生の評価からたいへん勉強になっていたことがわかった。

以上のことから、連携学校園での取組はほぼ達成できているものと判断している。

3　一般参加者による評価

キックオフミーティングの機会に実施したが、総括のためのセミナーも広く一般の参加者を受け入れている。一般参加者等による本取組の成果と意義の達成目標は、「一般参加者等の意見・感想や他の取組との比較から、本取組の成果と意義を明らかにする」である。そのための確認指標として、

・本取組のセミナーに一般参加者等の参加を求め、一般参加者等の意見や感想をもとに成果や意義を明らかにしている。

平成 24 年 3 月 17 日、総括のためのセミナーを開催した。学内外から 108 名の参加を得て行なうことができた。一般参加者のアンケート調査から、「本取組について理解できた」、「本取組は意義がある」との評価をいただいた。

平成 22 年度・平成 23 年度実施報告

学生の体験報告

総括のためのセミナーの後の合同会議では、連携学校園の校園長の先生方から、「合同カンファレンスやボランティアの学生の様子を見て、子ども理解力や協働力は確実に身についてきている」、「保護者と接する機会が少なかったのは残念だ」、「基礎実習・インターンシップは大きな成果をあげている」、「ぜひ引続き続けてほしい」などの発言があった。

第５章　　取組の総括と今後の課題

１　事業実施による効果

（１）平成 22 年度の成果・実績

22 年度①から⑩の 10 の事業を実施した。その具体的な成果・実績は次のように考えている。

①2010 年度内において就業力育成支援代表者委員会学内会議を 12 回開催し、本取組の実施・運営体制の準備を中心に行った。具体的には、(1)組織として教職就業力評価委員会、就業力育成代表者委員会、就業力育成プログラム実施本部、保幼小学修支援センターを設置し、(2)必要な人材（コーディネータ、事務補助員、カンファレンスのための支援員）を確保し、(3)必要な設備の整備を行った。保幼小学修支援センター会議は 11 回行われ具体的な実践に取組んだ。

②本取組を学内外に公表するとともに、円滑かつ効果的に実施し、組織構成員の共通理解を図るために、12 月中旬にキックオフミーティングを開催し、教職就業力評価委員会、教職就業力育成代表者委員会、教職就業力育成プログラム実施本部の合同会議を開いた。将来的に、本取組を全学的に拡大していくことを考慮して、「教職支援センター」を設立した。

③教務情報基礎システムを 3 月までに導入し、翌年度からの運用をするための整備を行った。

④3 月までに、HP 等により先進事例についてインターネットからの事前調査を行い、３月中旬以降に先進地域（関東地区）のワークショップや個別に大学を訪問し調査する予定であったが、東日本大震災のため、先進事例調査等を実施することが出来なかった。

⑤1 月から 3 月までの間、連携保育園 3 園、附属幼稚園・附属小学校において、保育・教育基礎実習を試行的に実施し、各学校園の実情にそった保育・教育基礎実習のあり方や連携のしかたについて検討した。

⑥1 月から 3 月までの間、連携保育園 3 園、連携幼稚園 3 園、附属幼稚園・附属小学校において、保育・教育インターンシップを試行的に実施し、各学校園の実情にそった保育・教育インターンシップのあり方や連携のしかたについて検討した。

⑦2 月から 3 月までの間、連携保育園・連携幼稚園、附属幼稚園・附属小学校において保育・教育基礎実習と保育・教育インターンシップを試行し、ポートフォリオをもとにして、ＧＰ支援員、大学担当者等から個別のカンファレンスを行った。また、連携保育園 3 園、連携幼稚園 3 園、附属幼稚園・附属小学校において合同カンファレンスを行い、保育・教育基礎実習と保育・教育インターンシップでの実体験について検討を加えた。平成 23 年 1 月 24 日に幼稚園免許取得希望者 100 名を対象にわらべうた講習会・カンファレンスを行った。平成 23 年 2 月 23 日に学生、保育士、大学担当者など 138 名が参加して、保育講演会・カンファレンスを行った。

⑧本学公式ホームページ内に「就業力 GP」ページを作成、図を交えて本取組を分かりやすく伝えるようにした。また、「GP News」ページにより、イベントの告知や報告を行った。キックオフミーティングについては当日の模様と実施内容を、保育講演会・カンファレンスについては概要に加えて、学生の取組についても具体的に紹介した。

⑨学習支援のための実践システムとして、朝日ネット「manaba folio」を導入し、本取組のワーキンググループで本取組に適した運用方法を検討し、運用案をまとめ、教職員に対する説明会をおこなった。本格的な運用は平成 23 年度 4 月からとなるが、在学生用の ID を作成、保育関係の学生にログインを呼びかけ、部分的な試用を開始した。

⑩1 月までに、保幼小の保育職・教職希望の学生対象に 1・2・3 年生用と 4 年生用の自己評価カードを作成した。2 月から 3 月までに、1・2・3 年生は保育・教育基礎実習の自己評価を、4 年生には保育・教育インターンシップについての自己評価を試行的に実施し、就業力の評価について検討を加えた。また、1 月までに就業力についてのアンケートを作成し、2 月から 3 月までに附属幼稚園・附属小学校、連携保育園・連携幼稚園・連携小学校において、教師、保護者を対象に保育職・教職をめざす学生にどんな就業力を求めているのかについて調査し、大学で育成していく就業力について検討を加えた。また、附属小学校、連携小学校において、児童はどんな教師を求めているのかについても調査し、大学で育成していく就業力について検討を加えた。

以上の取組から、①から⑩の各事業は当初の予定通り実施できたと判断している。

（2）平成 23 年度の成果・実績

23 年度①から⑮の 15 の事業を実施した。その具体的な成果・実績は次のように考えている。

① 平成 23 年度内において教職就業力育成プログラム実施本部の会議を 15 回、保幼小学修支援センターの会議を 32 回、ＧＰ支援員との合同会議 3 回実施し、本取組の充実を図った。 具体的には、コーディネータ、事務補助員、カンファレンスのための GP 支援員を確保して、大学担当者を中心に保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップを推進した。また、連携学校園の実情に合わせて、学外実施委員会を設置して、各学校園と連携して保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップに取組んだ。

② 平成 22 年度は保育・教育基礎実習・保育・教育インターンシップ並びにそのカンファレンスについて試行したが、事業の運用、連携学校園との連携等から見直しをして、円滑な推進ができるよう改善した。具体的には、諸会議の公開、実施本部事務局の設置、連携学校園との連絡・報告・相談等、試行での取組を見直して改善した。また、保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップ並びにそのカンファレンスについて試行をもとに見直し、具体的な進め方について改善した。

③ 保育･教育基礎実習の科目を開講した。連携学校園でのボランティア実習にあたって、保育･教育基礎実習の手引きをもとに事前指導を実施した。また、連携学校園での保育･教育基礎実習、保育・教育インターンシップの節目ごとに事前事後指導を実施した。

④ 保育･教育インターンシップの科目を開講した。連携学校園でのボランティア実習にあたって､保育･教育インターンシップの手引きをもとに事前指導を実施した。また、連携学校園での保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップの節目ごとに事前事後指導を実施した。

⑤ 保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップでの GP 支援員による個別のアドバイスについてはノート形式でのポートフォリオとネット上でのポートフォリオの両面から行った。

⑥ ポートフォリオを保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップで本格実施。マナバフォリオでのポートフォリオとノート形式のポートフォリオを併用して実施した。多くの学生がポートフォリオにまとめ、それをもとに合同カンファレンスを行い、保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップに生かしていくことができた。

⑦ 学修支援システムの試行的稼働を行う際に、学生には具体的な指導や学生への講習会を行った。次第に利用できるようになった。マナバフォリオでの全学履修登録を行った。

⑧ 保護者支援にかかわるイベントなどへ参加は、保育園の親子会、幼稚園の託児体験、親子でのわらべうたの実践、小学校のバザー、交通安全指導等に参加して、保護者から感謝の言葉をいただいた。

⑨ 平成 23 年 6 月にポートフォリオ・LMS 先端事例研究セミナー（東京)、7 月に中四国地域会議（広島)、10 月にポートフォリオ・LMS 先端事例研究セミナー（(京都)に参加。12 月に上越教育大学、倉敷芸術科学大学において研修した。これらの先進地域の取組から多くのことを学んだ。

⑩ 平成 23 年 7 月から、栄養教諭、家庭･福祉の教職をめざす学生の基礎実習・インターンシップを附属小学校、岡山南高等学校等で試行した。

⑪ 学生代表が保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップの体験報告を行い、卒業生である現職の先輩とともに合同カンファレンスの機会をもった。また、卒業生と大学担当者での懇親の会をもち､勉強会や相談会を立上げて取組んだ。

⑫ 学生の意識の変化等の調査のため、平成 23 年 5 月事前アンケート調査と平成 24 年 1 月事後アンケート調査を実施した。また、本事業の取組について連携学校園、大学担当者等にアンケート調査を実施した。

⑬ 平成 24 年 1 月に各種事業の自己点検・自己評価を実施した。

⑭ 平成 22・23 年度実施報告書案を 11 月、12 月の教職就業力育成代表者会議で検討をはじめ、1～3 月にかけてまとめた。3 月末、最終案を検討し、実施報告書として製

本した。

⑮3 月 17 日総括のためのセミナー、教職就業力育成代表者委員会と教職就業力育成プログラム実施本部合同会議を開いた。また、評価委員一人一人に 2 年間の取組について説明し、外部評価報告書をいただいた。

以上の取組から、①から⑮の各事業は当初の予定通りほぼ実施できていると判断している。

この 2 年間の取組から、当初の目的である「学生の資質向上を図り、就業力を高める」に向かって取組んできていると判断している。

（3）本事業の成果の継続発展

本事業の成果として、学校園との連携による保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップの実施、サポート体制、自己評価、地域のネットワーク化、卒業生の支援などがある。

ア　連携モデル

本学が取組んだ学校園との連携は①から④に留意して実施した。

①いま、教育現場では、どんな力を身につけた先生を求めているのか、保護者等はどんな先生を期待しているのか、アンケート調査を実施して、実践的能力育成の参考にした。

②大学生活 4 年間の中で、学生がどんな実践的能力をどの程度身につけていくことができるのか保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップ実施の中で探った。

③保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップでの実体験をポートフォリオにまとめたり、合同カンファレンスで検討したりして、その効果を確かめた。

④大学が支援できることは何か、連携学校園が支援できることは何かをつかむことができた。効果のあったポートフォリオや合同カンファレンスの実施、学校園に便利であった学生の保育・教育基礎実習、保育・教育インターンシップ計画表の提出、大学の適切な時期での事前事後指導等は今後現場との連携のモデルになると考えている。

イ　サポートモデル

学生が主体的に取組んでいく上で、大学はどこまでサポートしていくとよいのかについて試行錯誤してきた。これまでは基礎実習・インターンシップの計画から合同カンファレンス等の運営まで大学が中心になって実施してきた。これからは学生が中心になって取組むことができるようなサポートが必要であると考えている。そこでは、学生自身が進んで学校園での実体験をポートフォリオにまとめたり、振返ったり、ポートフォリオをもとにした合同カンファレンスを行ったり、計画表を作成したりすることができるよう、新たなサポートをしていきたいと考えている。そのために、基礎実習・インターンシップをする学校園ごとのコミュニティを作り、リーダーを中心に学生の力でこれらの活動できるような支援を試行しているところである。

ウ　評価モデル

基礎実習・インターンシップで自分にはどんな実践的能力が身についてきているのか、どんな実体験をしておくとよいのかなど、学生が自分で振返ることができる達成度評価案（事前チェックカード、事後振返カード）を作成した。また、アンケート調査をして保育職・教職への自信や意欲、気持ちや不安なこと等も振返ることができるようにした。これらを何年か実施し検討しながら、1年から4年まで、どんな自己評価が必要か、どんなアンケート調査を用意しておくとよいのかを探り整理して、各大学でも利用できる評価モデルが作成できればと取組んでいるところである。

エ、地域ネットワークの活性化

連携学校園を中心に保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップを実施してきた。連携学校園からは特段の温かいご支援をいただいて実施することができた。居住する地域の学校園等、連携学校園以外でもボランティアをしている学生は多い。これからは学生が選んだ、いろいろな学校園での保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップが実施できるように連携学校園等を拡大していきたいと考えている。マナバフォリオを活用して、各学校園とのネットワーク化を進めることができればと考えているところである。

オ、卒業生による支援モデル

学生の保育･教育基礎実習、保育･教育インターンシップでの取組について、大学では事前事後指導を行い、学生が安心して取組んでいけるようかかわってきた。そのなかで、ポートフォリオをもとにして、自分たちの取組について検討し合う合同カンファレンスはたいへん有益な取組となっている。現段階では、大学担当者、経験豊かなＧＰ支援員からの指導助言を受けているが、保育職・教職経験2，3年の身近な存在である先輩によるアドバイスもきわめて効果的であった。そこで、今後は大学での合同カンファレンスは本学先輩卒業生によるアドバイスができるよう、保育職・教職のネットワーク化も進めていきたいと考えている。

2　事業実施の課題

平成22年度・平成23年度の2年間の取組から、各事業について当初の予定通り実施できているが､いくつか課題も出てきている。

その一つはもっと学生が主体的になって取組むことができないかということである。学校園での基礎実習・インターンシップは主体的に実施できているが、学校園ごとの実施計画表の作成、学校園での合同カンファレンス、卒業生との合同カンファレンスなどの企画・運営等が学生の力でできるよう、少しずつ取組んでいるところである。また、平成24年度から、学校園のコミュニティごとにリーダーを中心に学生の力でできるようにしたいと準備しているところである。

二つめは、保育実習・教育実習、基礎実習・インターンシップ、大学の授業をどのように関連づけていくか検討して、実学的専門教育を含めた1年から4年生までの就業力

育成の上から、実態に即した就業力育成プランを確定していくことである。今回の就業力支援 GP の取組について、教養科目委員会、キャリアサポートセンター、学務部各係、入試広報部など大学の各種委員会､部署等で検討がなされてきた。これらの結果を踏まえて、各学科に即した就業力育成プランを作成できればと願っているところである。

三つめは、補足書にある達成目標値を完全にクリアすることである。保幼小学修支援センター、教職支援センター、キャリアサポートセンターを中心に学生への就職支援が一段と充実してきている。その結果、平成 22 年度は本学の就職率は全国で 9 位、中四国では 1 位の実績を上げている。保育職・教職の就職支援については、今後教職支援センターを充実させていきたいと考えている。

四つめは卒業生の支援である。岡山県内で保育職・教職に就いている多くの本学の卒業生を支援する体制が十分にはできていないのが現状である。卒業生からの支援の要望もある。そこで、卒業してから 5 年目以内の卒業生を対象にした勉強会・相談会を平成 24 年 2 月に実施した。また、合同カンファレンスにおいて、卒業生による学生への支援について実施し、好評を博した。今後充実させていく方向で検討を進めている。

五つめは、保護者や地域の人たちとの連携体験の促進である。保護者との連携ではＰＴＡ・保護者会や学校園の行事への参加、地域の人とのかかわりでは学校園に関係の深い学区の行事、学童保育、子どもたちに関係のある公民館活動等への参加等に取組んでいく必要があると考えている。

六つめは、本事業をどのように継続発展させていくとよいのかについてである。

その一つが大学の取組体制についてである。現在、教職就業力育成代表者委員会、教職就業力育成プログラム本部、保幼小学修支援センターが中心になって取組んでいる。保育職・教職関係については全学あげての体制を整えて取組んでいく必要があると考えている。

その二つは大学の取組内容である。事業実施上の課題で述べたが、現在取組んでいる内容は基礎実習・インターンシップでのボランティア実習に関するする内容、卒業生支援に関する内容、保育職・教職への就職に関する内容、保護者支援に関する内容等である。いずれも大学として必要な取組内容なので継続発展して取組んでいく必要があると考えている。

平成22年度　文部科学省「大学生の就業力育成支援事業」選定プログラム
「保育職・教職のための体験型就業力育成」
事業報告書（外部評価書）　平成 24 年 3 月

2012年3月　印刷・発行

ノートルダム清心女子大学　教職就業力育成プログラム実施本部
〒700-8516　岡山市北区伊福町2丁目16番9号
TEL　（086）252－4061
FAX　（086）252－4061

Notre Dame Seishin University